都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書　第三冊

新田本村遺跡（しんでんほんむらいせき）

２００６年３月

高松市教育委員会

例　　言

1．本報告書は，都市計画道路室町新田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第三冊であり，高松市新田町に所在する新田本村遺跡（しんでんほんむらいせき）の調査報告を収録した。

2．発掘調査地ならびに調査期間は，次のとおりである。

調査地　　高松市新田町

本調査　　平成８年12月２日～平成９年４月11日

　　平成９年10月22日～平成９年12月12日

3．発掘調査および本報告書作成は，高松市教育委員会が実施した。

4．調査から報告書作成に至るまで，下記の関係機関ならびに方々のご指導とご協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県教育委員会　（財）香川県埋蔵文化財センター

太田　儔

5．調査は，文化振興課文化財専門員 山本英之（当時）と讃岐文化遺産研究会 中西克也が担当した。

6．本報告書の執筆は，第１章第１節・第２章を文化振興課文化財専門員 大嶋和則，その他は中西が行った。編集は大嶋・中西が行った。

7．本報告書の遺物写真撮影は，西大寺フォトに委託した。

8．発掘調査で得られた全ての資料は，高松市教育委員会で保管している。

9．本報告書における表記および記述に関する凡例は，以下のとおりである。

（1）使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＡ　柱列　　ＳＢ　掘立柱建物跡　　ＳＤ　溝　　ＳＥ　井戸　　ＳＫ　土坑

ＳＰ　柱穴　　ＳＸ　性格不明遺構

（2）遺物観察表中の表記方法は次のとおりである。

a．法量の中で（　）を付けているのは土器の残存値であり，〈　〉を付けているのは土器以外の遺物の長さ・幅・厚さである。

b．調整と色調が内外面とも同じ場合には内外面と表記している。

c．土器胎土の粒土表記の基準

微砂：非常に細かい　細砂：0.5㎜以下　粗砂：0.5～１㎜　細礫：１㎜以上

（3）挿図と附図の座標は国土座標第Ⅳ座標系（日本測地系）である。

（4）方位の北は，国土座標第Ⅳ座標系（日本測地系）の北であり，標高は東京湾平均海面からのプラス値である。

（5）土壌及び土器観察の色調表現は，『新版　標準土色帖』（農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）による。

（6）挿図の一部に国土地理院地形図「高松北部」「高松南部」（平成12年度修正測量）と高松都市計画図「新田１」を一部改変して使用した。

本 文 目 次

第１章　調査の経緯と経過
第１節　調査の経緯 …… 1
第２節　調査の経過 …… 1

第２章　地理的・歴史的環境
第１節　地理的環境 …… 2
第２節　歴史的環境 …… 2

第３章　調査の成果
第１節　調査区の位置 …… 4
第２節　遺構・遺物 …… 5
１．１工区 …… 5
１　古代 …… 5
２　江戸時代 …… 67
1) 第３面 …… 68
2) 第２面 …… 71
3) 第１面 …… 73
３　近代 …… 73
４　第１～３面出土遺物 …… 73
２．２工区 …… 76
１　弥生時代 …… 76
２　古代 …… 78
３　江戸時代 …… 98
４　２工区包含層出土遺物 …… 108
３．３工区 …… 108
１　古代 …… 110
２　江戸時代 …… 125
３　３工区包含層出土遺物 …… 125
４．４工区 …… 131
１　古代 …… 132
５．５工区 …… 134
１　古代 …… 135
２　江戸時代 …… 145
３　５工区包含層出土遺物 …… 145
６．６工区 …… 146
１　弥生時代 …… 146
２　古代 …… 148
３　６工区包含層出土遺物 …… 154
第４章　まとめ
第１節　遺構の変遷 …… 157
第２節　ＳＤ１００６・ＳＤ３００２と条里地割 …… 162
第３節　出土遺物 …… 163
第４節　新田本村遺跡の性格と歴史的位置づけ …… 172

挿 図 目 次

第 1 図 遺跡位置図 1
第 2 図 調査区設定図 1
第 3 図 周辺主要遺跡位置図 3
第 4 図 調査区位置図 4
第 5 図 1 工区遺構配置図 6
第 6 図 1 工区北壁土層図 6
第 7 図 SB1001 平・断面図及び出土遺物実測図 7
第 8 図 SB1002 平・断面図及び出土遺物実測図 8
第 9 図 SB1003 平・断面図及び出土遺物実測図 9
第 10 図 SB1004 平・断面図 11
第 11 図 SB1005 平・断面図 11
第 12 図 SB1006 平・断面図 12
第 13 図 SB1007 平・断面図 12
第 14 図 SB1008 平・断面図 13
第 15 図 SB1009 平・断面図 13
第 16 図 SD1001 断面図及び出土遺物実測図 14
第 17 図 SD1002 断面図及び出土遺物実測図 15
第 18 図 SK1039・SD1004・1007 平・断面図 15
第 19 図 SD1004 出土遺物実測図 15
第 20 図 SD1005 断面図及び出土遺物実測図 16
第 21 図 SD1006 平・断面図 17
第 22 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (1) 18
第 23 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (2) 19
第 24 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (3) 20
第 25 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (4) 20
第 26 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (5) 21
第 27 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (6) 22
第 28 図 SD1006 上層出土遺物実測図 (7) 23
第 29 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (1) 24
第 30 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (2) 25
第 31 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (3) 26
第 32 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (4) 27
第 33 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (5) 28
第 34 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (6) 29
第 35 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (7) 30
第 36 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (8) 31
第 37 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (9) 32
第 38 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (10) 32
第 39 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (11) 33
第 40 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (12) 34
第 41 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (13) 35
第 42 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (14) 36
第 43 図 SD1006 下層出土遺物実測図 (15) 37
第 44 図 SD1007 出土遺物実測図 37
第 45 図 SD1008 断面図 38
第 46 図 SD1009 断面図 38
第 47 図 SD1009 出土遺物実測図 (1) 38
第 48 図 SD1009 出土遺物実測図 (2) 39
第 49 図 SD1009 出土遺物実測図 (3) 40
第 50 図 SD1009 出土遺物実測図 (4) 41
第 51 図 SD1010 断面図及び出土遺物実測図 42
第 52 図 SD1011 出土遺物実測図 42
第 53 図 SD1012・1013 出土遺物実測図 43
第 54 図 SD1014 断面図及び出土遺物実測図 45
第 55 図 SD1016 断面図及び出土遺物実測図 46
第 56 図 SD1017 断面図及び出土遺物実測図 46
第 57 図 SD1018 出土遺物実測図 47
第 58 図 SD1019 断面図及び出土遺物実測図 47
第 59 図 SD1020 ～ 1022・1024 出土遺物実測図 48
第 60 図 SE1002 平・断面図及び出土遺物実測図 49
第 61 図 SE1003 平・断面図 50
第 62 図 SE1003 出土遺物実測図 51
第 63 図 SK1001 平・断面図及び出土遺物実測図 52
第 64 図 SK1002 平・断面図及び出土遺物実測図 52
第 65 図 SK1003 平・断面図 52
第 66 図 SK1004 平・断面図及び出土遺物実測図 53
第 67 図 SK1005・1006 平・断面図 53
第 68 図 SK1008 平・断面図 53
第 69 図 ＳＤ 1003, SK1010・1011 平・断面図及び出土遺物実測図 55
第 70 図 SK1012・1013 平・断面図及び出土遺物実測図 56
第 71 図 SK1014・1016・1018 平・断面図 56
第 72 図 SK1019 平・断面図及び出土遺物実測図 56
第 73 図 SK1020・1022・1024 平・断面図 57
第 74 図 SK1025 平・断面図及び出土遺物実測図 57
第 75 図 SK1028 平・断面図 57
第 76 図 SK1029・1030 平・断面図及び出土遺物実測図 58
第 77 図 SK1031 ～ 1034 平・断面図 58
第 78 図 SK1036 平・断面図 59
第 79 図 SK1037・1038 平・断面図及び出土遺物実測図 59

第 80 図 SK1039 出土遺物実測図 60
第 81 図 SK1048 ～ 1050 平・断面図 61
第 82 図 SX1001 出土遺物実測図 61
第 83 図 1 工区 SP 出土遺物実測図 62
第 84 図 1 工区第 4 面出土遺物実測図（1） 63
第 85 図 1 工区第 4 面出土遺物実測図（2） 64
第 86 図 1 工区第 4 面出土遺物実測図（3） 65
第 87 図 1 工区第 4 面出土遺物実測図（4） 66
第 88 図 第 1 ～ 3 面遺構平面図 67
第 89 図 SA01 平・断面図 68
第 90 図 SE01 平・断面図及び出土遺物実測図 68
第 91 図 SK01 平・断面図及び出土遺物実測図 69
第 92 図 SD10・15 断面図及び出土遺物実測図 69
第 93 図 SD11 断面図 69
第 94 図 SD16・17・撹乱断面図及び出土遺物実測図 70
第 95 図 SD18・19・21 断面図 70
第 96 図 SX01 出土遺物実測図 71
第 97 図 撹乱出土遺物実測図 71
第 98 図 SD04 断面図及び出土遺物実測図 72
第 99 図 SD05 断面図及び出土遺物実測図 72
第 100 図 SD06・07・09 断面図 72
第 101 図 SD08 断面図及び出土遺物実測図 72
第 102 図 SD03 出土遺物実測図 74
第 103 図 第 1 ～ 3 面出土遺物実測図 74
第 104 図 2 工区遺構配置図 75
第 105 図 2 工区北壁土層図 76
第 106 図 SD2016 平・断面図 76
第 107 図 SD2016 出土遺物実測図 77
第 108 図 SB2001 平・断面図及び出土遺物実測図 79
第 109 図 SB2002 平・断面図及び出土遺物実測図 80
第 110 図 SB2003 平・断面図及び出土遺物実測図 81
第 111 図 SB2004 平・断面図及び出土遺物実測図 82
第 112 図 SB2008 平・断面図及び出土遺物実測図 83
第 113 図 SB2009 平・断面図及び出土遺物実測図 83
第 114 図 SB2010 平・断面図及び出土遺物実測図 85
第 115 図 SB2011 平・断面図及び出土遺物実測図 85
第 116 図 SD2014 断面図及び出土遺物実測図 86
第 117 図 SD2015 断面図及び出土遺物実測図（1） 86
第 118 図 SD2015 出土遺物実測図（2） 87
第 119 図 SD2018 ～ 2020 断面図及び出土遺物実測図 88
第 120 図 SD2021 断面図及び出土遺物実測図 89
第 121 図 SD2022・2024・2026 断面図及び出土遺物実測図 89
第 122 図 SD2038 断面図及び出土遺物実測図 91
第 123 図 SD2040 断面図及び出土遺物実測図 92
第 124 図 SD2042 断面図及び出土遺物実測図 92
第 125 図 SK2006 平・断面図及び出土遺物実測図 93
第 126 図 SK2012 平・断面図及び出土遺物実測図 93
第 127 図 SK2021 平・断面図 93
第 128 図 SP2078・2079 平・断面図 94
第 129 図 2 下区 SP 出土遺物実測図（1） 94
第 130 図 2 下区 SP 出土遺物実測図（2） 95
第 131 図 2 下区 SP 出土遺物実測図（3） 96
第 132 図 SP2163 平・断面図及び出土遺物実測図 97
第 133 図 SB2005 平・断面図及び出土遺物実測図 98
第 134 図 SB2006 平・断面図及び出土遺物実測図 100
第 135 図 SB2007 平・断面図及び出土遺物実測図 101
第 136 図 2 下区 SD 断面図及び出土遺物実測図 102
第 137 図 SE2001 平・断面図及び出土遺物実測図 104
第 138 図 SK2004・SE2002 平・断面図 105
第 139 図 SE2002 出土遺物実測図 105
第 140 図 SK2001 平・断面図及び出土遺物実測図 106
第 141 図 SK2002・2003 平・断面図 106
第 142 図 SK2004 出土遺物実測図 106
第 143 図 SK2010 平・断面図及び出土遺物実測図 107
第 144 図 SK2014・2015・2017 平・断面図及び出土遺物実測図 107
第 145 図 SK2020 平・断面図及び出土遺物実測図 108
第 146 図 2 下区 SP 出土遺物実測図 108
第 147 図 2 下区包含層出土遺物実測図 109
第 148 図 3 下区遺構配置図 109
第 149 図 3 下区南壁土層図 110
第 150 図 SB3001 検出平面図 111
第 151 図 SB3001 平・断面図及び出土遺物実測図 111
第 152 図 SB3002 平・断面図 112
第 153 図 SD3001 平・断面図及び出土遺物実測図 113
第 154 図 SD3002・3023 平・断面図 114
第 155 図 SD3002 出土遺物実測図（1） 115
第 156 図 SD3002 出土遺物実測図（2） 116
第 157 図 SD3002 出土遺物実測図（3） 117
第 158 図 SD3002 出土遺物実測図（4） 118
第 159 図 SD3003～3007・3009～3020 平・断面図 119
第 160 図 SD3003～3007・3009～3019 出土遺物実測図 120
第 161 図 SD3008・3021・6001・6002 平・断面図 121
第 162 図 SD3008 断面図及び出土遺物実測図 122
第 163 図 SD3021 出土遺物実測図 123

第 164 図　SD3022 断面図及び出土遺物実測図　123
第 165 図　3 工区 SK 平・断面図及び出土遺物実測図　124
第 166 図　羣跡出土遺物実測図　125
第 167 図　3 工区包含層出土遺物実測図（1）　126
第 168 図　3 工区包含層出土遺物実測図（2）　127
第 169 図　3 工区包含層出土遺物実測図（3）　128
第 170 図　3 工区包含層出土遺物実測図（4）　129
第 171 図　3 工区包含層出土遺物実測図（5）　130
第 172 図　4 工区遺構配置図　131
第 173 図　4 工区南壁土層図　131
第 174 図　SD4001 断面図及び出土遺物実測図　132
第 175 図　SD4002 出土遺物実測図　133
第 176 図　SD4003 断面図及び出土遺物実測図　134
第 177 図　5 工区遺構配置図　134
第 178 図　5 工区北壁土層図　135
第 179 図　SB5001 平・断面図及び出土遺物実測図　135
第 180 図　SB5002 平・断面図　135
第 181 図　SB5003 平・断面図及び出土遺物実測図　136
第 182 図　SB5004 平・断面図及び出土遺物実測図　137
第 183 図　SB5006 平・断面図及び出土遺物実測図　138
第 184 図　SA5001 平・断面図　138
第 185 図　SD5001 断面図及び出土遺物実測図　139
第 186 図　SD5002 断面図　139
第 187 図　SD5002 出土遺物実測図（1）　139
第 188 図　SD5002 出土遺物実測図（2）　140
第 189 図　SD5003・5005 断面図及び出土遺物実測図　141
第 190 図　SD5006 ～ 5010 断面図及び出土遺物実測図　142
第 191 図　SK5002 出土遺物実測図　143
第 192 図　SK5003 ～ 5005 平・断面図及び出土遺物実測図　144
第 193 図　5 工区 SP 出土遺物実測図　144
第 194 図　SK5001 平・断面図　144
第 195 図　SP5039 平・断面図　145
第 196 図　5 工区 SP 平面図　145
第 197 図　5 工区包含層出土遺物実測図　145
第 198 図　6 工区遺構配置図　146
第 199 図　6 工区南壁土層図　146
第 200 図　SD6021 平・断面図及び出土遺物実測図　147
第 201 図　SK6001 平・断面図及び出土遺物実測図　147
第 202 図　SB6001 平・断面図及び出土遺物実測図　149
第 203 図　SD6001 出土遺物実測図　150
第 204 図　SD6002 出土遺物実測図（1）　151
第 205 図　SD6002 出土遺物実測図（2）　152
第 206 図　SD6003 断面図及び出土遺物実測図　153
第 207 図　6 工区 SD 断面図及び出土遺物実測図　153
第 208 図　6 工区 SP 出土遺物実測図　154
第 209 図　6 工区包含層出土遺物実測図（1）　155
第 210 図　6 工区包含層出土遺物実測図（2）　156
第 211 図　遺構変遷図（1）　158
第 212 図　遺構変遷図（2）　159
第 213 図　遺構変遷図（3）　160
第 214 図　周辺条里地割　162
第 215 図　礎集成図（1）　165
第 216 図　礎集成図（2）　166
第 217 図　土馬集成図（1）　169
第 218 図　土馬集成図（2）　170

図 版 目 次

図版１－１　遺跡全景
　－２　１工区全景
　－３　２工区全景
図版２－１　３工区全景
　－２　５・６工区全景
　－３　１工区第４面完掘状況（東から）
　－４　１工区第４面完掘状況（東から）
図版３－１　１工区第４面完掘状況（西から）
　－２　１工区第４面完掘状況（東から）
　－３　ＳＢ1001(西から）
　－４　ＳＢ1002(北から）
　－５　ＳＢ1003(北から）
　－６　ＳＢ１002～１006(東から）
　－７　ＳＤ１006(西から）
　－８　ＳＤ１006遺物出土状況
図版４－１　ＳＥ１002(東から）
　－２　ＳＫ１139(東から）
　－３　１工区第３面完掘状況（東から）
　－４　ＳＥ01(北から）
　－５　１工区第２面完掘状況（東から）
　－６　１工区第１面完掘状況（東から）
　－７　２工区完掘状況（東から）
　－８　２工区完掘状況（東から）
図版５－１　２工区完掘状況（西から）
　－２　ＳＢ２001(南から）
　－３　ＳＢ２001　Ｐ－３柱材
　－４　ＳＢ２002(南から）
　－５　ＳＢ２003(南から）
　－６　ＳＢ２004(南から）
　－７　ＳＰ２079柱材
　－８　ＳＰ２163遺物出土状況（東から）
図版６－１　ＳＢ２005(南から）
　－２　ＳＢ２006(西から）
　－３　ＳＥ２002(東から）
　－４　ＳＫ２004石臼
　－５　３工区完掘状況（西から）
　－６　３工区完掘状況（西から）
　－７　ＳＢ３001検出状況（南から）
　－８　ＳＢ３001(西から）
図版７－１　ＳＢ３002(西から）
　－２　ＳＤ３002土層断面
　－３　ＳＤ３003～３022(西から）
　－４　ＳＤ３008(西から）
　－５　４工区完掘状況（東から）
　－６　ＳＤ４001(北から）
　－７　５工区完掘状況（東から）
　－８　ＳＢ５003(東から）
図版８－１　ＳＢ５006(南から）
　－２　ＳＢ５004(東から）
　－３　ＳＤ５002～５005(西から）
　－４　５工区ＳＰ（東から）
　－５　６工区完掘状況（東から）
　－６　ＳＫ６001(南から）
　－７　ＳＢ６001(西から）
　－８　ＳＤ６002(南から）
図版９　出土遺物（１）
図版10　出土遺物（２）
図版11　出土遺物（３）
図版12　出土遺物（４）
図版13　出土遺物（５）
図版14　出土遺物（６）
図版15　出土遺物（７）
図版16　出土遺物（８）
図版17　出土遺物（９）
図版18　出土遺物（10）
図版19　出土遺物（11）
図版20　出土遺物（12）
図版21　出土遺物（13）
図版22　出土遺物（14）
図版23　出土遺物（15）
図版24　出土遺物（16）
図版25　出土遺物（17）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

第１図　遺跡位置図

都市計画道路室町新田線街路事業に伴い，事業主体である都市開発部都市計画課より道路予定地における埋蔵文化財の照会があった。当該地には周知の埋蔵文化財は確認されていないが，建設予定地面積が広大であること，隣接する県道高松志度線建設工事に先立ち香川県教育委員会が試掘調査を行なった結果，縄文時代から鎌倉時代にかけての小山・南谷遺跡を確認しており，周辺部に遺跡が埋没している可能性があることなどから，事前に道路予定地内について埋蔵文化財の有無を確認する必要があった。このような状況から平成７年３月に試掘調査を実施し，道路予定地内の３地区において埋蔵文化財を確認した。西側より川南・西遺跡，川南・東遺跡，新田本村遺跡の３遺跡である。都市計画課と協議を行った結果，道路建設前に発掘調査を実施し，記録保存を行うことで合意した。これにより平成８年度に川南・西遺跡及び川南・東遺跡，平成８・９年度に新田本村遺跡の発掘調査を行なうことで合意した。

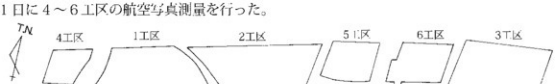
本報告書掲載の新田本村遺跡は，古代から中世の集落跡を確認したことから，平成８年度に約3,600㎡，平成９年度に約1,300㎡の範囲について本調査を実施した。

第２節　調査の経過

本遺跡は南北幅約22ｍ，東西約250ｍの細長い調査のため，国土地理院国土座標には準拠しないで，現状の道路や水路を利用して６区の調査区設定を行った。その区画は調査年度ごとに西側より仮称を付けた（第２図）。平成８年度は１～３工区，平成９年度は４～６工区の調査を実施した。

平成８年度の調査期間は，平成８年12月２日～平成９年４月11日であり，１工区・３工区・２工区の順に調査を実施した。１工区の調査は平成８年12月２日～平成９年２月24日であり，江戸時代の溝・土坑・井戸・３面の水田，古代の掘立柱建物跡・溝・井戸・土坑等を検出した。３工区の調査は平成９年２月14日～３月19日であり，江戸時代の溝・土坑・犂跡，古代の掘立柱建物跡・溝等を検出した。２工区の調査は３月14日～４月11日であり，江戸時代の掘立柱建物跡・溝・土坑・井戸，古代の掘立柱建物跡・溝・土坑，弥生時代の溝を検出した。

平成９年度の調査期間は，平成９年10月22日～12月12日であり，６工区・５工区・４工区の順に調査を実施した。10月22日～11月６日は，全工区で重機による排土作業後に遺構検出を行った。６工区の調査は11月７日～11月14日であり，江戸時代の溝・犂跡，古代の掘立柱建物跡・溝，弥生時代の土坑を検出した。ＳＤ6001は３工区のＳＤ3008，ＳＤ6002は３工区のＳＤ3021と同一の遺構である。５工区の調査は11月13日～12月３日であり，江戸時代の土坑・柱穴群，古代の掘立柱建物跡・溝を検出した。４工区の調査は12月２日～５日であり，平安時代の溝を検出した。12月11日に４～６工区の航空写真測量を行った。



第２図　調査区設定図

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松市は香川県のほぼ中央，瀬戸内海に面している。市域の大部分は高松平野によって占められている。平野の境界を画する低位山塊及び屋島・紫雲山等の独立山塊は，侵食解析から取り残されて形成されたメサまたはビュートと呼ばれるもので，讃岐のの どかな田園風景の象徴の一つである。また，高松平野は讃岐山脈に端を発する中小河川により形成された沖積地であり，西から本津川，香東川，春日川，新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流している。本調査地の位置する古高松（高松町・新田町・春日町）は，春日川，新川にほど近い地域である。両河川は水量に乏しく，平野中央部を流れる香東川のように大規模な扇状地は見られない。また，古高松の北部は，江戸時代初期の干拓により陸地化されたものであり，寛永１０年（１６３３年）の『讃岐国絵図』によると，当時の海岸線はかなり内陸に入り込んでおり，屋島は島として描かれている。北を屋島に面した海岸（旧地形による），東を立石山塊，南を久米山丘陵，西を春日川によって限られた高松平野北東部の一角は，古代・中世を通じて「高松」（讃岐国山田郡高松郷）と呼ばれたが，天正１６年（１５８８年）の高松城築城以後は，城下高松に対して「古高松」と呼称されてきた。江戸時代以前の古高松の地形が推定可能な史料として『南海通記』がある。その中に天正１０年（１５８２年）頃の地形として「…春日ノ里ニ至ル，此所ハ屋島山，石清尾山両受ノ間，入海ニテ山田郡小山ノ下マデ潮サシ来ル，遠干潟ナ春日里ト北郷ノ間，海ノ中道アツテ通用ス。…」と記載している。ここでいう小山とは，現在の高松市新田町小山にあたると考えられ，この小山近辺まで海岸線が湾状に入り込んでいたと想定できる。

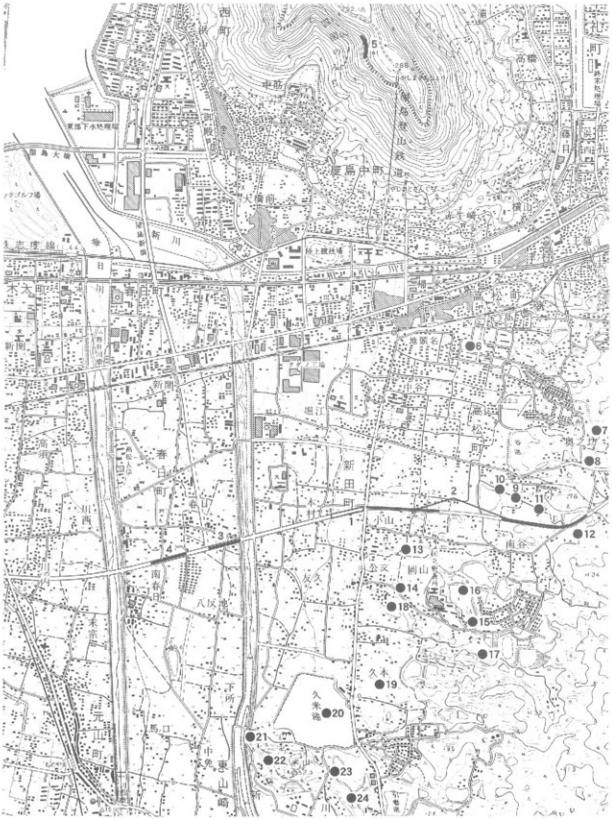
第２節　歴史的環境

本遺跡の周辺には，主に弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が存在する。弥生中期前半では奥の坊遺跡が見られる。多量の土器・石器に伴い分銅形土製品等も出土している。中期後半では久米山東側丘陵上に立地する高地性集落の久米池南遺跡がある。後期前半では大空遺跡，小山・南谷遺跡，奥の坊権現前遺跡がある。この中の大空遺跡は，香川県の弥生時代後期前半の標式土器が出土したことで知られる遺跡である。

古墳時代になると，碧玉製鍬形石等が出土した前期前方後円墳である高松市茶臼山古墳が築造されている。また，石棺を持ち亀甲型陶棺や銅鏡が出土した久本古墳や，小山古墳，山下古墳等の後期古墳の分布が顕著である。

古代の遺跡では，『日本書紀』にも記載されている古代山城屋嶋城の存在が知られている。近年の調査で城門遺構や石垣が検出されている。また隣接する小山・南谷遺跡では高松平野の条里地割に先行し，方向の異なる条里地割が発見されており，今回の調査でも同様の遺構が確認できている。古代寺院としては，瓦を出土している山下廃寺あるが，詳細は不明である。

中世に入ると高松平野でも武士の台頭が目立つ。特に中央政権との関わりも多く，数多くの戦いが行なわれている。源氏と平氏が屋島に戦い，那須与一や佐藤継信の戦い振りが『平家物語』によって今日まで伝えられている。南北朝期には讃岐の守護となった高松（舟木）頼重が喜岡城を築城するが，北朝方の細川定禅の攻撃により落城した。その後，喜岡城は秀吉の四国征伐時にも落城している。中世の遺跡としては，中世末から近世初頭の溝で区画された屋敷跡が検出された川南・西遺跡があげられる。近世の遺跡としては，川南・東遺跡等の農村集落が見られる。



1 新田本村遺跡	2 小山・南谷遺跡	3 川南・東遺跡	4 川南・西遺跡	5 屋敷城跡城門
6 喜岡城跡	7 奥の坊遺跡	8 奥の坊権現前遺跡	9 長尾１号墳	10 長尾２号墳
11 長尾３号墳	12 南谷遺跡	13 小山古墳	14 山下古墳	15 岡山古墳群
16 岡山小古墳群	17 漆谷古墳群	18 山下廃寺	19 久本古墳	20 久米池遺跡
21 諏訪神社遺跡	22 久米山遺跡群	23 久米池南遺跡	24 高松市茶臼山古墳	

第３図　周辺主要遺跡位置図（Ｓ：1/25,000）

第３章　調査の成果

第１節　調査区の位置

本遺跡は高松平野の北東部に位置し，調査地は東側の立石山山地からなだらかに下がった傾斜地の西端に当たり，東方から西方に緩やかな傾斜で低くなっている。本遺跡の調査は，道路建設に伴う発掘調査であるため東西方向に長い調査区に設定された。第１章第２節で前述したように，調査地は現有道路等により６区に区画され，１工区～６工区と呼称した。１～３工区は平成８年度，４～６工区は平成９年度に調査を実施した。

１工区は，本遺跡の西部に位置する調査区であり，西側は用水路を挟んで４工区となっており，東側は畦道により２工区と区画されている。調査以前の状況は水田であり，地表面の標高は 3.10 m前後である。

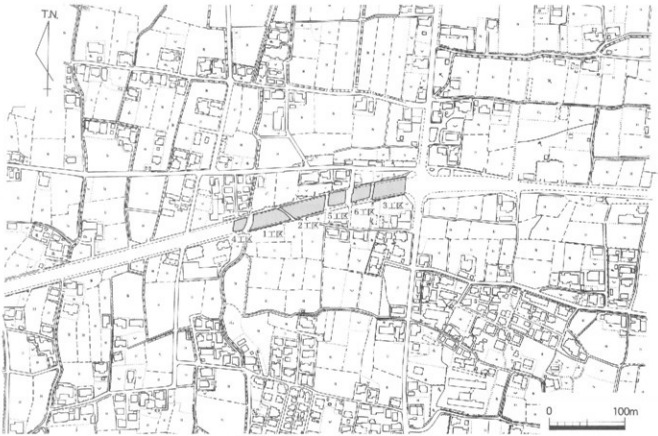
２工区は，本遺跡の中央より西側にあたる調査区であり，東西共に畦道によって区画されている。調査以前は水田であり，地表面の標高は東端 3.90 m，西端 3.20 mである。

３工区は，東端にあたる調査区であり，西側は宅地により区画されている。調査以前の状況は水田であり，地表面の標高は東端 5.60 m，西端 5.20 m前後である。

４工区は，本遺跡の西端にあたる調査区であり，東側は用水路により１工区と区画される。調査以前の状況は水田であり，地表面の標高は 3.00 m前後である。

５工区は，本遺跡の中央より東側にあたる調査区であり，西側は畦道に，東側は現有道路により区画される。調査以前は宅地であった。地表面の標高は 5.10 m前後である。

６工区は，本遺跡の東部にあたる調査区であり，西側は現有道路で区画される。調査以前は宅地であった。地表面の標高は 5.20 m前後である。



第４図　調査区位置図（S：1/5,000）

第2節　遺構・遺物

1．1 工区

1工区は本遺跡の西部に位置する。調査区の平面形は台形を呈し，南側の長さは約57.50 m，北側は28.50 m，幅は約21.00 mである。調査区中央の南北軸座標値はX＝146.770，東西軸座標値はY＝55.710である。西端は現有のコンクリート水路，東端は細い農道に区画される。遺構面は4面あり，第1～3面は江戸時代，第4面は古代であり，多数の遺構が検出された。

土層の堆積はほぼ水平堆積をなし，上層より現水田と4枚の近世条里型水田の耕作土と床土が交互に堆積している。近世条里型水田の第3層が第1遺構面，第4層が第2遺構面，第5層が第3遺構面である。第4遺構面は地山を検出面としている。

1　古代

(1)　掘立柱建物跡

SB1001（第7図）

調査区南西隅において検出した掘立柱建物跡である。検出した標高は2.00 mである。北西側の一部と南側が調査区外に延びているため全容は不明であるが，検出した規模は東西3間×南北4間以上（4.57 m×5.25 m以上）である。検出した柱穴は10個であり，東西の芯芯間距離は1.35 m，南北は1.30 mを測る。建物の主軸方位はN－18°－Eである。柱穴の平面形は円形と隅丸方形を呈し，円形の直径は0.55～0.85 m，隅丸方形は0.90 m前後を測る。深さは0.30～0.50 mである。P－1・2の底面には柱痕の小穴を検出し，P－3の掘り方は3方向に段を有し，土層断面に柱痕が見られる。

遺物は，土師器杯（1・2），同椀（3），同鉢（4），同甕（5～7），同高杯（8），須恵器杯蓋（9），同杯（10～12），同壺（13），飯蛸壺（14）である。

1・2は口縁部内面を内方に屈曲させ，内面を沈線状に作る。2の内面は放射状の暗文が施される。3の口縁部は細くなり，体部外面にハケが施される。5の口縁部内面と6の体部内面には横方向のハケが施され，7の体部外面には縦方向のハケが施される。

9は器高が低く，口縁部が短く屈曲する。

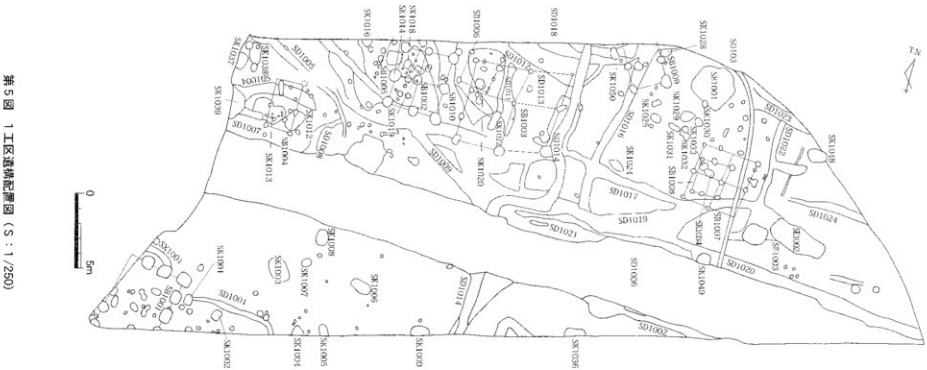
SB1002（第8図）

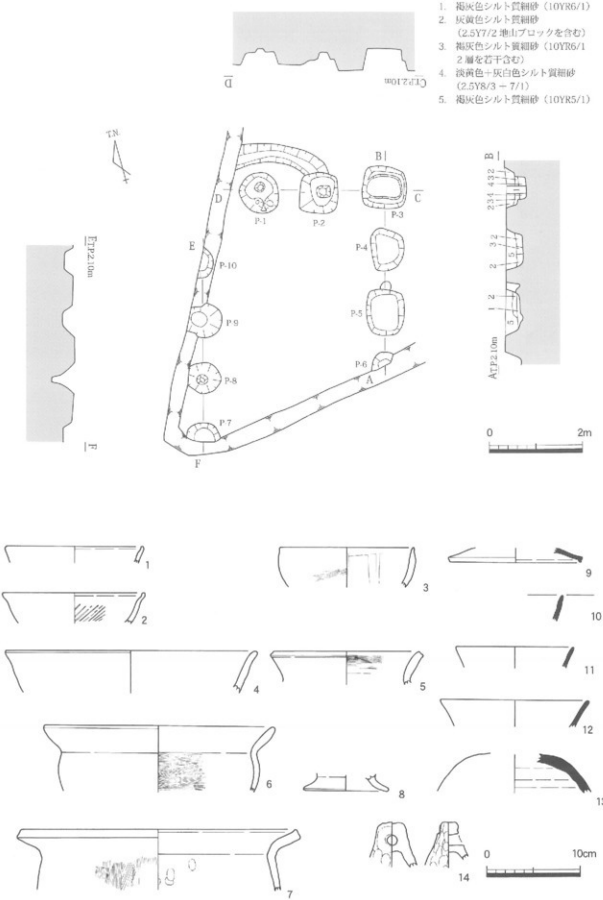
調査区北西において検出した総柱の掘立柱建物跡であり，SB 1005と重複し，SD 1009・1010を切っている。検出した標高は2.00 m前後である。規模は，東西2間×南北2間（4.10×4.40 m）である。柱穴は9個であり，東西の芯芯間距離は1.50～1.75 m，南北は1.90～2.00 mを測る。建物の主軸方位はN－4°－Eである。柱穴の平面形は円形および不整な楕円形を呈し，直径は0.55～0.85 m，深さは0.30～0.44 mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。P－6・7・9は底面に柱痕の小穴を検出した。柱穴の埋土は黄灰色シルト質極細砂・灰白色シルト質細砂である。

遺物は，土師器杯（15～19），同甕（20），同鉢（21），須恵器杯（22～24），鉄釘（25）である。

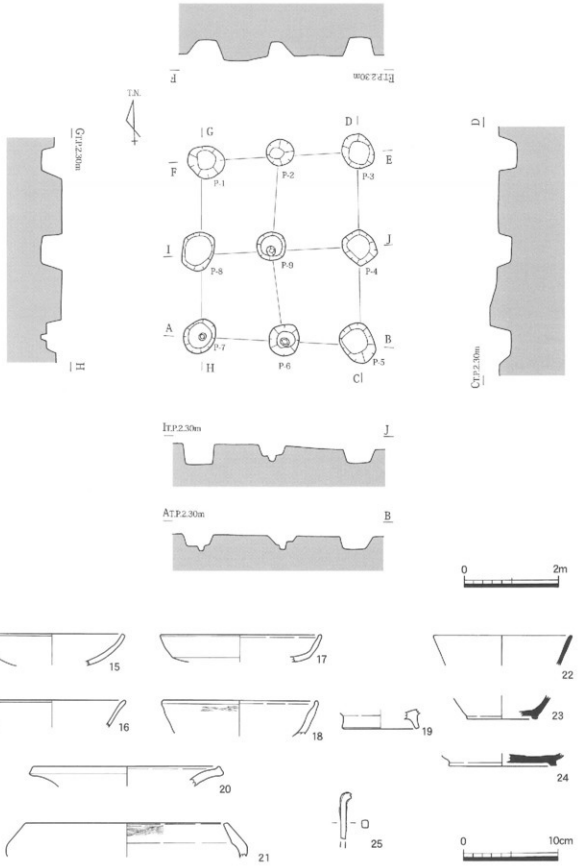
15は内湾する体部で，外面にわずかな指頭圧痕が施され，黒斑が見られる。16の口縁部はやや外反する。17は器高が低く，体部と底部の境に若干の稜を有する。底部外面はハケ後にヘラナデが施される。18は器高の高い杯で，口縁部内面にわずかな凹みを有する。体部外面の一部にヘラミガキが見られる。19の高台は長い。

22は直線的な体部であり，23・24の高台は断面四角で短い。

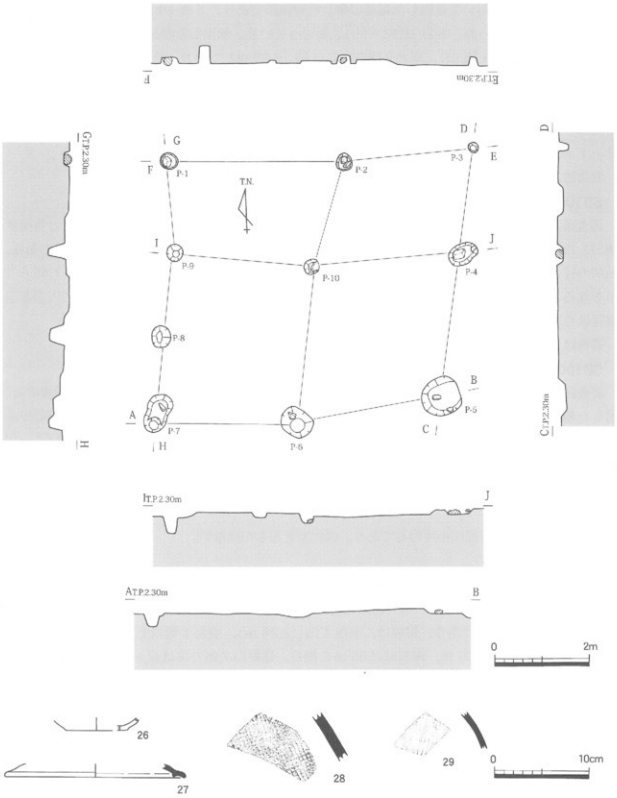

0
5m
N
SD1001
SD1002
SD1003
SD1004
SD1005
SD1006
SD1007
SD1008
SD1009
SD1010
SD1011
SD1012
SD1013
SD1014
SD1015
SD1016
SD1017
SD1018
SD1019
SD1020
SD1021
SD1022
SD1023
SD1024
SK1001
SK1002
SK1003
SK1004
SK1005
SK1006
SK1007
SK1008
SK1009
SK1010
SK1011
SK1012
SK1013
SK1014
SK1015
SK1016
SK1017
SK1018
SK1019
SK1020
SK1021
SK1022
SK1023
SK1024
SK1025
SK1026
SK1027
SK1028
SK1029
SK1030
SK1031
SK1032
SK1033
SK1034
SK1035
SK1036
SK1037
SK1038
SK1039
SK1040



第 7 図　SB1001 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80、1/4）



第 8 図　SB1002 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80. 1/4）



9図　SB1003 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80. 1/4）

SB1003（第9図）

調査区中央北側において検出した総柱の掘立柱建物跡であり，ＳＢ1002の東側に位置する。本遺構はＳＢ1006に切られ，ＳＤ1012・1013を切っている。検出した標高は2.10～2.20mである。規模は，東西2間（6.75m），南北2間ないし3間（6.95m）であり，柱穴の配置は乱れている。柱穴は10個であり，東西の芯芯間距離は1.50～1.75m，南北は1.90～2.00mを測る。建物の主軸方位はＮ－4°－Ｅである。柱穴の平面形は円形および不整な楕円形を呈し，直径は0.55～0.85mを測る。深さは0.30～0.44mであり，全体的には浅い柱穴である。Ｐ－7は北側に浅い段を有し，Ｐ－1・2・4～7・10の底面に1ないし2個の根石が残存する。

遺物は，土師器杯（26），須恵器杯蓋（27），甕（28・29）である。

SB1004（第10図）

調査区北西隅において検出した掘立柱建物跡であり，ＳＫ1012・1013，ＳＤ1004と重複する。検出した標高は1.90～2.00mである。規模は，東西1間×南北2間（2.05×3.60m）である。北西隅の柱穴は消滅し，検出できた柱穴は5個であり，東西の芯芯間距離は1.70m，南北は1.45と2.00mを測る。建物の主軸方位はＮ－0°－Ｅである。柱穴の平面形は円形および不整な楕円形を呈し，直径は0.25～0.50m，深さは0.14～0.27mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。

遺物は土師器の小片のみである。

SB1005（第11図）

調査区北西において検出した掘立柱建物跡であり，ＳＢ1002，ＳＫ1014・1018と重複する。検出した標高は2.10mである。掘立柱建物跡の大半は調査区外となるため，その全容は不明である。検出できた柱穴は南西隅の3個のみであり，規模は，東西1間（2.40m），南北1間以上（3.05m以上）である。東西の芯芯間距離は2.05m，南北は2.70mを測る。建物の主軸方位はＮ－8°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈し，直径は0.27～0.50m，深さは0.25～0.40mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。

遺物は土師器と須恵器の小片のみであり，図化できるものはない。

SB1006（第12図）

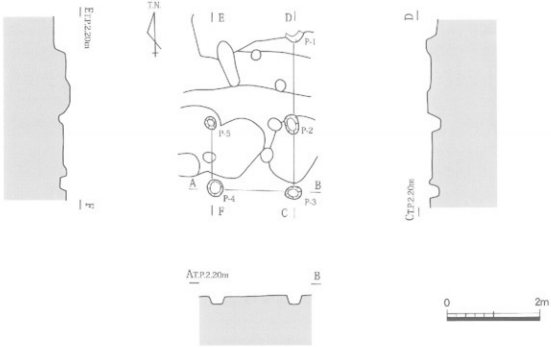
調査区中央北側において検出した掘立柱建物跡であり，ＳＢ1003を切り，ＳＤ1012と重複する。検出した標高は2.15mである。掘立柱建物跡の北側は調査区外となるため，その全容は不明である。検出できた柱穴は4個であり，規模は，東西1間（2.28m），南北1間以上（2.40m以上）である。東西の芯芯間距離は2.05m，南北は2.05mを測る。建物の主軸方位はＮ－12°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈し，直径は0.15～0.45m，深さは0.15～0.36mを測る。

遺物は土師器と須恵器の小片のみであり，図化できるものはない。

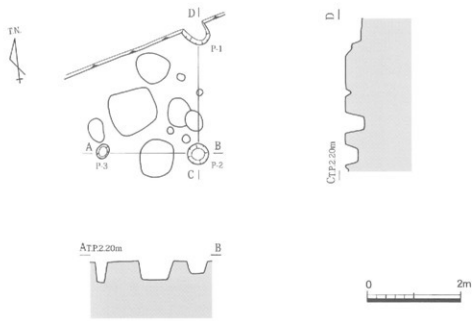
SB1007（第13図）

調査区東側において検出した総柱の掘立柱建物跡であり，ＳＢ1008，ＳＤ1017と重複し，ＳＤ03に切られる。検出した標高は2.40mである。南東隅の柱穴を欠損し，検出できた柱穴は8個であり，北側側柱の中央に位置する柱穴が西側に片寄る。規模は，東西2間×南北2間（4.10m×4.05m）である。東西の芯芯間距離は1.10mと2.70m，南北は1.90mを測る。建物の主軸方位はＮ－7°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈し，直径は0.30～0.40m，深さは0.13～0.33mを測る。Ｐ－4・5・8は底面に根石を残存する。

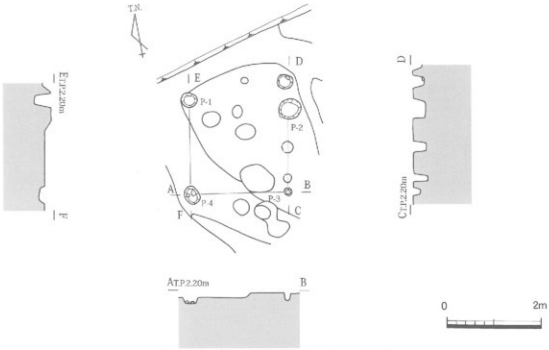
遺物は土師器と須恵器の小片のみであり，図化できるものはない。



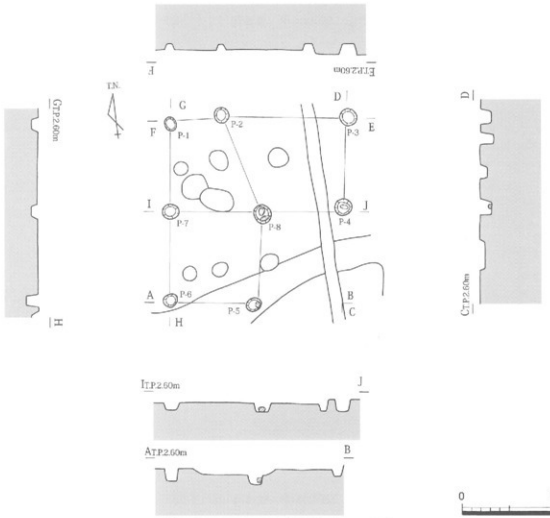
第 10 図　SB1004 平・断面図（S：1/80）



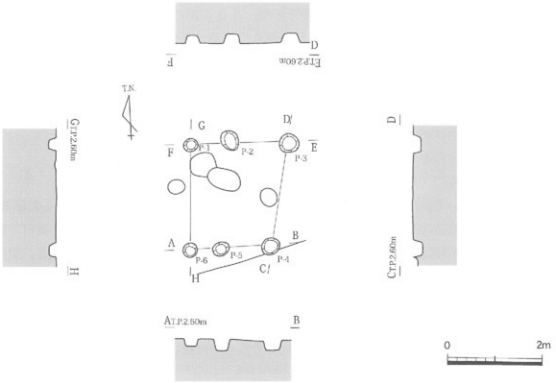
第 11図　SB1005 平・断面図（S：1/80）



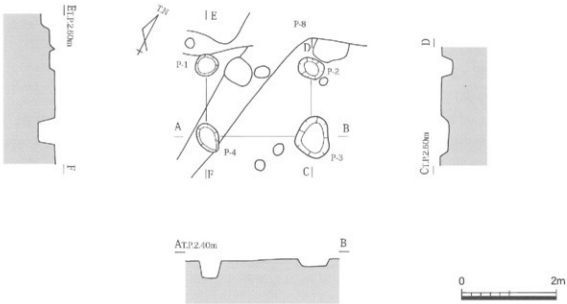
第 12 図　SB1006 平・断面図（S：1/80）



第 13 図　SB1007 平・断面図（S：1/80）



第 14 図　SB1008 平・断面図（S：1/80）



第 15 図　SB1009 平・断面図（S：1/80）

SB1008（第 14 図）

調査区東側において検出した掘立柱建物跡であり，ＳＢ 1007，ＳＤ 1017 と重複する。検出した標高は 2.35 mである。南東隅の柱穴の位置が西寄りのため，平面形は台形である。規模は，東西２間×南北１間（2.45 × 2.55 m）である。柱穴は６個であり，北側側柱と南側側柱の中央に位置する柱穴はやや西側に片寄る。東西の芯芯間距離は 0.85 mと 1.25 m，南北は 2.25 mを測る。建物の主軸方位はＮ－２°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈し，直径は 0.28 ～ 0.40 m，深さは 0.15 ～ 0.28 mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。

遺物は土師器の小片のみであり，図化できるものはない。

SB1009（第 15 図）

調査区北東隅において検出した掘立柱建物跡であり，ＳＤ 1016 と重複する。検出した標高は 2.23 m前後である。掘立柱建物跡の北側は調査区外となるため，その全容は不明である。検出できた柱穴は４個のみであり，規模は，東西１間（2.80 m），南北１間以上（2.15 m以上）である。東西の芯芯間距離は 2.25 m，南北は 1.65 mを測る。建物の主軸方位はＮ－ 27°－Ｗである。柱穴の平面形は不整な楕円形を呈し，直径は 0.50 ～ 0.88 m，深さは 0.17 ～ 0.36 mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。

遺物は土師器と須恵器の小片のみであり，図化できるものはない。

（２）溝

SD1001（第５・16 図）

調査区南西隅において検出した溝であり，西端をＳＫ 1001 に切られる。検出した標高は 2.00 mである。溝の方位はＮ－ 90°－Ｅで，東端で南方向に屈曲する。幅は 0.33 m，深さは 0.08 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，須恵器杯蓋（30），同杯（31），土師器甕（32）である。

30 は口縁部内面に短い返りが付き，天井部外面に回転ヘラケズリが施される。32 は口縁部内面に横方向のハケが施される。

SD1002（第５・17 図）

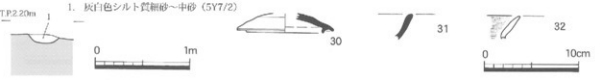
調査区中央南側において検出した溝であり，ＳＤ 1006，ＳＫ 1001 に切られる。検出した標高は 2.30 m前後である。溝の方位はＮ－ 90°－Ｅである。幅は 0.40 m，深さは 0.06 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，土師器椀（33），須恵器杯（34），同甕（35）である。

SD1003（第 69 図）

調査区中央においてＳＤ 1006 の上面で検出した溝であり，東端をＳＫ 1010 に切られる。溝の西側は削平される。検出面した標高は 2.10 m前後である。溝の方位はＮ－ 90°－Ｅである。幅は 0.37 m，深さは 0.12 mを測る。埋土は灰白色シルト質細砂である。

遺物は土師器と須恵器の小片のみであり，図化できるものはない。



第 16 図　SD1001 断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/40，1/4）

SD1004（第 18・19 図）

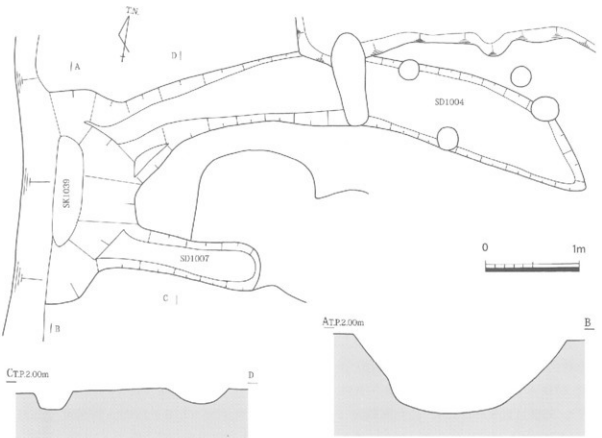
調査区北西隅において検出した溝であり，ＳＫ 1039 より派生する。ＳＢ 1004 と重複する。検出した標高は 1.95 mである。溝は南側に湾曲しながら東西方向に延び，幅は 0.60 ～ 0.80 m，深さは 0.14 mを測る。底面はＳＫ 1039 に向かって低くなる。

遺物は，土師器杯（36），同甕（37 ～ 40），須恵器杯（41・42），同甕（43）である。

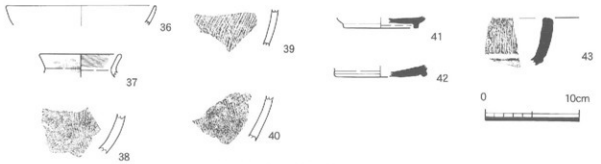
36 は若干内湾気味の器形である。37 は「く」字状の口縁部で，内外面にハケが施される。38 ～ 40 の外面はハケが施される。

41 は断面四角の高台を付け，42 は低い高台を有する。

第 17 図　SD1002 断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/40．1/4）



第 18 図　SK1039・SD1004・1007 平・断面図（Ｓ：1/40）



第 19 図　SD1004 出土遺物実測図（Ｓ：1/4）

SD1005（第５・20図）

調査区北西隅において検出した溝である。検出した標高は2.00 m前後である。溝の方位はＮ－60°－Ｗであるが，東南端付近で緩やかに屈曲し南方向に延びる。幅は0.20～0.60 m，北端の深さは0.44 mを測る。底面は北西に向かって低くなる。溝の断面は逆台形を呈する。浅い部分の埋土は単一層であるが，深い所では２層となる。

遺物は，土師器甕（44・45）であり，44は長胴で，外面は縦方向のハケ，内面ヘラケズリが施される。45は球形の体部で，外面上位に細いハケ，下位に太いハケが施される。

第20図　SD1005断面図及び出土遺物実測図（S：1/40，1/4）

SD1006（第21～43図）

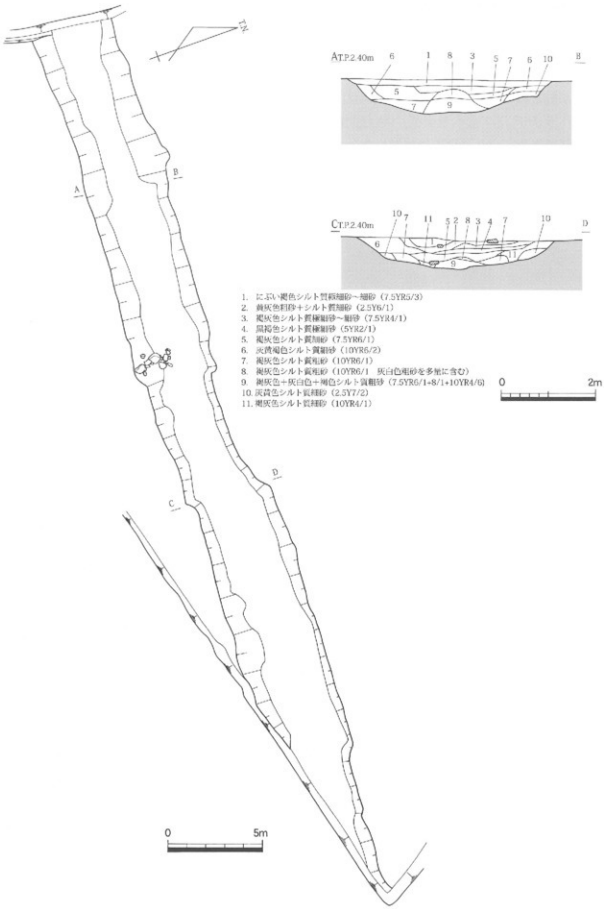
調査区中央において検出した大規模な溝である。検出した標高は1.95～2.30 mである。溝の方位はＮ－90°－Ｅであり，直線状に東西方向に延びるが，１工区の西側に位置する４工区では，ＳＤ1006の延長線上に同様な規模の溝は検出されていない。南北方向に延びるＳＤ4003は，本遺構より底面のレベルが低く大規模な溝であり，未調査部分において本遺構はＳＤ4003と合流すると考えられる。溝は中央付近でやや狭くなるが，天幅は3.30～4.50 m，検出面からの深さは0.55～0.90 mを測る。溝の断面形状はなだらかな傾斜で舟底形を呈する。底面の標高は東端で2.00 m，西端で1.20 mであり，0.80 mの比高差で東から西に向かって低くなる。本遺構の中央において集石が検出されるが，そのレベルは溝の上面とほぼ同じであり，その位置からＳＤ1014に伴う集石である可能性も考えられる。

溝内より多量の遺物が出土しており，大別して上層・下層の２つに分けて取り上げた。46～147は上層出土遺物であり（第22～28図），148～351は下層出土遺物である（第29～43図）。

上層出土遺物は，土師器杯（46～48・51～64），同椀（49・50・65～67），同皿（68），同高杯（69），同甕（70～75），須恵器杯蓋（76～81），同杯（82～101），同高杯（102・103），同壺（104～107），同甕（108～112），灰釉陶器碗（113～115），転用硯（116・118），円面硯（117），飯蛸壺（119・120），土錘（121～123），カマド（124・125），羽口（126），砥石（127），石斧（128），不明石製品（129），骨（130），丸瓦（131～134），平瓦（135～147）である。

46は器高の低い杯で，体部はやや外湾する。47は直線状の体部であり，48の口縁部内面はわずかな沈線状の凹みを有する。51～64は平底の底部であり，51・52・58の底面はナデ，54・56・57・63の底面は回転ヘラキリ，60は回転ヘラキリ後に板目，61は回転ヘラキリ後にナデ，62は回転ヘラキリ後に中央を板目，周縁にナデが施される。49・50・65・66は黒色土器Ａ類であり，49・50・66は内面にヘラミガキが施され，65の底部は回転ヘラキリが施される。

70は口縁部内面に細かいヨコハケ，71・72は粗いヨコハケが施される。73・74の体部外面は縦方向の粗いハケが施される。

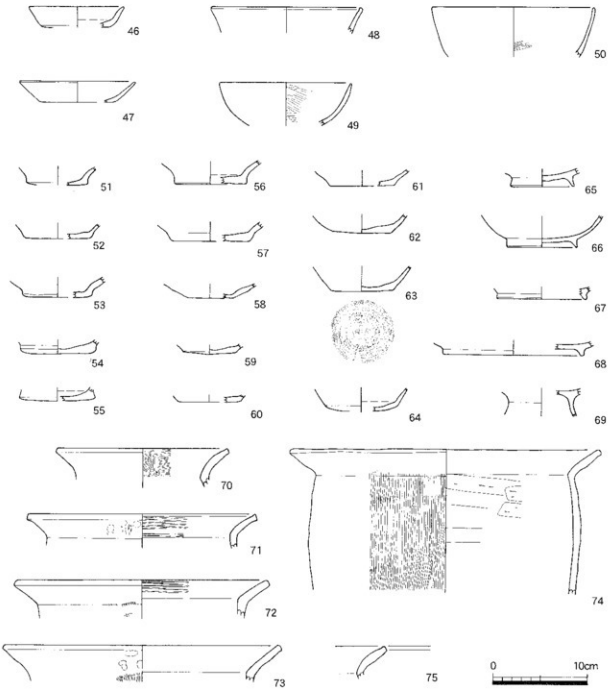


第 21 図　SD1006 平・断面図（S：1/200、1/80）

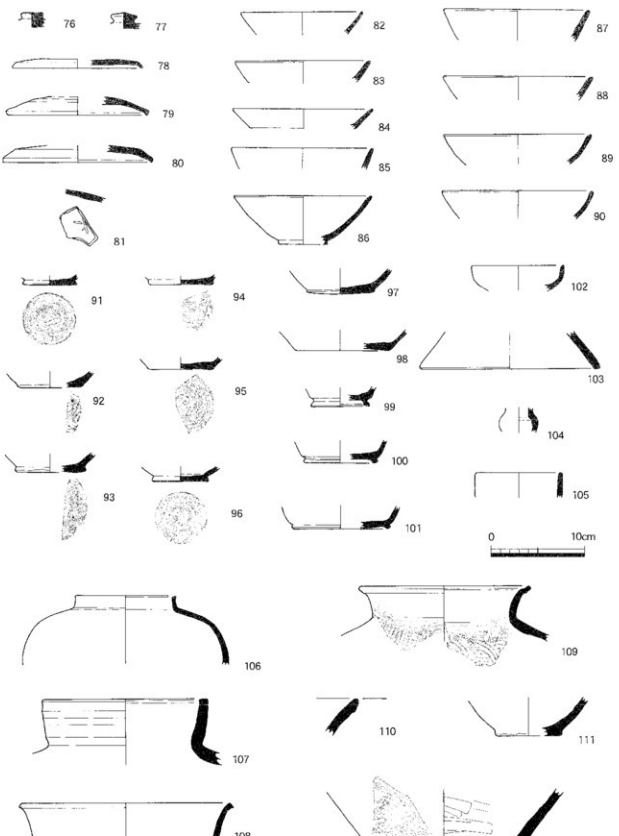
76・77は宝珠形の摘みである。78～80は口縁端部を短く下方に屈曲させる。78・79の犬井部外面は回転ヘラケズリが施される。81の内面に「大」の字状の刻印が見られる。

82～88は直線的な体部であり，89・90はわずかに内湾気味の体部である。86は器高の深い杯である。91～98は底部であり，91・93・94の底面は回転ヘラキリ後に中央を板口，周縁に回転ヘラケズリが施される。92の底面は回転糸切り，９５は回転ヘラキリ後にナデ，９６の中央はナデ，周縁に回転ヘラナデ，97はヘラナデ，98は回転ヘラキリ後に回転ヘラケズリが施される。99～101は高台付杯である。100の底面は回転ヘラケズリ，101はナデが施される。

104は小型の壺であり，106は短い口縁部が直立する短頸壺である。109は口縁端部が若干屈曲し，外面はカキ目後に平行タタキ，内面は当て具痕が残される。112の外面は格子タタキである。



第22図　SD1006上層出土遺物実測図（1）（S：1/4）



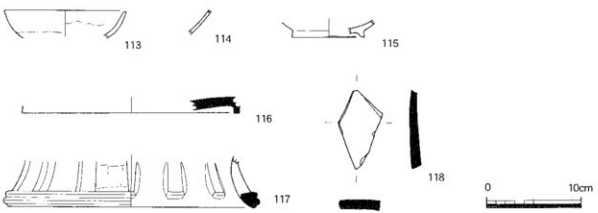
第 23 図　SD1006 上層出土遺物実測図（2）（S：1/4）

116・118は器面が非常に滑らかになっており，転用硯であると考えられる。117は円面硯の脚台部であり，長方形の透かしを有する。脚台端部は外側に拡張し明確な沈線を巡らす。

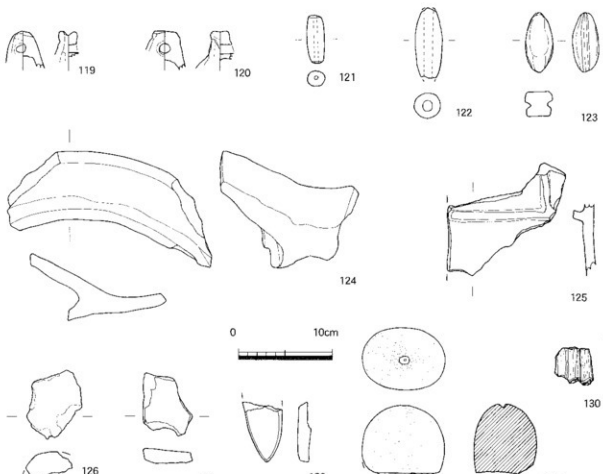
119・120は飯蛸壺の一部，121・122は管状の土錘，123は側面に溝を有する土錘である。

126は羽口の破片である。127は砂岩製の砥石で，1面を使用する。128は安山岩製の磨製柱状片刃石斧である。129は表面を磨かれ，上端に小さな凹みが穿かれる。

131・132・134は凹面に布目，凸面にゴザ目の後にナデが施される。133は凹面の布目上に糸切り痕，凸面に横方向のヘラナデが施される。



第24図　SD1006上層出土遺物実測図（3）（S：1/4）



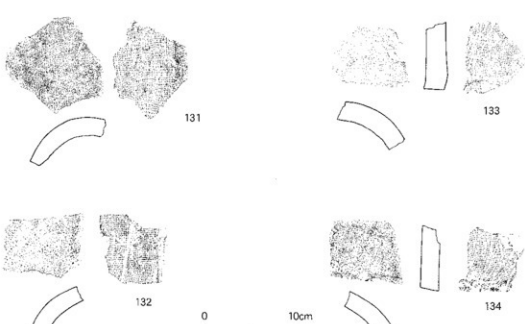
第25図　SD1006上層出土遺物実測図（4）（S：1/4）

135・136・146は凹面の布目上にヘラナデ，凸面にゴザ目が残り，側面を面取りする。137は凹面の布目上にヘラナデ，凸面にゴザ目が残り，側面にナデが施される。138は凹面の布目上に糸切り痕，凸面にゴザ目が残る。139は凹面の布目上に糸切り痕と指頭圧痕，凸面にゴザ目が残り，側面を面取りする。140～143は凹面に布目が残り，凸面に横方向のヘラナデが施される。144は凹面にナデ，凸面のゴザ目上にヘラケズリ，145は凹面にヘラナデが施され，凸面にゴザ目，147は凹面と側面に布目，凸面にゴザ目が残る。

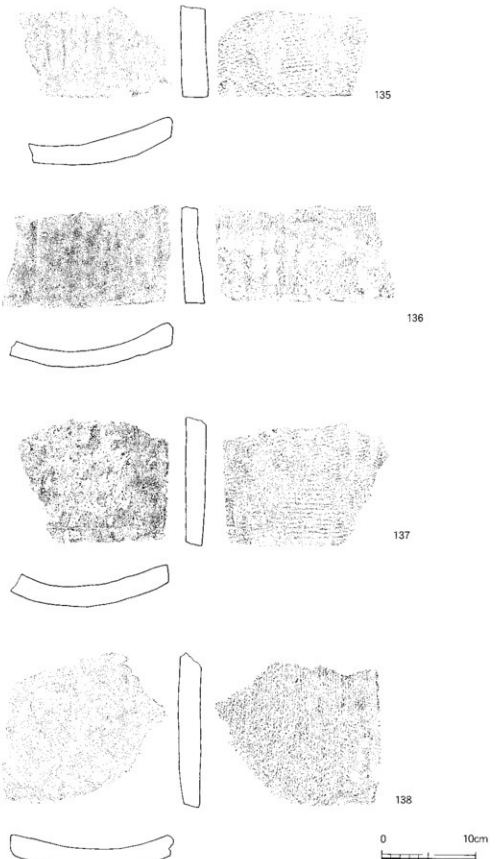
下層出土遺物は，土師器杯（148～172），同杯蓋（173），同高杯（174～179），同甕（180～184），土師質土器羽釜（185～193），同甑（194），同甕（195～198），須恵器杯身（199・200），須恵器杯蓋（201～215），同皿（216），同杯（217～235），同高杯（236～239），同壺（240～247・269～275），同甕（248～268・276～281），同横瓶（282），同鉢（283），灰釉陶器杯（284），同碗（285），青磁碗（286～288），緑釉陶器碗（289～296），製塩土器（297），土錘（298～305），カマド（306～311），銅製簪（312），銅製飾り金具（313・314），鉄斧（315），刀子（316），土馬（317・318），不明土製品（319），曲物（320），木製品（321），スラグ（322・323），石棒（324），丸瓦（325～328），軒平瓦（329），平瓦（330～351）である。

148の体部はわずかに外反する。149は器厚の厚い杯で，底面は回転ヘラキリが施される。150は長い体部の杯で，151・152は直線的な杯である。153はやや不整な器形で，底面は回転ヘラキリ，154の底面は回転ヘラキリ後にナデが施される。155は器高の高い大形の杯である。156・157の体部は内湾する。158～160はわずかに外反する口縁部である。162は内湾する体部を持ち，内外面はハケが施される。163～169は底部である。163・164の底部は台のように拡張し，164は回転ヘラキリ後に板目が施される。165・166は回転ヘラキリが施される。170～172は高台付杯であり，161・171・172は黒色土器A類であり，161の内面はヘラミガキが施される。173は宝珠形の摘みである。

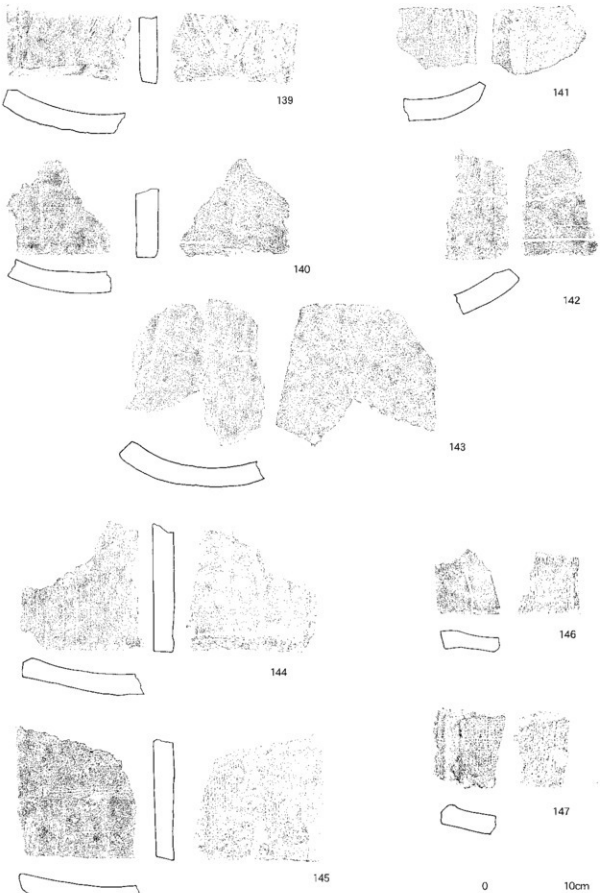
174～179は高杯の脚部である。175の外面に指頭圧痕が施される。176は面取りされ，やや角張っている。177・178は短く太い脚部であり，177は接合痕が明瞭に残存し，178の杯部内面は回転ナデ・



第26図　SD1006上層出土遺物実測図（5）（S：1/4）



第 27 図　SD1006 上層出土遺物実測図（6）（S：1/4）

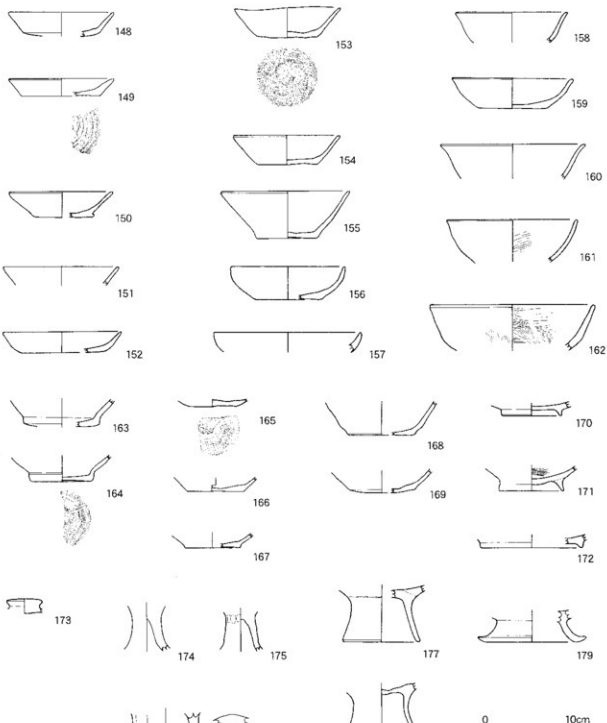


第 28 図　SD1006 上層出土遺物実測図（7）（S：1/4）

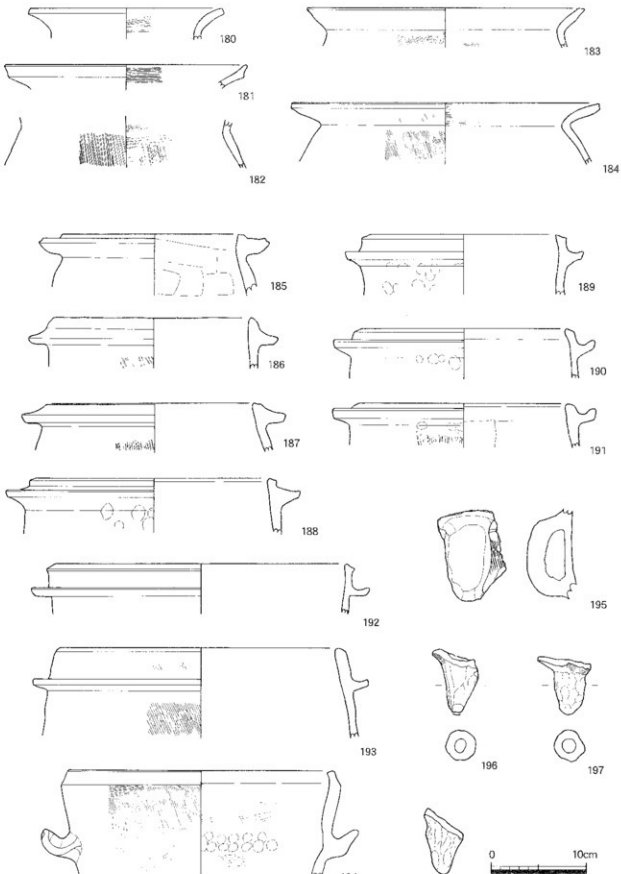
指ナデが施される。197は大きく外に広がっている。

180・183・184は「く」の字状口縁部で，180の口縁部内面，183の体部，184の口縁部内面と体部外面はハケが施される。181は口縁端部がわずかに屈曲し，内面にハケが施される。182の内外面は粗いハケが施される。

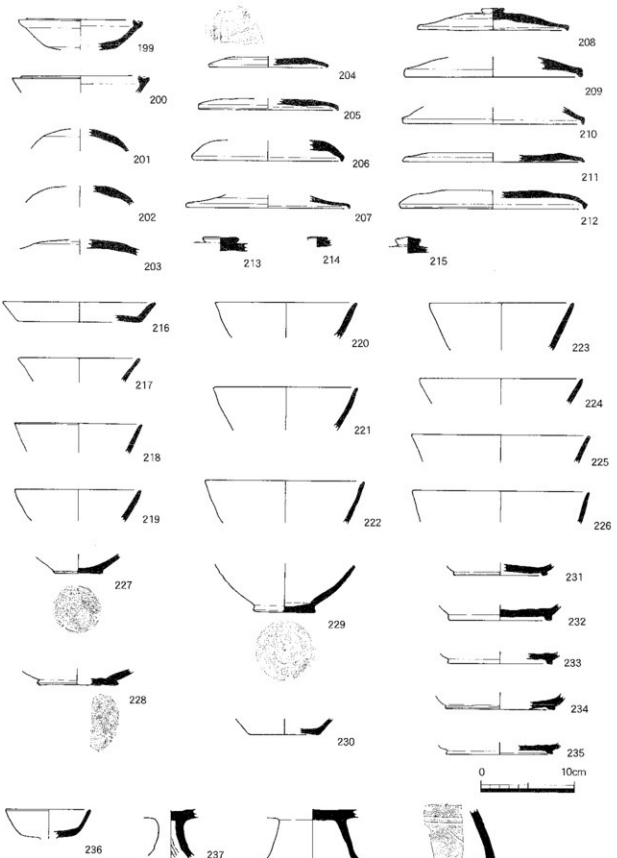
185～191は口縁端部直下に鍔を巡らす羽釜であり，鍔は水平と上方に延びる形態の2種類ある。185の内面は板ナデ，186・187・191の体部外面にハケ，188～190は体部外面に指頭圧痕が施される。192・193は口縁端部のやや下に鍔を巡らす。194は上に向かって開くバケツ状の器形で，把



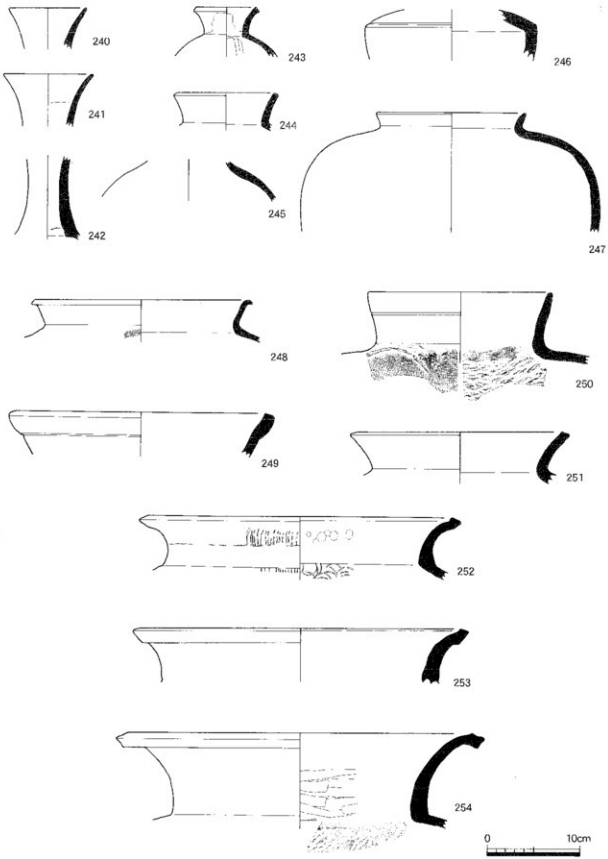
第29図　SD1006下層出土遺物実測図（1）（S：1/4）



第 30 図　SD1006 下層出土遺物実測図（2）（S：1/4）



第 31 図　SD1006 下層出土遺物実測図（3）（S：1/4）



第 32 図　SD1006 下層出土遺物実測図（4）（S：1/4）

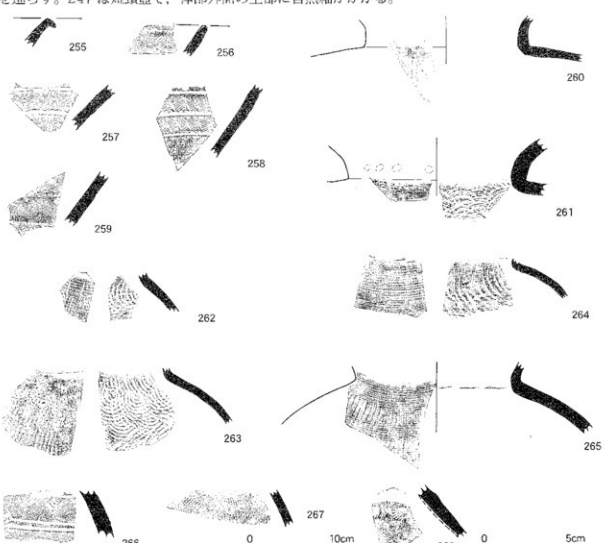
手が二つ付く。196～198は牛角状の把手である。

199・200は口縁部内面に短い受部が付く。201・203の天井部外面は回転ヘラケズリが施される。204～212は器高が低く，口縁端部をわずかに下方に屈曲させる蓋である。204は天井部外面に窯印が刻まれている。204・205・207・208の天井部外面は回転ヘラケズリが施される。206・212の外面は白然釉がかかる。211の天井部外面はナデが施され，口縁部に自然釉がかかる。213～215は宝珠形の摘みである。

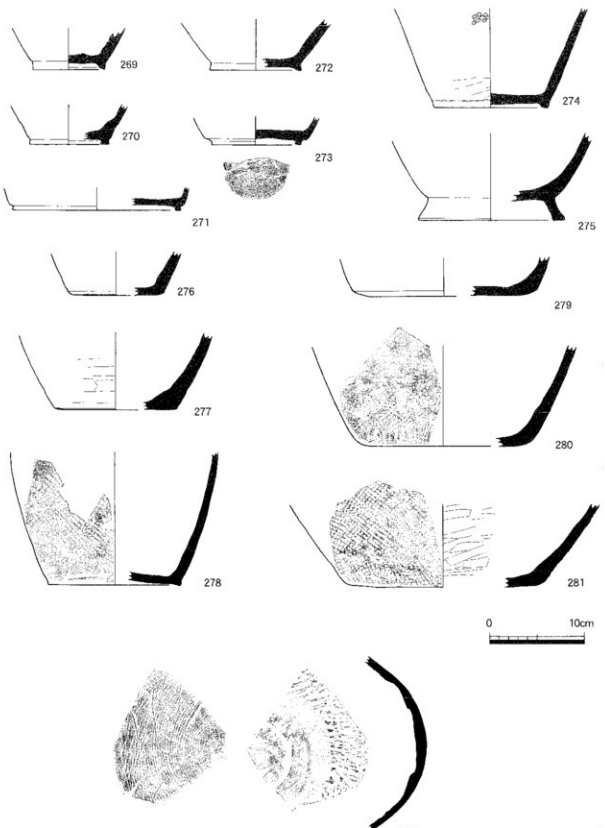
216は底面にナデが施され，体部は短く外上方に延びる。217～226は直線的な体部であり，回転ナデが施される。227～230は底部であり，227・228の底面は回転糸切り，229は台のように拡張し，底面は回転ヘラキリ後に中央を板口，周縁にナデが施される。230はヘラナデが施される。231～235は断面四角形を呈する高台の付く杯であり，231・233～235の底面は回転ヘラケズリ，232は回転ヘラナデが施される。

236は高杯の杯部であり，内面に自然釉がかかる。237～239は高杯の脚部，237は細い脚部で，内面に絞り目が残されている。238は太い脚部で，杯部底面は回転ヘラキリが施される。

240～242は口縁部が大きく外に広がり，240・241は全面に自然釉がかかる。243は球形な体部から口縁部が立ち上がり，口縁部内外面に白然釉がかかる。246は広口壺と思われ，肩が強く張り，沈線を巡らす。247は短頸壺で，体部外面の上部に自然釉がかかる。



第33図　SD1006下層出土遺物実測図（5）（S：1/4，1/2）



第 34 図　SD1006 下層出土遺物実測図（6）（S：1/4）

248・255の口縁端部は下方に屈曲し，体部外面は格子目のタタキが施される。249の口縁部は外側にやや拡張する。250は口縁部外面に沈線を巡らし，体部外面のカキ目後に平行タタキ，内面に当て具痕が残される。251は全面に自然釉がかかる。252～254は口縁端部が上下に拡張し，252の外面は平行目のタタキ，体部内面は当て具痕が残される。253は全面に自然釉がかかる。254の体部外面に格子目のタタキ，内面に当て具痕が残される。256～259は外面に沈線と波状文が施される。260は体部外面に平行目のタタキ後にナデが施され，体部外面と口縁部内面に釉がかかる。261・262は体部外面にカキ目，内面に当て具痕が残され，263の外面は格子目のタタキ，内面に当て具痕が残される。264は外面に格子目のタタキ後にカキ目，内面に当て具痕が残され，265は外面にカキ目・平行目のタタキが施される。266の外面は沈線と波状文，267は格子目のタタキが施される。268は外面に貝殻押圧痕が施される。

269～275は高台付壺で，269～274の高台は低く，275は高い。274の外面は一部に格子目のタタキが施される。276～281は平底であり，277の外面は横方向のヘラナデ，278・280・281は格子目のタタキが施される。

282は横瓶の体部であり，外面に平行目のタタキ後にカキ目，内面に当て具痕・指頭圧痕が施される。内面に接合痕が明瞭に残存する。

283は篠窯産の鉢であり口縁端部が僅かに肥厚する。284・285は灰釉陶器で，285の内面に砂目がある。286～288は中国越州窯産磁器である。289～296は緑釉陶器であり，289～293は内湾する体部の碗であり，294～296は高台付底部である。

298～301は側面に溝を有する土錘であり，大小の規模のものがある。302～305は管状土錘であり，302は小さな土錘である。

306～311はカマドの破片であり，308は炊き口直上の破片である。

312は銅製蓋であり，口縁端部を下方に屈曲し，口径12.8cmを測る。313・314は金メッキした飾り金具であり，314は鋲が1個残存する。

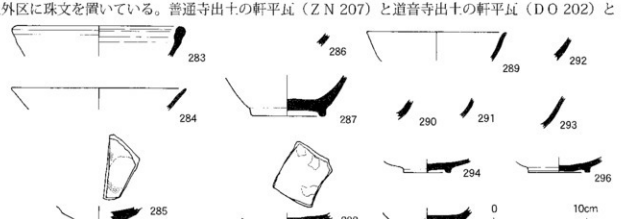
315は基部に折り返しを有する鉄斧であり，刃の一部が欠損している。

317・318は土馬の足であると考えられ，317の断面は円形，318は長方形である。

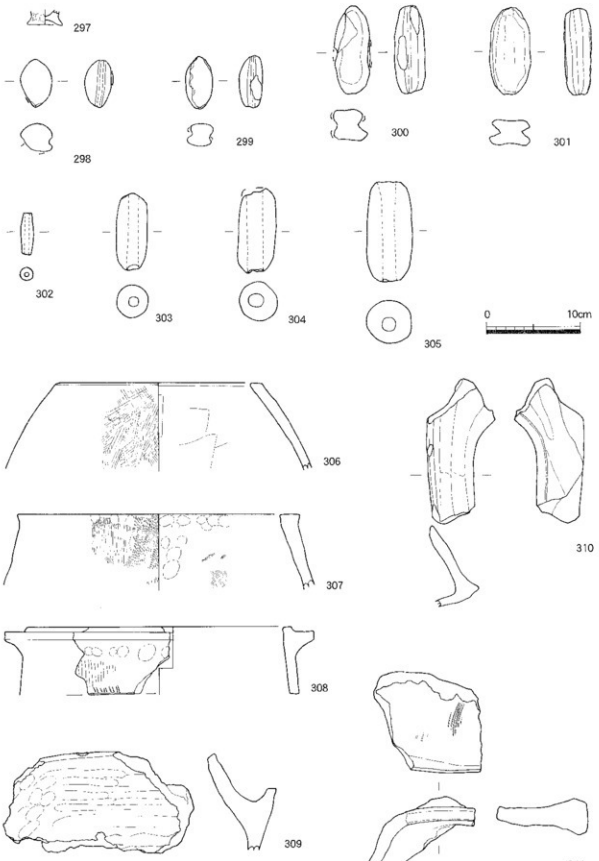
320は曲物の底板である。321はミカン割りの加工材で，先端を1方向から加工する。

325・327は凹面に布目が残り，凸面にヘラナデ，326は凹面に布目・糸切り痕，凸面に横方向のヘラナデが施される。328は凹面に布目，凸面のゴザ目上にナデが施される。

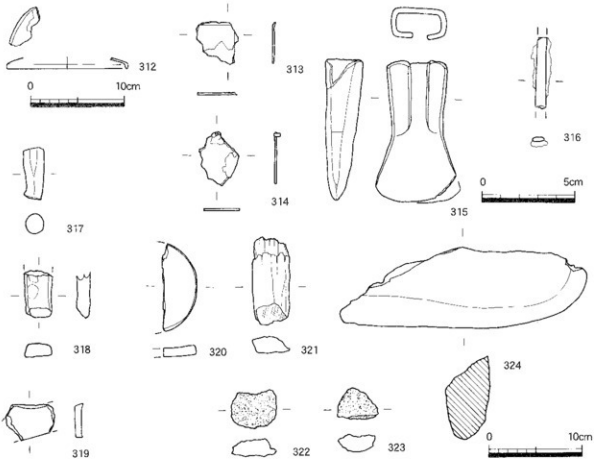
329は軒平瓦であり，凹面に布目，凸面にヘラナデが施される。内区に変形した均整唐草文を配し，上外区に珠文を置いている。普通寺出土の軒平瓦（ＺＮ207）と道音寺出土の軒平瓦（ＤＯ202）と



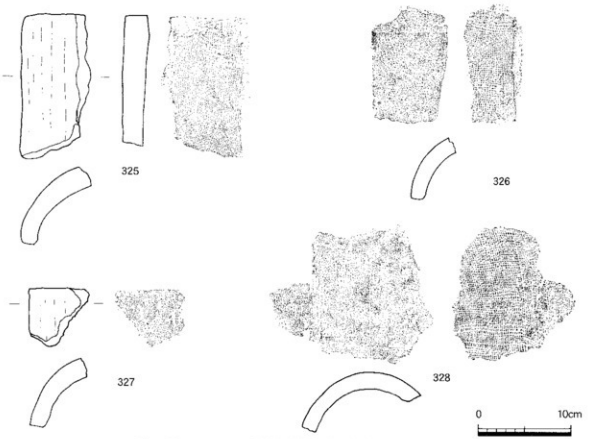
第35図　SD1006下層出土遺物実測図（7）（Ｓ：1/4）



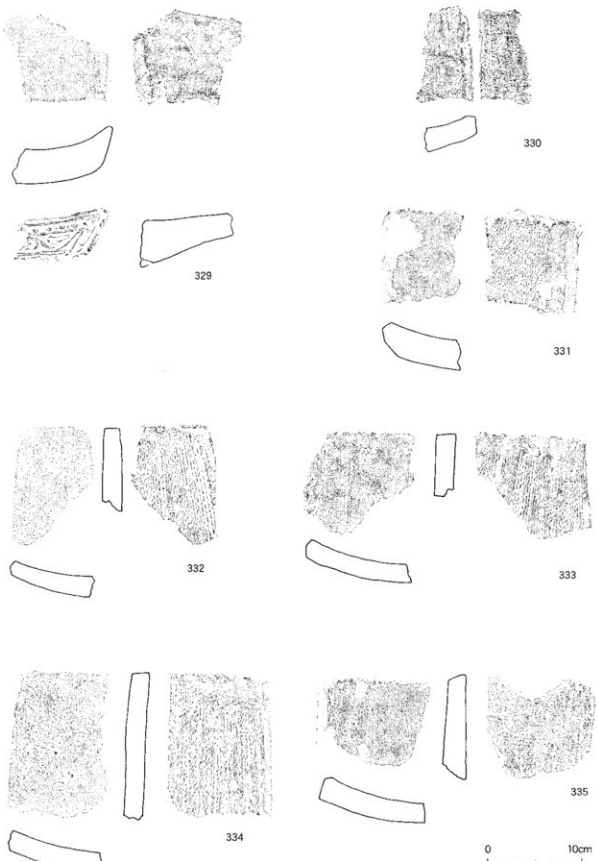
第 36 図　SD1006 下層出土遺物実測図（8）（S：1/4）



第 37 図　SD1006 下層出土遺物実測図（9）（S：1/4. 1/2）



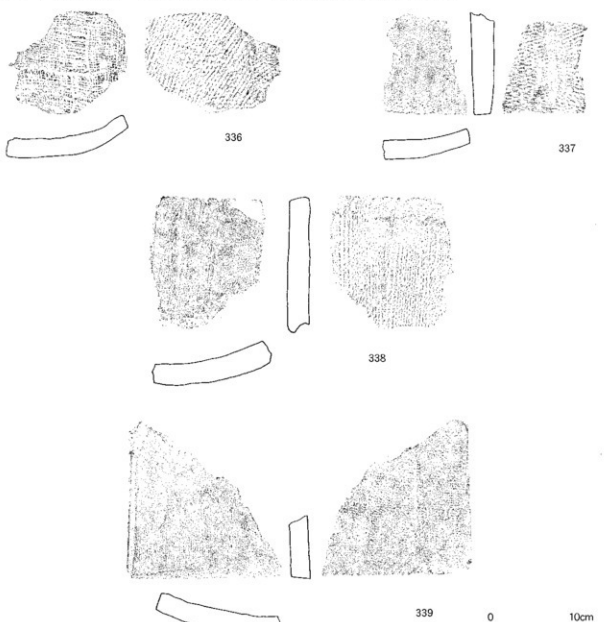
第 38 図　SD1006 下層出土遺物実測図（10）（S：1/4）



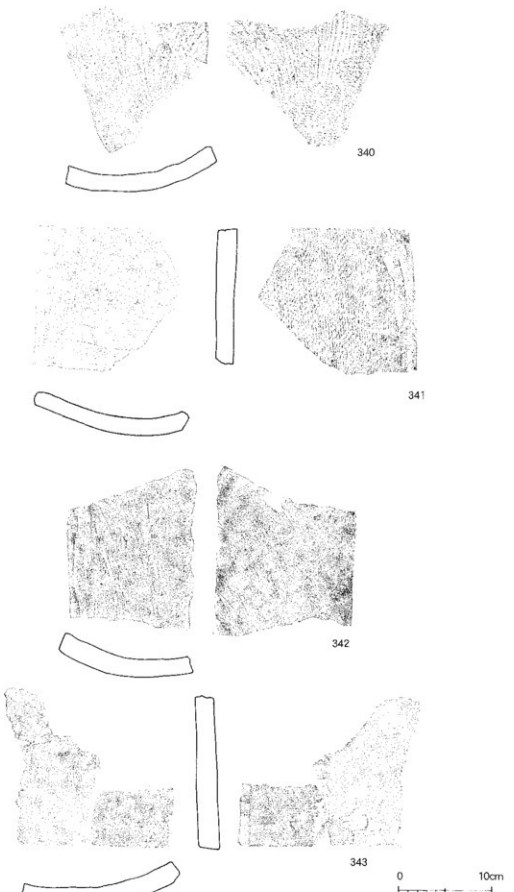
第 39 図　SD1006 下層出土遺物実測図（11）（S：1/4）

同文で，両寺出土瓦の文様の系譜をひく。

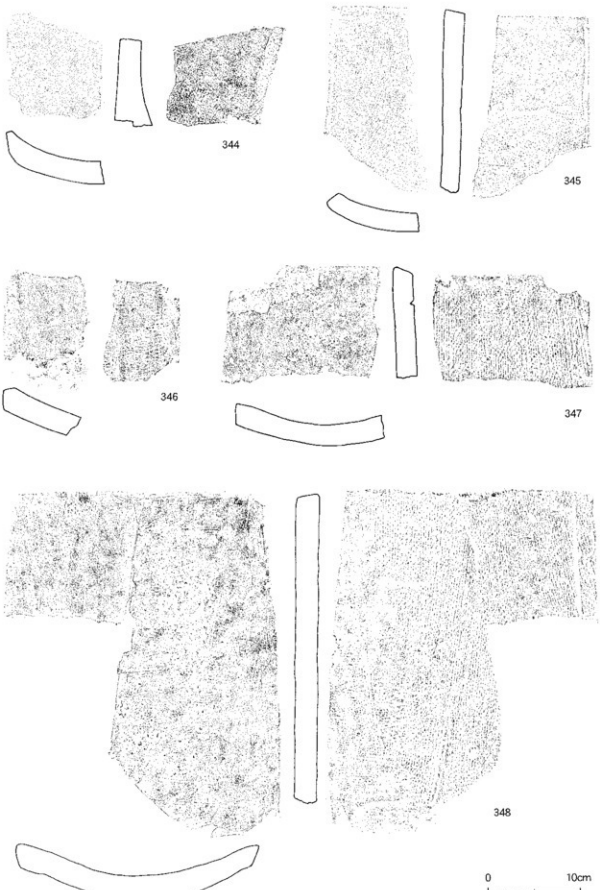
330～351は平瓦であり，側面に面取りが行われる。348は，全体の1/4を欠損するが，全長と幅が判り，瓦の規模の判明する唯一の平瓦である。330・335は凹面に布目上にヘラナデ，凸面にゴザ目上にヘラナデ，331・332・334・336は凹面に布目，凸面にゴザ目，333・337・341・348は凹面に布目上にヘラナデ，凸面にゴザ目，338は凹面に布目・糸切り痕，凸面にゴザ目，339は凹面に布目・糸切り痕，凸面に布目が残される。340は凹面に布目・糸切り痕，凸面にゴザ目・糸切り痕，342は凹面に布目後にヘラナデ，凸面にヘラナデ，343は凹面に布目・糸切り痕，凸面にヘラナデが残される。344は凹面に布目，凸面にヘラナデ，345は凹面に布目，凸面に横方向の板ナデ，346・347は凹面にヘラナデ，凸面にゴザ目が残される。349は凹凸面共に板ナデ，350・351の凹面はヘラナデ，凸面は磨滅・剥離が著しい。334・338は側面に布目が見られる。



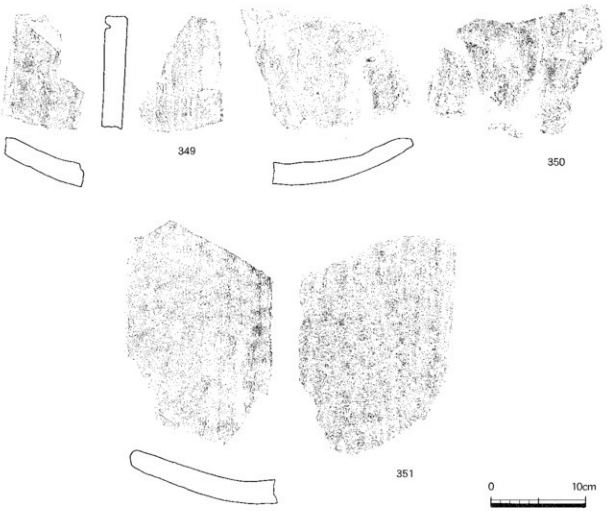
第40図　SD1006下層出土遺物実測図（12）（S：1/4）



第41図　S D1006下層出土遺物実測図（13）（S：1/4）



第 42 図　SD1006 下層出土遺物実測図（14）（S：1/4）



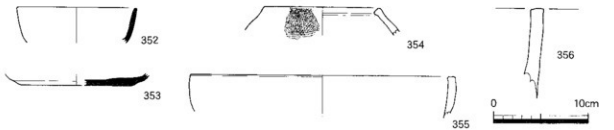
第 43 図　SD1006 下層出土遺物実測図（15）（S：1/4）

SD1007（第 18・44 図）

調査区南西隅において検出した溝であり，ＳＤ 1004 と同様にＳＫ 1039 より派生する。ＳＫ 1013 と重複する。検出した標高は 1.90 m前後である。溝の方位はＮ－ 90° －Ｅであり，短く直線的に延びる。幅は 0.40 m，深さは 0.18 mを測り，断面は逆台形を呈する。底面のレベルはＳＫ 1039 に向かって低くなる。

遺物は，須恵器杯（352・353），土師器鉢（355），土師質土器甕（356），弥生土器壺（354）である。

352 は体部の立ち上がりのきつい器形であり，内面に回転ナデ後にナデが施される。353 の底面は平底でナデが施される。355 と 356 は口縁部が直立する。



第 44図　SD1007 出土遺物実測図（S：1/4）

SD1008（第５・45図）

調査区北西側において検出した溝であり，ＳＤ1005・1006に切られる。検出した標高は2.00ｍである。溝は南北方向に延び，中央で東方向に屈曲する。溝の幅は0.30～1.10ｍ，深さは0.25ｍを測り，底面は南方に緩やかに低くなる。断面は逆台形を呈する。

第45図　SD1008 断面図（Ｓ：1/4）

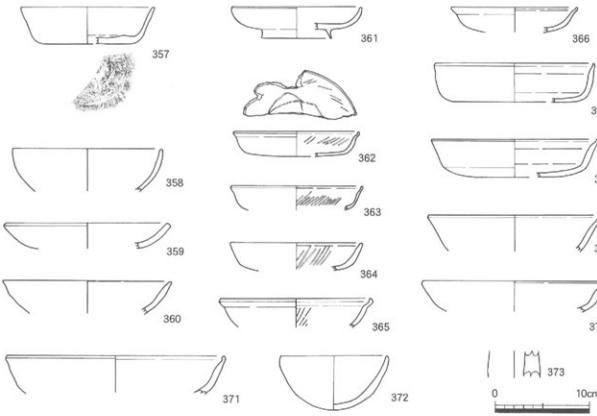
遺物は，土師器と須恵器の小片のみであり，図示できる遺物はない。

SD1009（第５・46～50図）

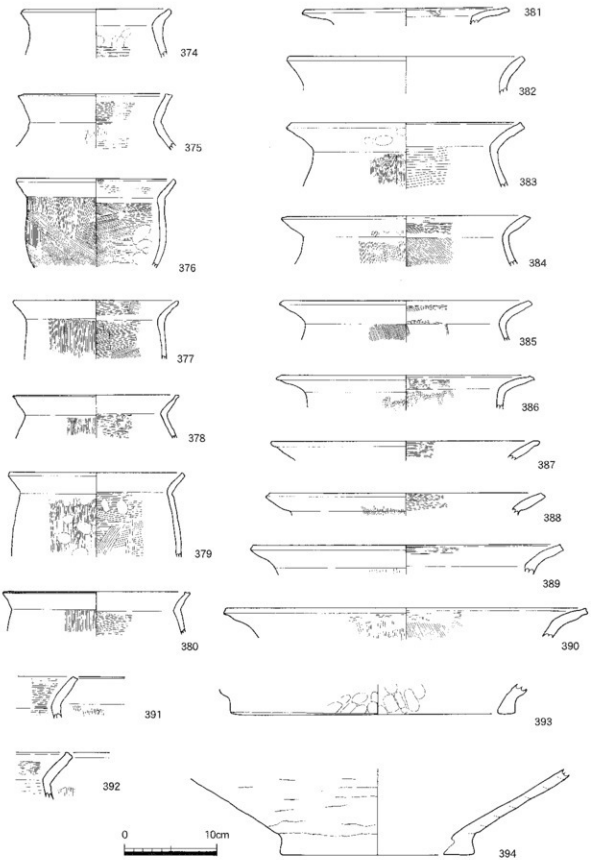
調査区北西側において検出した溝であり，ＳＢ1002と重複する。検出した標高は1.80～2.10ｍである。溝の方位はＮ－63°－Ｗであり，北西部は直線状に延びるが，ＳＢ1002の南側では急激に幅が広くなり２方向に分岐し，さらに東に到るとＳＤ1010・1019と合流する。溝の幅は0.35～2.30ｍ，深さは0.10～0.30ｍを測り，北西部と南東部の断面は逆台形を呈し，中央部では緩やかな船底形を呈する。底面のレベルは南東から北西に向かって低くなる。

遺物は，土師器杯（357～371），同鉢（372），同高杯（373），同甕（374～394），須恵器杯蓋（395～399），同杯身（400～402），同杯（403～420），同鉢（421），同高杯（422・423），同壺（424），同甕（425～427），土師器鉢（428），同鍋（429），同甕（430），同甑（431），カマド（432・433），蛸壺（434），飯蛸壺（435～438），骨（439～444）である。

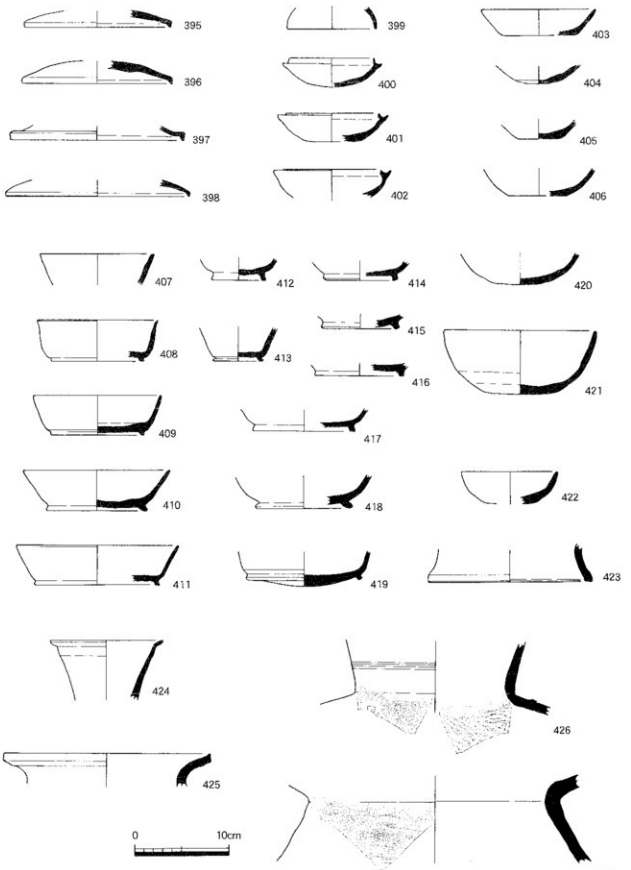
第46図　SD1009 断面図（Ｓ：1/80）



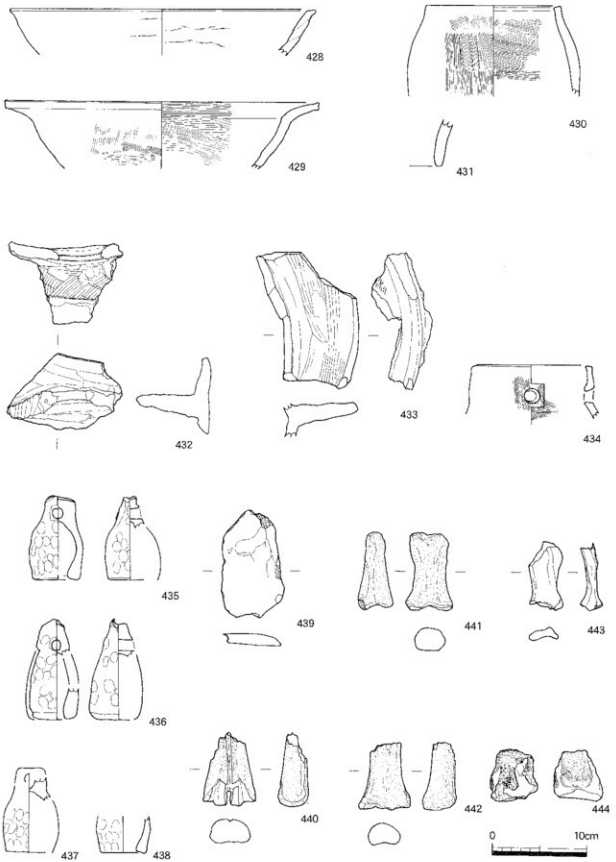
第47図　SD1009 出土遺物実測図（1）（Ｓ：1/4）



第 48 図　SD1009 出土遺物実測図（2）（S：1/4）



第 49 図　SD1009 出土遺物実測図（3）（S：1/4）



第 50 図　SD1009 出土遺物実測図（4）（S：1/4）

357の体部は急傾斜で立ち上がり，底面は回転ヘラキリ後にヘラナデが施される。358～360は内湾する体部である。361は低い器高にやや高く細い高台を有する。362～371は口縁端部を屈曲させ，内面に沈線状の凹みを有する。362は体部内面に放射状暗文，底部内面に暗文，363～365は体部内面に放射状暗文が施される。367～371は口径16㎝以上の大形の杯である。

372は半球状の器形で，体部外面下半に指頭圧痕，内面にヘラナデが施される。

374～392は「く」の字形口縁部であり，内外面にハケが施される。

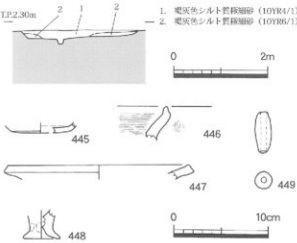
395～398は口縁端部を下方に短く屈曲させる。400～402は口縁部内面に短い受部が付く。403・405の底面は回転ヘラキリ後にナデが施される。407～419は高台付杯であり，丸みを帯びる高台の418を除いて断面四角の高台である。409の底面は回転ヘラキリ後にナデ，410はナデ・回転ヘラナデ，411・413・416はナデ，414・415・417は回転ヘラナデが施される。419は高台より底部が下に拡張する。421は大形品である。

424は口縁端部が外方に屈曲する。426は口縁部に沈線を巡らし，体部に把手の一部が残存する。427は体部外面にカキ目，内面にヘラナデが施される。

SD1010（第5・51図）

調査区中央北側において検出した溝であり，SB1002・1003と重複し，SD1009・1013・1019と合流する。検出した標高は1.95～2.10mである。溝の方位はN－17°－Wである。溝の幅は0.95～1.55m，深さは0.08～0.15mを測る。底面は，南から北に緩やかに低くなる。断面は浅い逆台形を呈する。

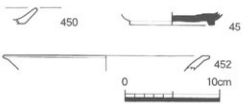
遺物は，土師器杯（445），同甕（446），弥生土器壺（447），製塩土器（448），土錘（449）である。



第51図　SD1010断面図及び出土遺物実測図（S：1/80，1/4）

SD1011（第5・52図）

調査区中央北側において検出した溝であり，SB1003，SD1010・1012，SK1022と重複する。検出した標高は2.14mである。溝の方位はN－0°－Eで，若干蛇行する。幅は0.25m，深さは0.06mを測り，断面は逆台形である。底面は平坦である。



第52図　SD1011出土遺物実測図（S：1/4）

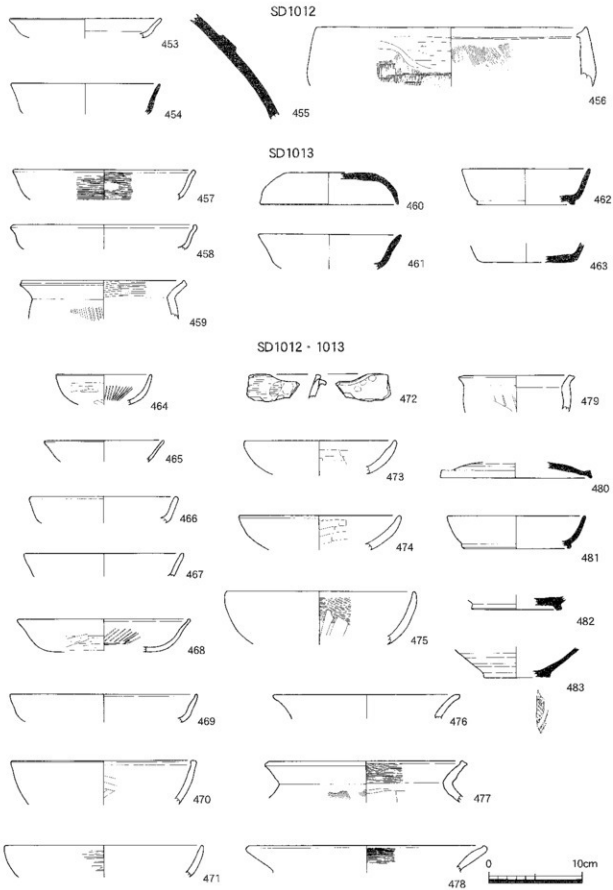
遺物は，土師器皿（450），須恵器杯（451），土師器甕（452）である。

SD1012（第5・53図）

調査区中央北側において検出した溝であり，SB1003，SD1011・1013・1014と重複する。検出面のレベルは標高2.10～2.20mである。溝北部での方位はN－80°－Wであるが，SD1014付近でほぼ直角に曲がり，南方に延びてSD1017と合流する。溝の幅は0.75m，深さは0.11mを測る。断面は逆台形を呈し，底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなる。SD1013との合流付近で遺物が混在して出土した。

遺物は，土師器皿（453），須恵器杯（454），同甕（455），土師質土器鍋（456）である。

453は外反気味の体部である。455の外面は平行目のタタキ，内面は当て具痕が残される。



第 53 図　SD1012・1013 出土遺物実測図（S：1/4）

SD1013（第5・53図）

調査区中央北側において検出した溝であり，ＳＢ1003，ＳＤ1009・1012・1019と重複する。検出した標高は，2.15ｍである。溝の方位はＮ－0°－Ｅである。溝の北端はＳＤ1012と合流し，南端はＳＤ1009・1019と合流する。本遺構とＳＤ1012の合流部分では，検出状況が不明瞭であるため，本遺構とＳＤ1012の遺物の分別ができなかった。溝の幅は2.24～3.50ｍ，深さは0.10ｍを測る。断面は浅い逆台形を呈し，底面のレベルは平坦である。

遺物は，土師器杯（457・458），同甕（459），須恵器杯蓋（460），同杯（461～463）である。

457・458は口縁端部内面に沈線状の僅かな凹みを有し，457は内外面にヘラミガキが施される。459は口縁部内面に横方向の粗いハケ後にナデ，体部外面に粗いハケが施される。

460の口縁部は短く直立し，天井部外面は切り離し後にヘラナデが施される。461の体部は僅かに外反し，463の底面は回転ヘラキリ後にナデが施される。462は高台付杯である。

464～483はＳＤ1012とＳＤ1013の合流付近より出土した遺物であり，土師器杯（464～471），同椀（472～475），同甕（476～479），須恵器蓋（480），同杯（481～483）である。

464は内湾する体部の内面に放射状の暗文が施される。468・469は口縁端部が僅かに屈曲し，内面に沈線状の凹みを巡らす。468の体部内面には放射状の暗文，底部内面にヘラミガキ，外面に静止ヘラケズリが施される。473～475は内湾する体部である。

476は丸みのある口縁端部，477～479は角張る口縁端部であり，477・478は口縁部内面に横方向のハケが施される。

480は口縁端部を下方に短く屈曲させる。481・482は高台付杯である。483は外面にロクロ調整痕を明瞭に残し，底部に静止ヘラケズリが施される。

SD1014（第5・54図）

調査区中央において検出した南北方向に延びる溝であり，ＳＢ1003，ＳＤ1006・1012・1017・1018・1019・1021と重複する。調査時にはＳＤ1006より南側の溝をＳＤ1015としたが，ＳＤ1014とＳＤ1015は同一遺構であると後で判明した。検出した標高は2.15～2.25ｍである。溝の方位はＮ－0°－Ｅである。調査区南端から直線的に延びる溝は，ＳＤ1006の北側で直角に屈曲して約3ｍ東流し，再び直角に屈曲し北方向に延びる。溝の幅は0.50～1.10ｍ，深さは0.30ｍを測り，断面は船底形を呈する。底面は南から北に緩やかに低くなる。

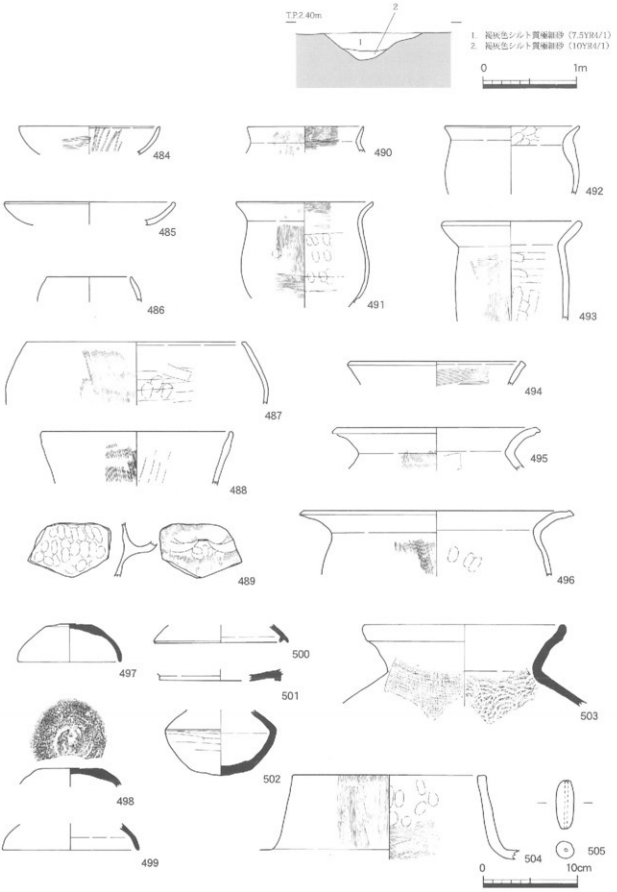
遺物は，土師器杯（484），同皿（485），同鉢（486～488），同鍋（489），同甕（490～496），須恵器杯蓋（497～499），同杯身（500），同杯（501），同壺（502），同甕（503），カマド（504），上錘（505）である。

484は体部外面にヘラミガキ，内面に放射状暗文が施される。485は器高の低い器形である。486・487は口縁部が内傾し，487の外面はハケ，内面は指頭圧痕の後ヘラナデが施される。488は外面にハケ，内面にヘラケズリが施される。

490～493は丸みのある口縁端部で，494～496は角張る。490は内外面にハケ，491は口縁部と体部外面にハケ，内面に指頭圧痕・ナデ，493は体部外面に粗いハケ，内面にヘラナデ，494は口縁部内面にハケ，495・496は体部外面にハケが施される。

497は口縁部が短く直立し，天井部外面は回転ヘラキリ後にナデが施される。498の天井部外面は回転ヘラキリが施される。500は口縁部内面に短い返りが付く。

502は肩が強く張り，体部下半は回転ヘラケズリが施される。503は口縁端部が僅かに屈曲し，体部外面に平行目のタタキ・カキ目，内面に当て具痕が残される。



第 54 図　SD1014 断面図及び出土遺物実測図（S：1/40．1/4）

SD1016（第５・55図）

調査区中央において検出した溝であり，ＳＢ1009，ＳＤ1017・1019と重複する。検出した標高は2.25ｍ前後である。溝の方位はＮ－14°－Ｅであり，ＳＤ1017とほぼ直交する。幅は0.44～0.80ｍ，深さは0.15ｍを測り，溝の断面は逆台形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに下がる。

遺物は，須恵器杯（506），同甕（507）である。

第55図　SD1016 断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/40，1/4）

SD1017（第５・56図）

調査区中央から東側において検出した東西方向に延びる溝であり，ＳＢ1007・1008，ＳＤ1012・1016・1019・1022，ＳＥ1002・1003と重複する。検出面のレベルは標高2.22～2.44ｍである。溝の方位はＮ－98°－Ｅであり，西端はＳＤ1012と合流し，東端はＳＥ1002・1003と合流する。幅は0.35～0.90ｍ，深さは0.12ｍを測り，断面は船底形を呈する。底面のレベルは東から西に向かって緩やかに下がる。

遺物は，土師器皿（508・509）であり，器高が低く，口縁端部内面に沈線状の凹みを巡らす。508の体部内外面はヘラミガキが施される。

第56図　SD1017 断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/40，1/4）

SD1018（第５・57図）

調査区中央北端において検出した溝であり，ＳＢ1009，ＳＤ1014・1016と重複する。検出面のレベルは標高2.12～2.24ｍである。溝の方向は東西であるが，若干湾曲するため溝の両端は調査区外に延びる。溝の中央付近で南西方向に細い溝が派生する。溝の幅は1.65ｍ以上である。掘り方は段を有し，最深部までの深さは0.30ｍを測る。底面に人頭大の石が検出される。

遺物は，土師器杯（510～512），同鉢（513），同甕（514～517），須恵器杯蓋（518・519），同杯身（520），同杯（521），同高杯（522・523），同甕（524），同壺（525）である。

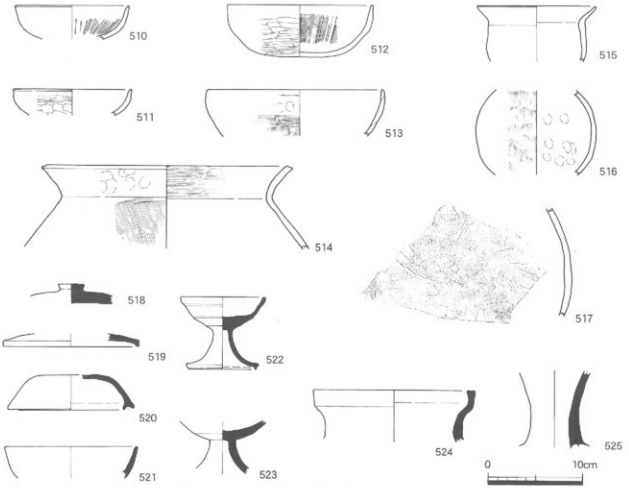
510は体部内面に放射状暗文が施され，511は口縁端部がやや外反し，体部外面はヘラナデ・ヘラケズリが施される。512は大形の杯で，口縁部は直立し，体部外面はヘラケズリ，内面はヘラミガキが施される。513は体部下半に横方向のハケが施され，接合痕が残る。

514は強い「く」の字形口縁部で，口縁部外面に指頭圧痕・ナデ，内面に横方向のハケ，体部外面に縦方向のハケが施される。515は口縁部が大きく外反し，516は球形の体部であり，外面に縦方向のハケ，内面に指頭圧痕が施される。

518は扁平な宝珠形の摘みであり，519は口縁端部を下方に短く屈曲させる。520は口縁部内面に短い返りが付き，底部外面はヘラナデが施される。

522はほぼ完形の高杯であり，脚裾部が下方に短く屈曲し，杯部と脚部外面に釉がかかる。

525は壺の頸部である。

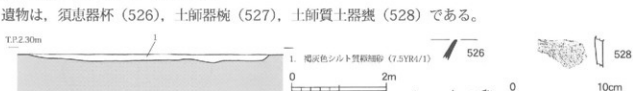


第 57 図　SD1018 出土遺物実測図（S：1/4）

SD1019（第 5・58 図）

調査区中央において検出した東西方向の溝である。溝の西端はＳＤ 1009・1010 と合流し，東端はＳＤ 1017・1020 と合流し，ＳＤ 1006・1014 と重複する。検出した標高は 2.15 ～ 2.25 mである。溝の方位はＮ－ 90°－Ｅである。幅は 0.80 ～ 1.95 m，深さは 0.10 ～ 0.16 mを測り，溝の平面は不規則である。埋土は単一層である。

遺物は，須恵器杯（526），土師器椀（527），土師質土器甕（528）である。



第 58 図　SD1019 断面図及び出土遺物実測図（S：1/80．1/4）

SD1020（第 5・59 図）

調査区中央から南東隅において検出した溝であり，西端はＳＤ 1019 と合流し，ＳＤ 1006，ＳＫ 1049 と重複する。検出した標高は 2.32 ～ 2.61 mである。溝の方位はＮ－ 90°－Ｅで，ＳＤ 1006 と同方向である。幅は 1.10 m以上，深さは 0.10 ～ 0.25 mを測る。底面のレベルは東から西に緩やかに下がる。

遺物は，須恵器杯（529），同皿（530），土師質土器羽釜（531），平瓦（532）である。

529 は直線的な体部であり，530 は器高の低い杯で，内外面に火襷が見られる。

532 の凹面は布目，凸面はゴザ目が残される。

SD1021（第5・59図）

調査区中央において検出した溝であり，溝の南側をＳＤ1006に切られている。検出した標高は2.15ｍ前後である。溝の方向は東西であり，幅は1.30ｍ以上，深さは0.15ｍを測る。底面は平坦である。

遺物は，土師器杯（533），須恵器ハソウ（534），土師器甕（535）である。

533は口縁部がやや直立し，体部外面にハケが施される。534は口縁端部を欠損し，体部外面に沈線を巡らす。535は口縁端部に平坦面をもち，体部外面はハケ，内面はナデが施される。

SD1022（第5・59図）

調査区東側において検出した溝であり，北端でＳＤ1023，南端でＳＤ1017と合流する。検出した標高は2.47ｍ前後である。溝の方位はＮ－2°－Ｗである。幅は0.30～0.45ｍ，深さは0.07～0.14ｍを測る。底面のレベルは南から北に緩やかに下がる。

遺物は，土師器杯（536），須恵器皿（537）である。

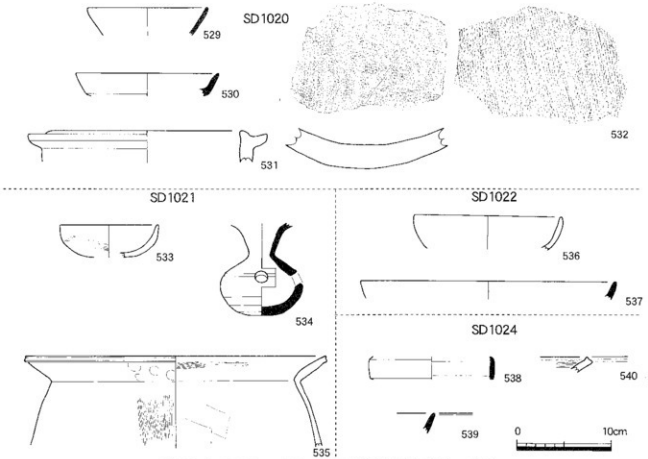
SD1023（第5図）

調査区北東隅に検出した溝で，２工区のＳＤ2014と同一遺構である。検出した標高は2.45ｍである。溝の方位はＮ－98°－Ｅである。幅は0.70ｍ，深さ0.10ｍを測る。

SD1024（第5・59図）

調査区東端において検出した溝であり，２工区のＳＤ2038と同一遺構である。検出した標高は2.50～2.60ｍである。溝の方位はＮ－90°－Ｗで，幅は0.25～0.55ｍ，深さは0.09ｍを測る。底面は東から西に緩やかに下がる。

遺物は，須恵器蓋（538），同杯（539），土師器甕（540）である。



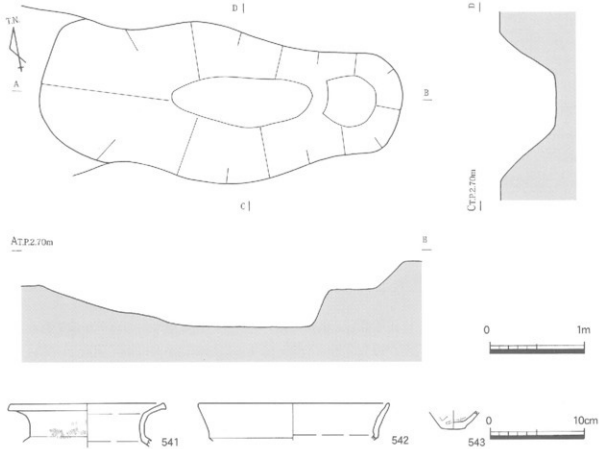
第59図　SD1020～1022・1024出土遺物実測図（S：1/4）

（3）井戸

SE1002（第 60 図）

調査区東側において検出した素掘りの井戸であり，ＳＤ 1017・1022 と重複する。検出した標高は 2.48 ～ 2.57 mである。井戸の平面形は東西に細長い隅丸長方形を呈し，長軸の長さは 3.83 m，短軸は 1.65 mを測る。短軸方向の断面は逆台形を呈するが，東側の掘り方は段を有し，西側は底面から非常に緩やかな傾斜で立ち上がる。最深部までの深さは 0.60 mを測り，テラス部分の深さは 0.28 mである。ＳＤ 1017・1022 と本遺構は切り合い関係がなく，ＳＤ 1017・1022 は浅い流路であり，本遺構から派生していると考えられる。

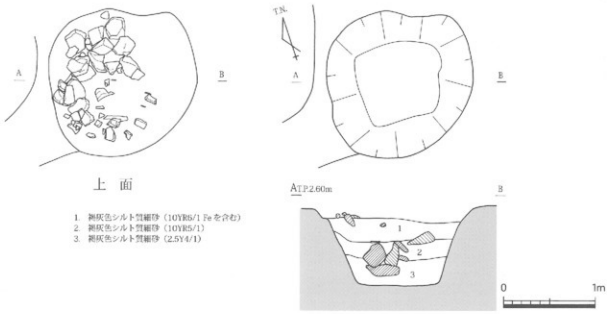
遺物は，弥生土器壺（541），同高杯（542），同鉢（543）であるが，図化できなかった土器の大部分は土師器と須恵器の小片である。弥生土器は混入したものである。



第 60 図　SE1002 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40，1/4）

SE1003（第 61・62 図）

調査区東側において検出した素掘りの井戸であり，ＳＥ 1002 の南西に隣接する。ＳＤ 1017・1022 と重複する。検出した標高は 2.40 mである。井戸の平面形は，南東側のあまり張らない不整な円形を呈し，直径は 1.55 m，深さは 0.80 mを測る。底面は不整な方形であり，平坦である。断面は逆台形を呈する。本遺構の埋土は 3 層であり，上面から底面近くの埋土中より多量の石が出土する。石は大小のものがあり，不規則な状態で出土する。ＳＤ 1017・1022 と本遺構は切り合い関係がなく，ＳＤ 1017・1022 は浅い流路であり，本遺構から派生していると考えられる。



第 61 図　SE1003 平・断面図　（S ： 1/40）

遺物は，土師器皿（544・548），同杯（545 ～ 547），同鍋（549），同甕（550），蛸壺（551），須恵器蓋（552），同杯蓋（553・554），同杯（555），同壺（556），同甕（557 ～ 560），弥生土器壺（561），刀子（562・563）である。

544 は器高の低い杯であり，外面下半はナデが施される。545 は大形の杯であり，口縁端部が僅かに外反する。546 は平底の杯であり，内外面ともにナデが施される。547 は高台付杯であり，高台の断面は四角である。底面の内外面はナデが施される。548 は大きな口径に対して器高の低い器形であり，口縁端部は外方向に屈曲する。

549 は口縁端部に平坦面を有し，口縁部外面はヨコナデ，内面と体部外面は粗いハケが施される。550 は小形の甕である。

551 は口縁部直下の対角線上に孔を有し，外面に粗いハケ，内面に横方向のハケが施される。

552 は平坦な天井部から口縁部が直立する。553・554 の口縁部は下方に短く屈曲し，554 の天井部外面は回転ヘラキリが施される。

555 は低い高台が付き，底面は回転ヘラケズリが施される。

557 は大形の甕であり，口縁部は大きく外反し，体部外面は平行タタキ後にナデ，内面は当て具痕・ナデが施され，口縁部内面はヘラナデ・指頭圧痕が施される。558 は口縁部外面に沈線と波状文が施される。体部外面は平行タタキ後にヘラナデ，内面は当て具痕が残される。559・560 は外面に平行目のタタキ後にカキ目，内面に当て具痕が残される。

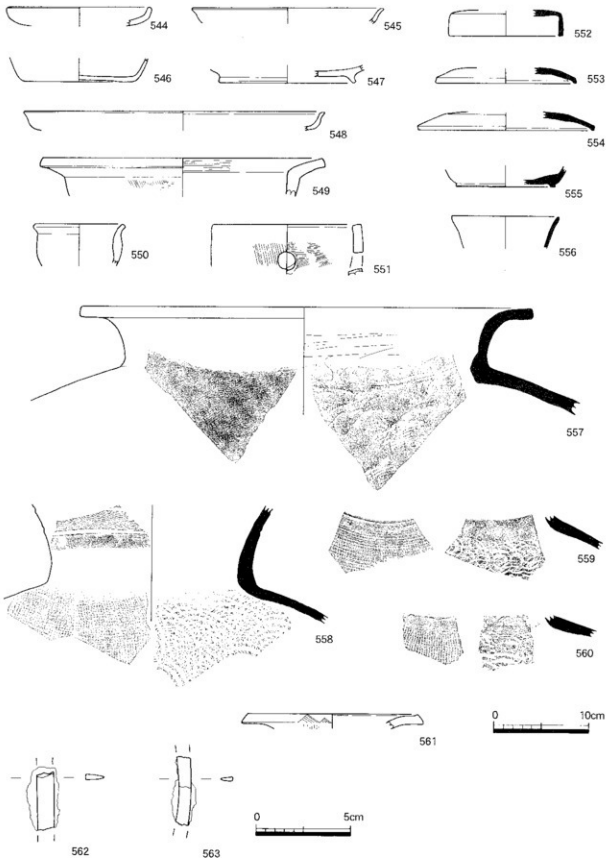
561 は口縁端部に鋸歯文が施され，混入品である。

（4）土坑

SK1001（第 63 図）

調査区南西側において検出した土坑であり，S D 1001 と重複する。検出した標高は 1.95 mである。平面形は隅丸長方形を呈し，規模は長軸 0.68 m，短軸 0.55 m，深さ 0.37 mを測る。土坑の断面は逆台形である。

遺物は，土師器杯（564），須恵器杯蓋（565），同杯（566）である。

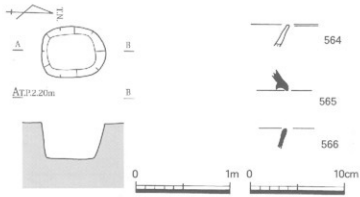


第 62 図　SE1003 出土遺物実測図（S：1/4，1/2）

SK1002（第 64 図）

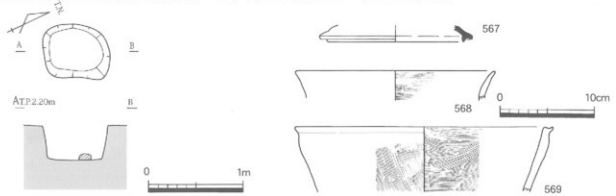
調査区南西側において検出した土坑である。検出した標高は，2.01 mである。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し，規模は長軸 0.70 m，短軸 0.57 m，深さ 0.36 mを測る。土坑の断面は逆台形である。底面直上に拳大の石が検出された。

遺物は，須恵器杯蓋（567），土師器甕（568），土師質土器鍋（569）である。



第 63 図　SK1001 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40，1/4）

567 は口縁部内面に短い返りが付く。568 は甕の口縁部であり，内面に横方向のハケ後にナデが施される。569 は外面に縦方向のハケ，内面に横方向のハケが施される。

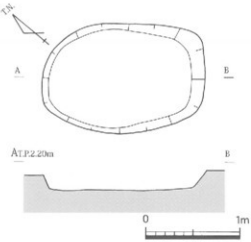


第 64 図　SK1002 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40，1/4）

SK1003（第 65 図）

調査区南西側において検出した土坑である。検出した標高は，2.05 mである。平面形は北側に丸みを持つ隅丸長方形を呈し，規模は南北方向の長軸 1.70 m，東西方向の短軸 1.20 m，深さ 0.15 mを測る。土坑の断面は逆台形であり，北側の掘り方は急傾斜である。底面は平坦である。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

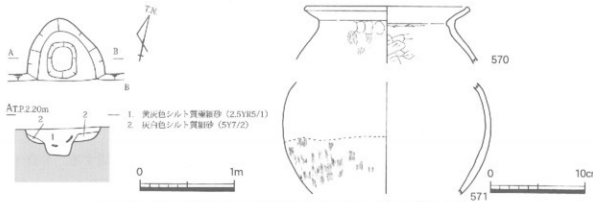


第 65 図　SK1003 平・断面図（S：1/40）

SK1004（第 66 図）

調査区南西側において検出した土坑であり，遺構の南半分は調査区外に広がっている。検出した標高は 2.05 mである。平面形は不整な円形を呈し，南北方向は 0.65 m以上，東西方向の直径は 0.80 mを測る。中央には隅丸方形の平面形で 1 段低くなる部分があり，最深部までの深さは 0.29 mを測る。埋土は 2 層であるが，下層は浅い部分直上のみに堆積する。

遺物は，土師器甕（570・571）である。570 は「く」の字状口縁部であり，体部外面に指頭圧痕・縦方向のハケ，内面にヘラケズリが施される。571 は球形の体部であり，外面に縦方向のハケ，内面に板ナデが施され，外面には煤が付着する。



第 66図　SK1004 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/4 0. 1/4）

SK1005（第 67 図）

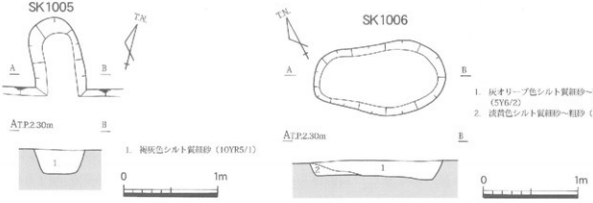
調査区南西側において検出した土坑であり，遺構の南半分は調査区外に広がっている。検出した標高は 2.10 mである。平面形は楕円形を呈し，南北方向は 0.85 m以上，東西方向の直径は 0.55 mを測る。深さは 0.25 mである。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1006（第 67 図）

調査区南西側において検出した土坑である。検出した標高は 2.10 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は東西方向の長軸 1.36 m，南北方向の短軸 0.75 m，深さ 0.15 ～ 0.20 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は東に向かって緩やかに下がる。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。



第 67 図　SK1005・1006 平・断面図（S：1/40）

SK1007（第 5 図）

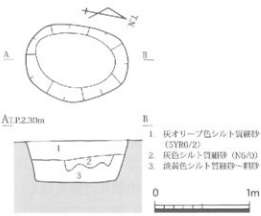
調査区南西側において検出した土坑である。検出した標高は 2.06 mである。平面形は不整な円形を呈し，規模は直径 0.54 × 0.68 m，深さ 0.18 mを測る。断面は逆台形を呈す。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみである。

SK1008（第 68 図）

調査区南西側に検出した土坑である。検出した標高は 2.05 mである。平面形は不整な円形を呈し，規模は直径 0.81 × 1.10 m，深さ 0.43 mを測る。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみである。



第 68 図　SK1008 平・断面図（S：1/40）

SK1009（第5図）

調査区中央の南端において検出した土坑であり，遺構の南半分は調査区外に広がっている。検出した標高は2.18 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は東西方向の長軸1.36 m，南北方向の短軸0.63 m以上，深さ0.21 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1010（第69図）

調査区中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり，ＳＤ1006の上面に位置する。ＳＤ1003は本遺構から派生する。検出した標高は2.16 mである。平面形は不整な隅丸長方形を呈し，規模は南北方向の長軸2.25 m，東西方向の短軸1.80 m，深さ0.35 mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は3層である。

遺物は，土師器杯（572～575・577・579），同椀（576・578），土師質土器羽釜（580），須恵器杯（581～583），平瓦（584・585），土馬（586）である。

573・574の底面は回転ヘラキリが施され，574は台状気味の底部である。576・578は黒色土器Ａ類である。

580は口縁端部外面に鍔が水平方向に付き，体部外面に粗いハケが施される。

581は底面に回転ヘラキリ後にナデ，内面に指ナデが施され，582の底面は回転板ナデが施される。583は低い高台が付き，底面に回転ヘラナデが施される。

584・585は凹面に布目，凸面にゴザ目が残される。

586は丁寧な調整が施され，土馬の足と考えられる。

SK1011（第69図）

調査区中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり，ＳＤ1006の上面に位置する。検出した標高は2.16 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は東西方向の長軸1.17 m，南北方向の短軸0.69 mを測る。土坑の西側は深くなっており，その深さは0.14 mである。

遺物は，須恵器杯（587），同甕（588）である。

SK1012（第70図）

調査区北西側において検出した土坑であり，ＳＢ1004と重複する。検出した標高は1.95～2.00 mである。平面形は隅丸長方形を呈し，規模は南北方向の長軸1.45 m，東西方向の短軸1.04 m，深さ0.10 mを測る。底面は平坦である。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1013（第70図）

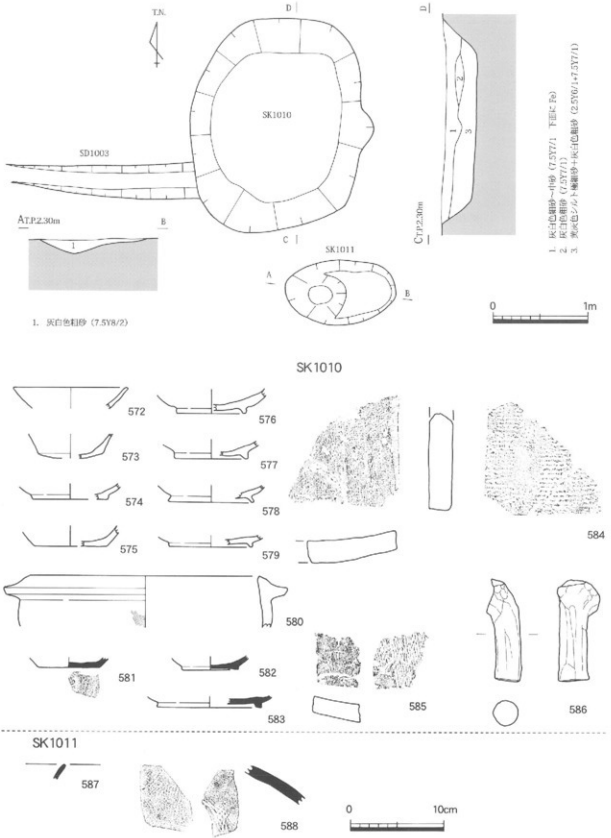
調査区北西側において検出した土坑であり，ＳＢ1004，ＳＤ1007と重複する。検出した標高は1.95 mである。平面形は北側と南側に抉りのある不整な楕円形を呈する。規模は，東西方向の長軸2.20 m，南北方向の短軸1.33 m，深さ0.10 mを測る。底面は平坦であり，数個の小穴を検出した。

遺物は，須恵器蓋（589），飯蛸壺（590）である。

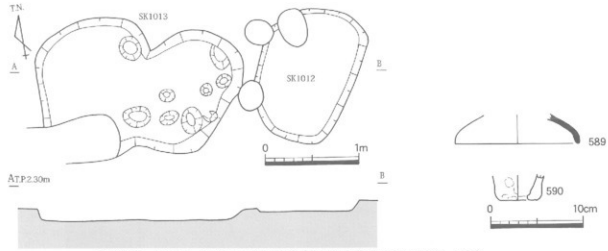
SK1014（第71図）

調査区北西側の北端において検出した土坑であり，ＳＢ1005と重複する。検出した標高は2.05 mである。平面形は不整な方形を呈し，規模は0.86×0.98 m，深さは0.27 mを測る。断面は逆台形を呈する。底面に1個の小穴を検出した。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。



第 69 図　S D 1003, SK1010・1011 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40, 1/4）



第 70 図　SK1012・1013 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40、1/4）

SK1016（第 71 図）

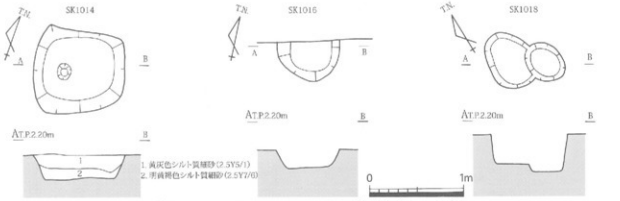
調査区北西側の北端において検出した土坑であり，遺構の北半分は調査区外に広がっている。検出した標高は 2.05 mである。平面形は不整な円形を呈し，規模は直径 0.67 m，深さは 0.19 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1018（第 71 図）

調査区北西側において検出した土坑であり，S B 1002・1005 と重複する。検出した標高は 2.06 mである。平面形は二つの円が合体したような不整な円形であり，規模は長軸 0.90，短軸 0.53 m，深さ 0.40 mを測る。掘り方はほぼ垂直に近い角度で掘り込まれ，底面は段を有する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

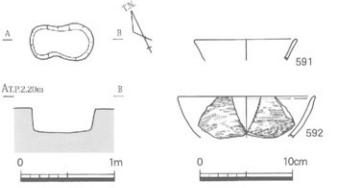


第 71 図　SK1014・1016・1018 平・断面図（S：1/40）

SK1019（第 72 図）

調査区北西側において検出した土坑であり，S B 1002・1005 と重複する。検出した標高は 2.06 mである。平面形は抉りのある楕円形であり，規模は長軸 0.68 m，短軸 0.39 m，深さ 0.25 mを測る。

遺物は，土師器杯（591），瓦器椀（592）である。592 は内外面に丁寧なヘラミガキが施される。



第 72 図　SK1019 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40、1/4）

SK1020（第 73 図）

調査区中央の北側において検出した土坑であり，S B 1003・1006 と重複する。検出した標高は 2.15 mである。平面形は不整な円形を呈し，規模は 0.58 × 0.79 m，深さは 0.15 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1022（第 73 図）

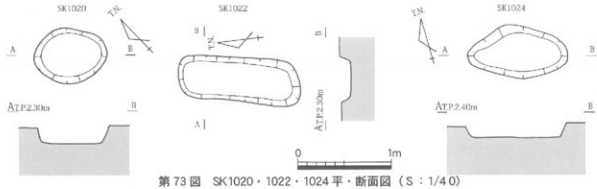
調査区中央の北側において検出した土坑であり，S B 1003，S D 1011 と重複する。検出した標高は 2.15 mである。平面形は南北方向に長い長方形を呈し，規模は長軸 1.31 m，短軸 0.46 m，深さ 0.10 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1024（第 73 図）

調査区中央やや東寄りにおいて検出した土坑である。検出した標高は 2.26 mである。平面形は東西方向に長い不整な楕円形を呈し，規模は長軸 1.06 m，短軸 0.56 m，深さ 0.12 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

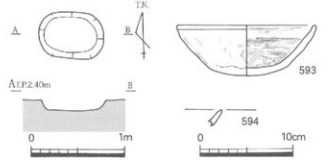


第 73 図　SK1020・1022・1024 平・断面図（S ：1/40）

SK1025（第 74 図）

調査区北東側において検出した土坑である。検出した標高は 2.30 mである。平面形は東西方向に長い楕円形を呈し，規模は長軸 0.70 m，短軸 0.48 m，深さ 0.10 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師質土器鉢（593），土師器Ⅲ（594）である。593 は体部外面にハケ後にナデ，内面に粗いハケが施され，底面は指頭圧痕・ナデが施される。

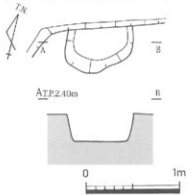


第 74 図　SK1025 平・断面図及び出土遺物実測図（S ：1/40，1/4）

SK1028（第 75 図）

調査区北東隅において検出した土坑であり，S D 1019 と重複する。検出した標高は 2.25 mである。平面形は不整な円形を呈し，規模は東西方向 0.72 m，南北方向 0.46 m以上，深さ 0.30 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみである。

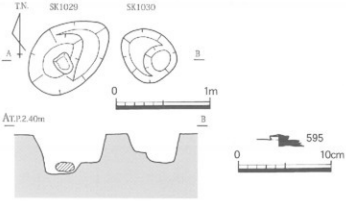


第 75 図　SK1028 平・断面図（S ：1/40）

SK1029（第 76 図）

調査区北東側において検出した土坑である。検出した標高は 2.30 mである。平面形は北東－南西方向に長い楕円形を呈し，規模は長軸 0.97 m，短軸 0.68 m，深さ 0.42 mを測る。掘り方は北東側に段を有し，最深の底面直上に石が検出された。

遺物は，須恵器蓋（595）である。



第 76 図　SK1029・1030 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40．1/4）

SK1030（第 76 図）

調査区北東側において検出した土坑である。検出した標高は 2.30 mである。平面形は不整な円形を呈し，規模は直径 0.60 m，深さ 0.30 mを測る。掘り方は急傾斜であり，北側に三日月形の段を有する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1031（第 77 図）

調査区北東側において検出した土坑であり，ＳＫ 1025 とＳＫ 1032 の間に位置する。検出した標高は 2.30 mである。平面形は東西方向に長い楕円形を呈し，規模は長軸 0.87 m，短軸 0.30 m，深さ 0.06 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1032（第 77 図）

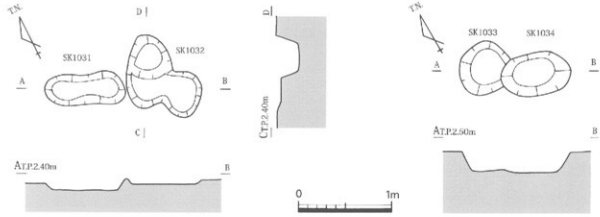
調査区北東側において検出した土坑であり，ＳＫ 1031 の東に接する。検出した標高は 2.34 mである。平面形は南側に抉りを有し北側に大きく膨らみ，３個の土坑が重なったような形である。規模は長軸 0.84 m，短軸 0.77 mを測る。北側の最深部の深さは 0.24 mである。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1033（第 77 図）

調査区東側中央において検出した土坑であり，ＳＢ 1007・1008，ＳＫ 1034 と重複する。検出した標高は 2.37 mである。平面形は不整な円形を呈し，規模は直径 0.58 m，深さ 0.24 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。



第 77図　SK1031 ～ 1034 平・断面図（S：1/40）

SK1034（第 77 図）

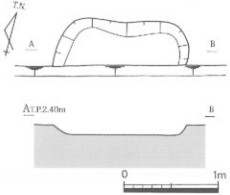
調査区東側中央において検出した土坑であり，ＳＢ 1007・1008，ＳＫ 1033 と重複する。検出した標高は 2.37 mである。平面形は東西方向に長い不整な楕円形を呈し，規模は長軸 0.76 m，短軸 0.44 m，深さ 0.26 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1036（第 78 図）

調査区中央部の南端において検出した土坑であり，遺構の南半分は調査区外に広がっている。検出した標高は 2.29 mである。現況の平面形は東西方向に長い不整な隅丸長方形を呈し，規模は長軸 1.42 m，短軸 0.45 m以上，深さ 0.09 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。



第 78 図　SK1036 平・断面図（S：1/40）

SK1037（第 79 図）

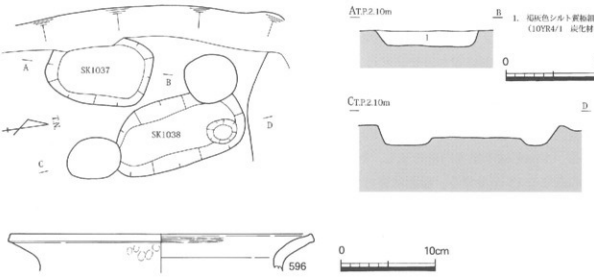
調査区北西端において検出した土坑であり，遺構の一部は調査区外に広がっている。検出した標高は 1.95 mである。平面形は南北方向に長い隅丸長方形を呈し，規模は長軸 1.11 m，短軸 0.73 m，深さ 0.15 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1038（第 79 図）

調査区北西端において検出した土坑であり，ＳＫ 1037 の北東に位置する。検出した標高は 1.95 mである。平面形は南北方向に長い不整な隅丸長方形を呈し，規模は長軸 1.46 m，短軸 0.74 m，深さ 0.15 mを測る。断面は逆台形を呈する。底面北端に直径 0.32 mで深さ 0.21 mを測る小穴が検出される。

遺物は，土師器甕（596）と土師器・須恵器の小片数点である。596 は口縁端部に平坦面を持ち，外面に若干の指頭圧痕，内面に粗い横方向のハケとナデが施される。



第 79 図　SK1037・1038 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40，1/4）

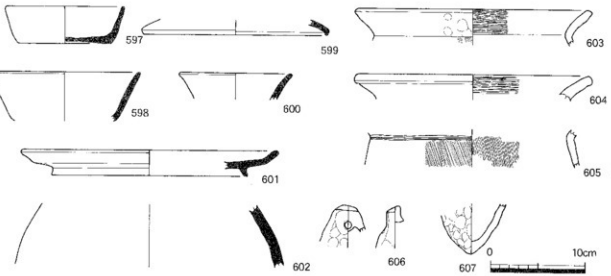
SK1039（第18・80図）

調査区北西隅において検出した土坑であり，遺構の西半分は調査区外に広がっている。検出した標高は1.89～1.95 mである。東方に延びるＳＤ1004・1007は本遺構に向かって低くなっており，本遺構より派生した溝である。検出できた平面図は不整な円形を呈し，規模は南北方向の直径2.24 m，東西方向0.88 m以上，検出面からの深さ0.90 mを測る。断面は船底形を呈する。調査時には底面に僅かな湧水が認められ，井戸である可能性も考えられる。

遺物は，須恵器杯（597・598），同杯蓋（599），同壺（600・602），同皿（601），土師器甕（603～605），飯蛸壺（606），製塩土器（607）である。

597は底面に回転ヘラキリ後に回転ヘラナデ，内面にナデが施される。598は器高の高い杯であり，内外面にナデが施される。599は口縁端部を下方に短く屈曲する。601は口径が大きく，器高が低い器形であり，高い高台が付く。

603・604は口縁部内面に横方向のハケ，605は体部内外面にハケが施される。



第80図　SK1039出土遺物実測図（S：1/4）

SK1048（第81図）

調査区東端中央において検出した土坑である。検出した標高は2.54 mである。平面形は東西に長い不整な楕円形を呈し，規模は東西方向の長軸1.30 m，南北方向の短軸0.90 m，検出面からの深さ0.33 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1049（第81図）

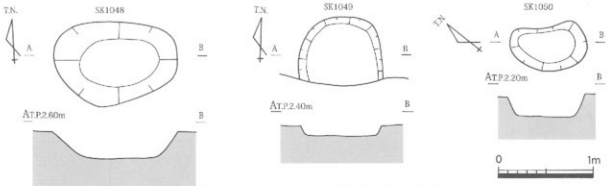
調査区東側において検出した土坑であり，ＳＤ1006・1020に切られる。検出した標高は2.25 mである。平面形は不整な円形を呈し，規模は東西方向の直径0.89 m，南北方向0.73 m以上，検出面からの深さ0.11 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。

SK1050（第81図）

調査区北東側において検出した土坑である。検出した標高は2.09 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は長軸0.81 m，短軸0.46 m，検出面からの深さ0.20 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の小片数点のみであり，図化できるものはない。



第 81 図　SK1048 ～ 1050 平・断面図（S：1/40）

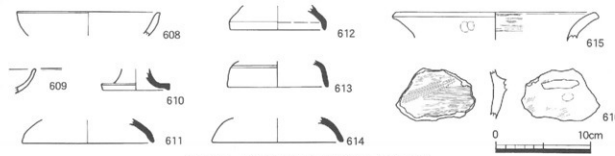
（5）性格不明遺構

SX1001（第 5・82 図）

調査区南西隅において検出した性格不明遺構であり，S B 1001 に切られる。検出した標高は 1.90 mである。遺構の北部のみの検出であり，全容は不明である。検出した遺構は溝状を呈するが，溝の南側は北側より 0.06 m低く，溝の埋土と同じ土が南方に広がっている。

遺物は，土師器杯（608・609），須恵器高杯（610），同杯蓋（611 ～ 614），土師器甕（615・616）である。

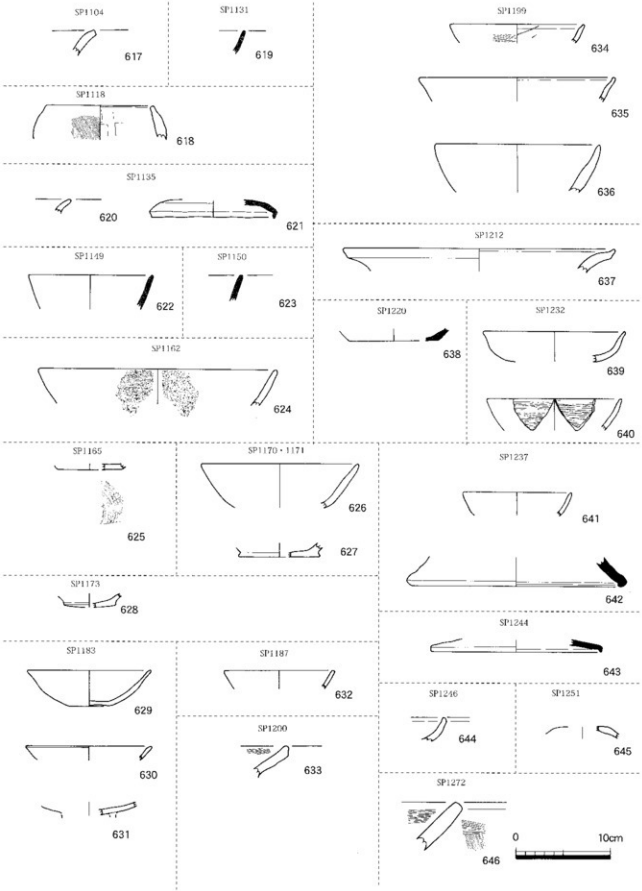
610 は脚裾部が短く下方に屈曲する。611・612 は口縁端部が短く下方に屈曲し，外面に僅かな稜を有する。613 は口縁部と天井部の境に沈線を巡らし，口縁部は直立する。



第 82 図　SX1001 出土遺物実測図（S：1/4）

（6）柱穴（第 83 図）

617 は S P 1104 出土の土師器甕で，618 は S P 1118 出土の土師質土器鉢である。619 は S P 1131 出土の須恵器杯である。620・621 は S P 1135 出土で，620 は土師器甕，621 は須恵器杯蓋である。622 は S P 1149 出土，623 は S P 1150 出土の須恵器杯である。624 は S P 1162 出土の縄文土器浅鉢である。625 は S P 1165 出土の土師器杯であり，回転ヘラキリが施される。626・627 は S P 1170・1171 出土の土師器杯で，627 は回転ヘラキリが施される。628 は S P 1173 出土の土師器杯である。629 ～ 631 は S P 1183 出土で，629・630 は土師器杯，631 は黒色土器 A 類である。632 は S P 1187 出土の土師器杯，633 は S P 1200 出土の土師質土器甕である。634 ～ 636 は S P 1199 出土で，634・635 は土師器杯，636 は同鉢である。637 は S P 1212 出土の土師器甕である。638 は S P 1220 出土の須恵器杯である。639・640 は S P 1232 出土で，639 は土師器杯，640 は瓦器椀である。641・642 は S P 1237 出土で，641 は土師器杯，642 は須恵器高杯である。643 は S P 1244 出土の須恵器杯蓋，644 は S P 1246 出土の土師器杯，645 は S P 1251 出土の土師器蓋，646 は S P 1272 出土の土師質土器鍋である。



第 83 図　1 工区 SP 出土遺物実測図（S：1/4）

（7）第4面出土遺物（第84～87図）

第4面の上面より出土した遺物は，土師器杯（647～657・661），同皿（658～660），同鉢（662），同甕（663～672），同甑（673・674），須恵器杯蓋（675～685），同杯（686～691），同高杯（692），同壺（693～699），同甕（700・701），緑釉陶器碗（702～711），灰釉陶器碗（712～717），青磁碗（718），縄文土器浅鉢（719・720），平瓦（721・722），土馬（723・724），土錘（725～730），石鏃（731）である。

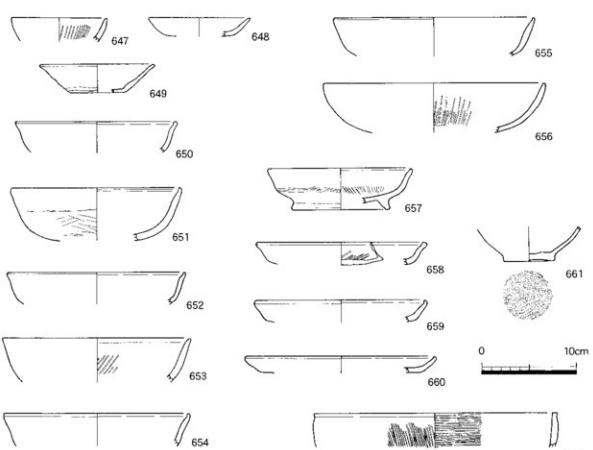
647～649は小形の杯であり，647の内面は放射状暗文が施される。650～654は口縁端部内面に沈線状の凹みをめぐらす杯である。650は内面にヘラミガキ，651は体部下半にヘラケズリ，653は内面に放射状暗文が施される。656は内面に放射状暗文とヘラミガキが施される。657は高台を持ち，内面に放射状暗文が施される。661の底面は回転糸切りである。

658～660は口縁端部内面に沈線状の凹みをめぐらし，658の内面は放射状暗文が施される。

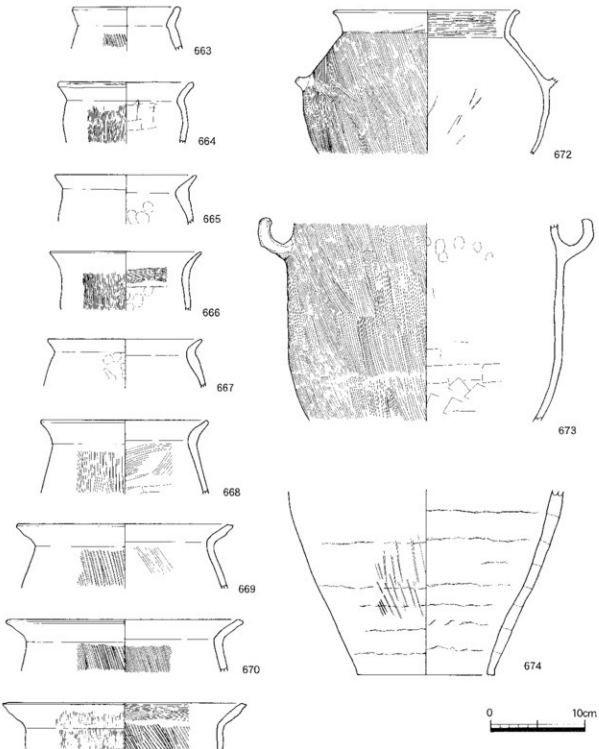
663～～671は体部内外面にハケが施されるものが多い。672は球形の体部で，口縁部内面に横方向のハケ，体部外面に縦方向のハケを施し，一対の扁平な把手を有する。673は体部外面に縦方向のハケを施し，一対の扁平な把手を有する。

675～677は宝珠形の摘み，679・680・683～685は口縁端部を短く下方に屈曲させ，681・682は口縁部内面に僅かな返りを持つ。689の底面は回転ヘラキリが施され，690・691は低い高台が付き，691の底面は回転ヘラキリ後に回転ヘラナデが施される。

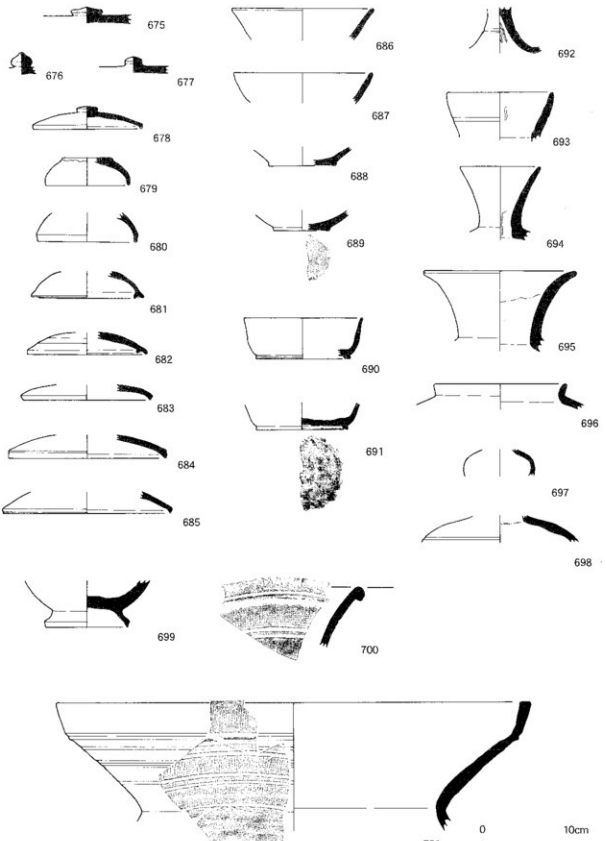
693は外面に浅い沈線がめぐり，内面にヘラによる窯記号が残る。696は短頸壺，697は小形の壺，699は高台を有する。



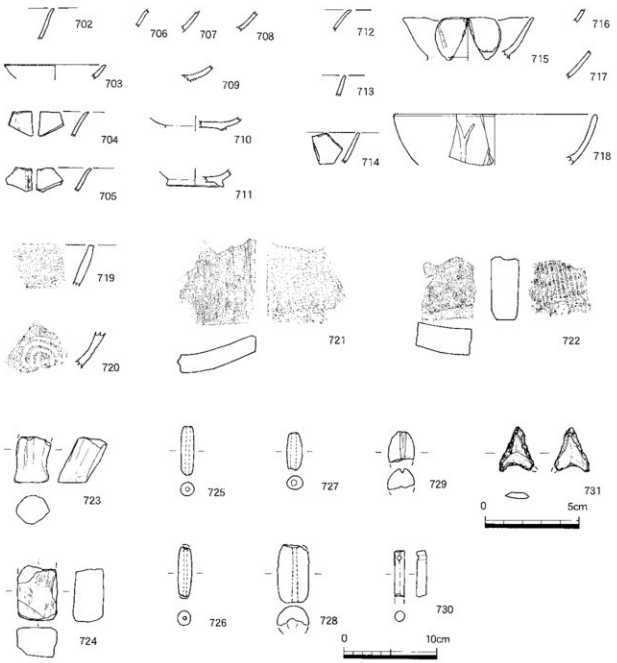
第84図　1工区第4面出土遺物実測図（1）（S：1/4）



第85図　1工区第4面出土遺物実測図（2）（S：1/4）



第 86 図　1 工区第 4 面出土遺物実測図（3）（S：1/4）



第 87 図　1 工区第 4 面出土遺物実測図（4）（S：1/4・1/2）

702 は口縁部が若干外反し，704・705 の口縁部は稜花で，外面に蓮弁文が施される。706 ～ 708 は体部，709 ～ 711 は高台を有する底部である。

712 は口縁端部が僅かに外反する。714・715 の口縁部は稜花で，外面に蓮弁文が施される。

718 は外面に蓮弁文が施される。

719・720 は縄文土器で，720 は外面に輪状の沈線が施される。

721 は凹面に布目・ヘラナデ，凸面にゴザ目，722 は凹面にナデ，凸面にゴザ目が残される。

723・724 は土馬の足の一部である。

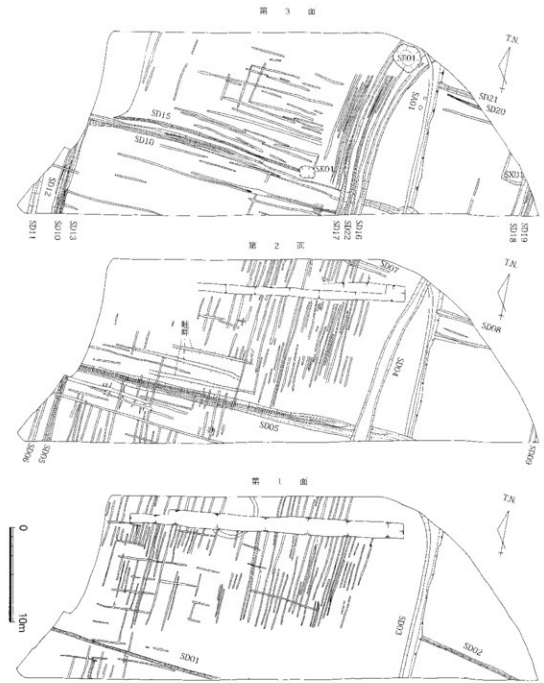
725 ～ 728 は管状の土錘であり，725 ～ 727 は小形，728 はやや大形である。729 は有溝の土錘，730 は端部に孔のある棒状の土錘である。

731 はサヌカイト製の凹基式石鏃で，先端部から基部にかけての縁辺を両面から加工する。

2　江戸時代

平安時代の遺構面より上層において第１面～第３面の合計３面の江戸時代の遺構面を検出した。遺構面の土層は，近世条里型水田の土壌層である灰白色シルト質細砂～中砂と非土壌層である黄灰色シルト質細砂が交互に堆積する。第３面は標高 2.40 m前後，第２面は 2.45 m前後，第１面は 2.50 m前後である。第３面の遺構は，井戸・土坑・溝・犂跡が調査区全域に検出され，第２面は溝・犂跡・畔畔が調査区全域に検出され，第１面は犂跡が検出される。その出土遺物から，これらの遺構面にはほとんど時期差はないと考えられる。

本編では下層の第３面より記述する。



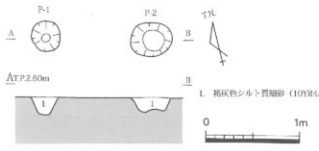
第88図　第１～３面遺構平面図（S：1/400）

1）第３面

（１）柱列

SA01（第 89 図）

調査区北東側において検出した。２個の柱穴のみの検出であり根拠としてはやや弱いが，柱列とする。検出した標高は 2.32 mである。柱列の方位はＮ－70°－Wである。柱穴間の距離は 0.75 mを測る。Ｐ－１の平面形は円形を呈し，直径 0.30 m，深さ 0.18 mである。Ｐ－２は楕円形を呈し，直径 0.37 × 0.44 m，深さ 0.15 mである。



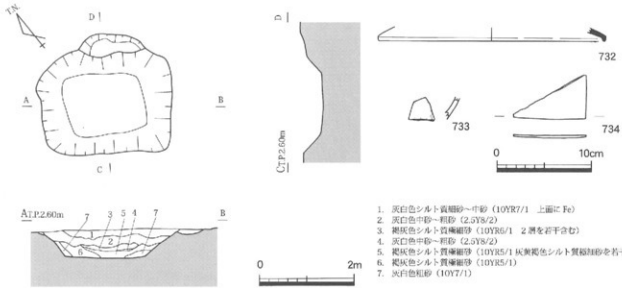
第 89 図　SA01 平・断面図（S：1/40）

（２）井戸

SE01（第 90 図）

調査区北東隅において検出した井戸であり，ＳＤ 16・17 を切っている。検出した標高は 2.37 m前後である。平面形は隅丸長方形を呈し，規模は東西方向 2.75 m，南北方向 2.55 m，検出面からの深さは 0.50 mを測る。北側の上端が膨らみ，段を持つ。断面は逆台形を呈する。底面は上端同様に隅丸長方形を呈し，ほぼ平坦である。埋土は７層である。

図化した遺物は，須恵器杯蓋（732），青磁碗（733），加工板（734）であるが，その他の遺物に陶磁器の小片がある。



第 90 図　SE01 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80，1/4）

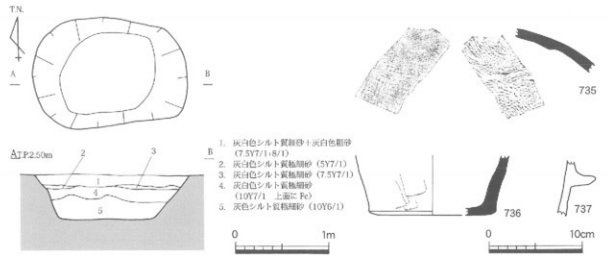
（３）土坑

SK01（第 91 図）

調査区中央において検出した土坑であり，ＳＤ 15 を切っている。検出した標高は 2.30 m前後である。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は東西方向の長軸 1.65 m，南北方向の短軸 1.13 m，検出面からの深さ 0.47 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。埋土は５層である。

図化できた遺物は，須恵器甕（735・736），土師質土器鍋（737）であるが，その他に陶磁器や染付等の破片が出土した。

735 は外面に平行目のタタキ・カキ目，内面に当て具痕が残される。



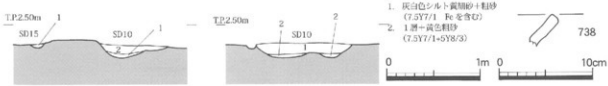
第 91 図　SK01 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40，1/4）

（4）溝

SD10（第 88・92 図）

調査区中央において検出した溝であり，ＳＤ 16・17・22 に切られる。検出した標高は 2.28 ～ 2.50 mである。溝の方位はＮ－98°－Ｅであり，ほぼ直線状に東西方向に延び，西端で南方向に直角に曲がる。溝の東側は１本の溝であるが，西側は２本ないし３本に分流する。幅は 0.50 ～ 0.90 m，深さは 0.10 ～ 0.17 mを測る。断面は船底形を呈する。底面のレベルは南から北に緩やかに下がり，東から西に向かって緩やかに下がる。

遺物は，土師質土器鍋（738），陶磁器の破片である。

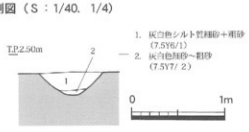


第 92 図　SD10・15 断面図及び出土遺物実測図（S：1/40，1/4）

SD11（第 88・93 図）

調査区南西隅において検出した溝である。検出した標高は 2.33 m前後である。溝の方位はＮ－０°－Ｅである。溝の幅は 0.78 m，深さは 0.24 mを測る。断面は船底形を呈する。底面のレベルは平坦である。

遺物は，陶磁器の破片数点のみである。



第 93 図　SD11 断面図（S：1/40）

SD12（第 88 図）

調査区南西隅において検出した溝であり，ＳＤ 10 に切られる。検出した標高は 2.30 mである。溝の方位はＮ－０°－Ｅであり，ＳＤ 10 と同方向である。幅は 0.15 m，深さは 0.03 mを測る。断面は船底形を呈する。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

SD13（第 88 図）

調査区南西隅において検出した溝であり，ＳＤ 10 に切られる。検出した標高は 2.35 mである。溝の方位はＮ－０°－Ｅである。幅は 0.19 m，深さは 0.08 mを測る。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

SD15（第 88 図）

調査区中央において検出した溝であり，東端をＳＫ 01 に切られる。検出した標高は 2.38 mである。溝の方位はＮ－ 98°－Ｅであり，西端付近で少し湾曲する。幅は 0.13 ～ 0.38 m，深さは 0.03 ～ 0.08 mを測る。断面は船底形を呈し，底面は東から西に向かって低くなる。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

SD16（第 88・94 図）

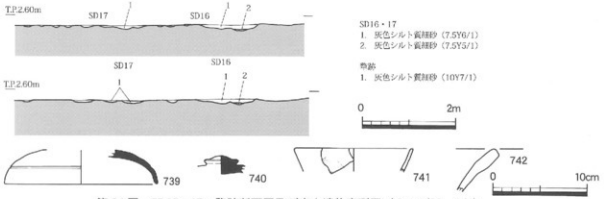
調査区東側において検出した溝であり，ＳＤ 10 を切り，ＳＥ 01 に切られる。検出した標高は 2.45 m前後である。溝の方向は南北であり，北東方向に湾曲する。溝底面の西側は浅い段となっており，東側で深くなる。幅は 1.00 ～ 1.50 m，深さは 0.06 ～ 0.10 mを測る。底面のレベルは南から北に向かって僅かに低くなる。

遺物は，須恵器蓋（739・740），磁器碗（741），土師質土器鍋（742）である。

SD17（第 88・94 図）

調査区東側において検出した溝であり，ＳＤ 10 を切り，ＳＥ 01 に切られる。検出した標高は 2.42 m前後である。溝の方向はＳＤ 16 と平行で南北方向に延び，北東方向に湾曲する。北側では 1 本の溝であり，底面の西側は浅い段，東側で深くなるが，南側では 2 本の溝に分流する。幅は 0.90 m，深さは 0.06 mを測る。底面のレベルは南から北に僅かに低くなる。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。



第 94 図　SD16・17・撹乱断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/80．1/4）

SD18（第 88・95 図）

調査区南東隅において検出した溝であり，ＳＸ 01 を切っている。検出した標高は 2.77 m前後である。溝の方位はＮ－ 10°－Ｅであり，ＳＤ 19 と平行に延びる。幅は 0.92 m，深さは 0.09 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

SD19（第 88・95 図）

調査区南東隅において検出した溝である。検出した標高は 2.77 m前後である。溝の方位はＮ－ 10°－Ｅである。幅は 0.43 m，深さは 0.05 mを測る。断面は船底形を呈する。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

第 95 図　SD18・19・21 断面図（Ｓ：1/4）

SD20（第88図）

調査区北東隅において検出した溝である。検出した標高は2.73 mである。溝の方位はN－102°－Eである。幅は0.25 m，深さは0.05 mを測る。断面は船底形を呈する。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

SD21（第88図）

調査区北東隅において検出した溝である。検出した標高は2.73 mである。溝の方位はN－102°－Eであり，SD 20と平行に延びる。幅は0.54 m，深さは0.14 mを測る。断面は船底形を呈する。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

SD22（第88図）

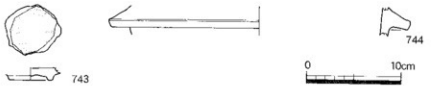
調査区東側において検出した溝であり，SD 16とSD 17の間に位置し，SD 10を切っている。検出した標高は2.42 m前後である。溝の方向はSD 16と平行に延びる。幅は0.30 m，深さは0.05 mを測る。断面は船底形を呈す。底面のレベルは南から北に僅かに低くなる。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

（5）性格不明遺構

SX01（第88・96図）

調査区南東隅において検出した落ち込みであり，SD 18に切られ，北側は調査区外に広がる。検出した標高は2.75 mである。検出した範囲の平面形は方形であり，規模は南北2.82 m以上，東西2.25 m以上，深さ0.15 mを測る。底面は平坦である。



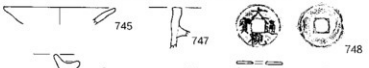
第96図　SX01出土遺物実測図（S：1/4）

遺物は，磁器碗（743），土師質土器鍋（744）である。743は見込みに砂日がある。

（6）犂跡

犂跡（第88・97図）

調査区全域にわたって検出したが，SD 17より西側に集中する。検出した標高は2.35～2.40 mである。犂跡の方向は，SD 17の西側では南北方向に延びるが，調査区中央では東西方向に延びる。つまり，南北方向の犂はSD 16・17・22と平行しており，東西方向の犂はSD 10・15と平行している。犂の幅は10～30cm，深さは2cmを測る。埋土は灰白色シルト質細砂である。



第97図　犂跡出土遺物実測図（S：1/4，1/2）

遺物は，磁器皿（745），土師質土器足釜（746），瓦質土器鍋（747），大観通宝（748）である。748は1107年に鋳造された北宋銭である

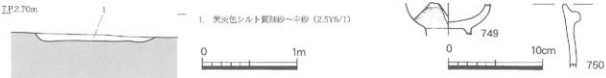
2）第2面

（1）溝

SD04（第88・98図）

調査区東側において検出した溝であり，SD 05を切り，SD 03に切られる。検出した標高は2.57 mである。溝の方位はN－10°－Eであり，幅は1.00～1.80 m，深さは0.10 mを測る。断面は逆台形を呈する。底面のレベルは平坦である。

遺物は，磁器碗（749），土師質土器足釜（750）である。

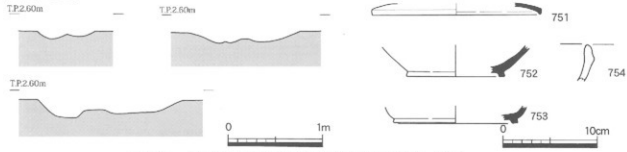


第 98 図　SD04 断面図及び出土遺物実測図（S：1/4 0．1/4）

SD05（第 88・99 図）

調査区中央において検出した溝であり，ＳＤ 04 に切られる。溝の位置は第３面で検出したＳＤ 10 とほぼ同位置である。検出した標高は 2.35 ～ 2.50 mである。溝の方位はＮ－ 90°－Ｅである。溝は直線状に東西方向に延び，西端で南方向に直角に曲がる。幅は 0.40 ～ 1.95 mを測り，２～４本の落ち込みがある。最深部の深さは 0.04 ～ 0.12 mを測る。底面のレベルは南から北に緩やかに下がり，東から西に向かって緩やかに下がる。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。

遺物は，須恵器杯蓋（751），同杯（752・753），土師質土器足釜（754）だが，その他に陶磁器の小片がある。



第 99図　SD05 断面図及び出土遺物実測図（S：1/40．1/4）

SD06（第 88・100 図）

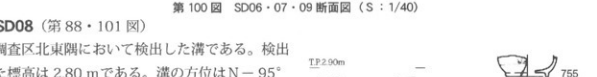
調査区南西隅において検出した溝である。検出した標高は 2.43 mである。溝の方位はＮ－８°－Ｅであり，第３面ＳＤ 11 と同位置である。溝の幅は 0.57 m，深さは 0.04 mを測る。

遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

SD07（第 88・100 図）

調査区北東隅において検出した溝である。検出した標高は 2.50 mである。溝の方位はＮ－９８°－Ｅである。溝の幅は 0.75 m，深さは 0.05 ～ 0.10 mを測る。断面は逆台形である。

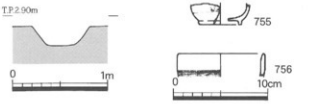
遺物は，陶磁器の破片数点のみであり，図化できるものはない。



第 100 図　SD06・07・09 断面図（S：1/40）

SD08（第 88・101 図）

調査区北東隅において検出した溝である。検出した標高は 2.80 mである。溝の方位はＮ－ 95°－Ｅであり，第３面のＳＤ 21 とほぼ同位置である。幅は 0.34 ～ 0.60 m，深さは 0.20 mを測る。断面は逆台形を呈する。



遺物は磁器銚子（755），同碗（756）である。　第 101 図　SD08 断面図及び出土遺物実測図（S：1/40．1/4）

SD09（第88・100図）

調査区南東隅において検出した溝である。検出した標高は2.83 mである。溝の方位はN－0°－Eであり，第3面ＳＤ19とほぼ同位置である。幅は0.63 m，深さは0.05 mを測る。

（2）犂跡

犂跡（第88図）

ＳＤ04より西側の調査区において検出した。検出した標高は2.40～2.55 mである。犂跡は南北方向に延びるものが大部分であるが，ＳＤ05の両側では東西方向に延びる犂もある。また，ＳＤ05の北側には幅0.40 mの畦畔が2本検出された。犂の幅は10～30cm，深さは2cmを測る。埋土は灰白色シルト質細砂である。

3）第1面

（1）犂跡

犂跡（第88図）

調査区の東側を除いた範囲において検出した。検出した標高は2.43～2.53 mである。大部分の犂跡は南北方向に延びるが，東西方向に等間隔で検出される犂跡もある。犂の幅は10～30cm，深さは2cmを測る。埋土は灰白色シルト質細砂である。調査区中央の北端に，褐鉄鉱が帯状で円形を描いている部分を検出した。褐鉄鉱の幅は0.40 mで，円の直径は約5.00 mを測る。帯状の褐鉄鉱には偶蹄目の動物の足跡が多量に検出された。

3　近代

（1）溝

SD01（第88図）

調査区南西側において検出した溝であり，東西方向で直線状に延びる。溝の中には長さ0.80 mの土管が埋設されている。

SD02（第88図）

調査区南東側において検出した溝であり，東西方向で直線状に延びる。溝の西端はＳＤ03と合流する。溝の中には長さ0.80 mの土管が埋設されている。

SD03（第88・102図）

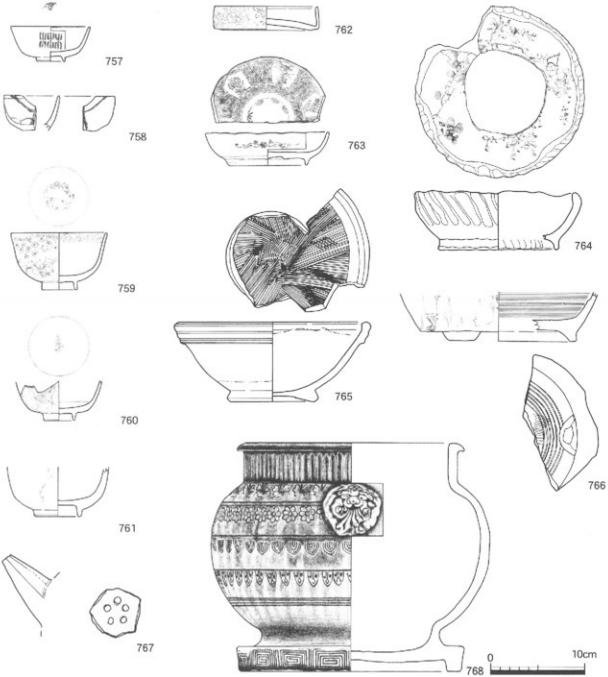
調査区東側において検出した溝であり，南北方向に延びる。溝は直線であるが，北端は僅かに西方に曲がる。幅は0.30 m，深さは0.20 mを測り，溝の中には多量の石・土器・瓦が充填されている。調査は中央部1.20 mの範囲のみ実施する。

図化した遺物は，磁器碗（757～761），同皿（762・763），同鉢（764），同急須（767），陶器擂鉢（765），同火鉢（766），同瓶掛（768）であるが，その他にも多量の陶磁器がある。

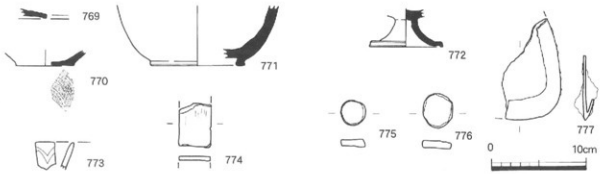
757は外面に染色体文様が書かれる。758は膠による補修が行われる。759・762は型紙刷による染付である。763は蛇の目凹型高台である。764は内面に草花文を描く。765は備前焼で内面前面に擂り目がある。767は屋島焼である。768は瀬戸・美濃系である。

4　第1～3面出土遺物（第103図）

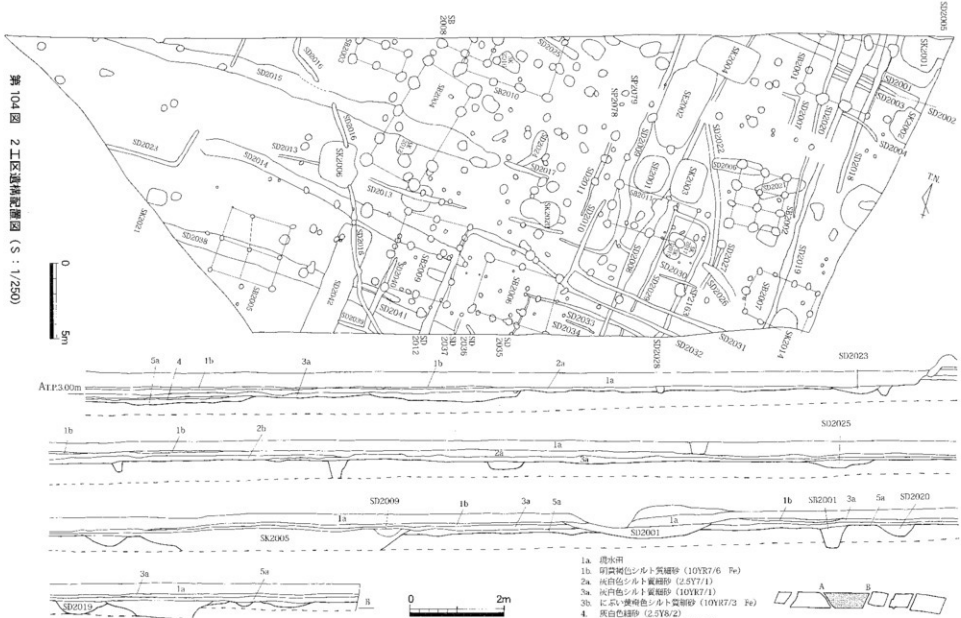
第3面出土の遺物は，須恵器杯蓋（769），同杯（770），同壺（771），青磁碗（773），砥石（774），第1・2面の遺物は，須恵器高杯（772），泥面子（775・776），鉄鏃（777）である。



第 102 図　SD03 出土遺物実測図（S：1/4）



第 103 図　第 1 ～ 3 面出土遺物実測図（S：1/4）



第 105 図　2 工区北壁土層図（S：1/80）

第 104 図　2 工区遺構配置図（S：1/250）

２．２工区

２工区は本遺跡の中央から西側に位置し，１工区と５工区の間である。調査区の平面形は逆台形を呈し，北側の長さは約 64.00 m，南側は約 38.00 m，幅は約 21.00 mである。調査区中央の南北軸座標値はX＝146.780，東西軸座標値はY＝55.750である。西端は細い農道に，東端は細い農道と水路に区画される。遺構面は１面である。遺構の時期は弥生時代と古代と江戸時代に比定され，掘立柱建物跡や溝・土坑等の多数の遺構が調査区全域に検出された。

調査区全体の土層は，上層から現水田耕作土・１～３枚の近世条里型水田・遺構検出面の地山が堆積する。遺構検出面のレベルは，南東から北西に向かって緩やかに低くなっており，東端の標高は 3.05 m，西端では 2.50 mである。地表面から遺構面までの深さは，0.50 mである。

１　弥生時代

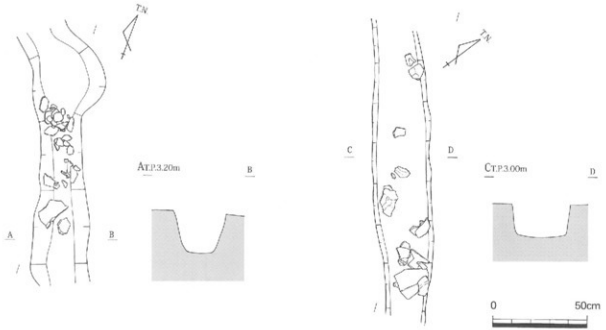
（１）溝

SD2016（第 104・106・107 図）

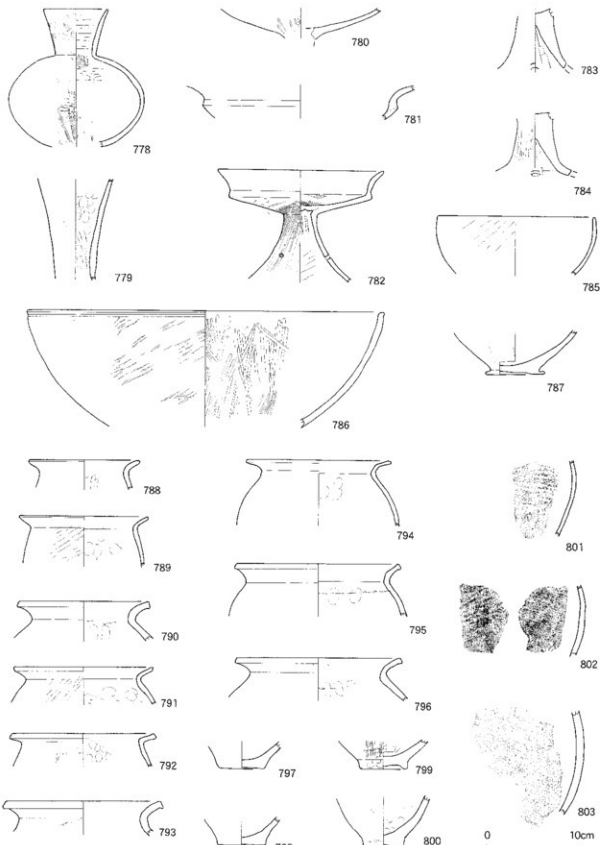
調査区中央の西寄りにおいて検出した溝であり，ＳＤ 2014・2015・2038 ～ 2042，ＳＫ 2006 に切られる。検出した標高は 2.80 ～ 2.98 mである。溝の方位はＮ－ 32° －Ｗであり，僅かに蛇行する。溝の幅は 0.25 ～ 0.35 m，深さは 0.11 ～ 0.27 mを測る。溝の断面は逆台形を呈する。底面のレベルは南から北に向かって緩やかに下がる。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂である。ＳＤ 2015 の北側とＳＤ 2042 の東側の２カ所では土器が集中して出土する。

遺物は，弥生土器壺（778・793），同細頸壺（779），同高杯（780 ～ 784），同鉢（785 ～ 787），同甕（788 ～ 792・794 ～ 803）である。

778 は扁平な円形の体部に外反する口縁部が付く。口縁部外面はハケ後にヘラミガキ，内面に横方向のヘラナデが施される。体部外面上半はハケ後にナデ，中央は横方向のヘラミガキ，下半は縦方向のヘラミガキが施され，内面上位は絞り目・ヘラケズリ，下位はハケが施される。779 は外面にハケ・ナデ，内面に指頭圧痕・絞り目が施される。



第 106 図　SD2016 平・断面図（Ｓ：1/20）



第 107 図　SD2016 出土遺物実測図（S：1/4）

780は杯部下半であり外面にヘラミガキが部分的に残存し，円盤充塡に伴う接合痕がある。781は口縁部と体部の境に明瞭な稜を持つ。782は口縁部と体部の境に明瞭な稜を持ち，体部内外面に分割ヘラミガキ，脚部外面にヘラミガキ，内面にヘラケズリが施され，脚部に3個の小孔を有する。783・784は脚部で孔を有する。

785は半球状の器形で，外面上位に間隔の広い平行目のタタキが施される。786は大形の鉢で，外面に平行目のタタキ，内面にヘラミガキが施される。

788～792・794～796は「く」の字状口縁部であり，788は内面にヘラケズリ，789・791は体部外面に平行タタキ，内面に指頭圧痕，790・794～796は体部内面に指頭圧痕，792は外面にハケ，内面に指頭圧痕，793は外面にハケが施される。797・798は平底，799は外面に平行タタキ後にヘラミガキ，内面にヘラケズリ，底面に指頭圧痕が施される。800は外面に板ナデ・指頭圧痕，内面に指ナデが施され，底面中央がやや凹む。801・802は外面に平行目のタタキが施される。

2　古代

（1）掘立柱建物跡

SB2001（第108図）

調査区北東側において検出した掘立柱建物跡であり，ＳＤ2001～2003に切られ，2018～2020を切っている。検出した標高は3.05～3.11ｍである。規模は，東西3間×南北1間(5.24×5.20ｍ)である。柱穴は8個であり，Ｐ－1・Ｐ－2は調査区外にかかる。東西の芯芯間距離は1.65ｍ，南北は4.30～4.50ｍを測る。建物の主軸方位はＮ－83°－Ｗである。柱穴の平面形は不整な円形および不整な楕円形を呈し，Ｐ－4は括れのある円形である。Ｐ－5の直径は0.46ｍで規模が小さいが，その他の柱穴は大きく直径0.70～0.85ｍを測る。南側の柱穴は浅く，深さ0.20～0.30ｍを測るが，北側柱穴は深さ0.28～0.68ｍである。Ｐ－3に柱材（810）の基部が残存する。大部分の柱穴は断面逆台形を呈する。柱穴の埋土は5層に分けられ，Ｐ－5～7は柱痕の存在を示す堆積状態である。

遺物は，須恵器杯（804），土師器甕（805～808），カマド（809），柱材（810）である。

804は直線的な体部である。810は現存長48.8㎝，直径13.2㎝を測り，基部を加工する。側面には枝払いの加工がある。

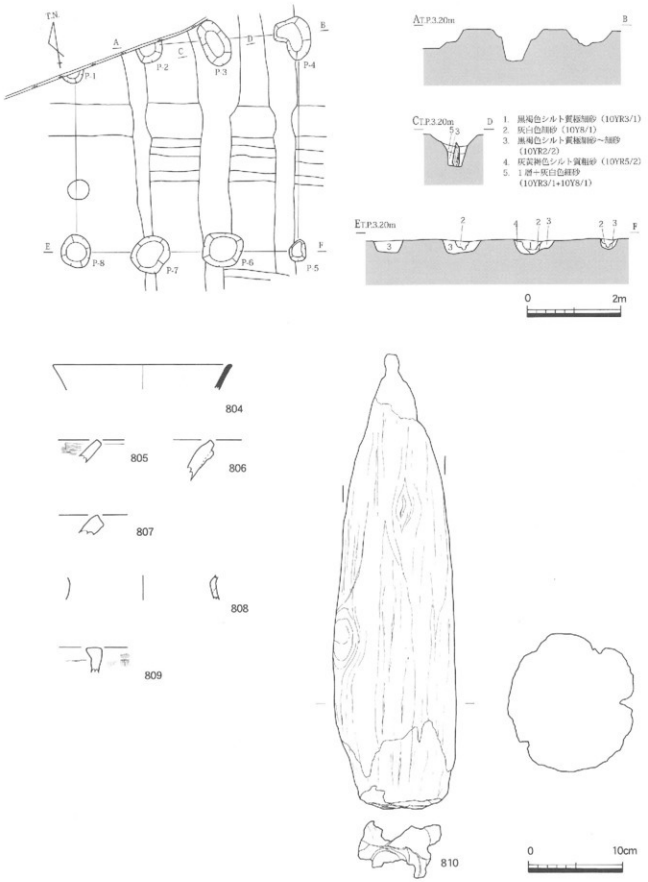
SB2002（第109図）

調査区東側において検出した総柱の掘立柱建物跡であり，ＳＤ2006・2021，ＳＫ2013を切っている。検出した標高は3.07ｍである。規模は，東西2間×南北3間（3.85×4.40ｍ）である。柱穴は12個であり，東西の芯芯間距離は1.60ｍ，南北は1.30ｍを測る。建物の主軸方位はＮ－5°－Ｗである。柱穴の平面形は不整な円形を呈し，直径0.45～0.80ｍを測る。検出面からの深さは0.20～0.44ｍを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。柱穴の埋土は4層に分けられ，Ｐ－5・6は柱痕の存在を示す堆積状態である。Ｐ－9は底面に根石が残存する。

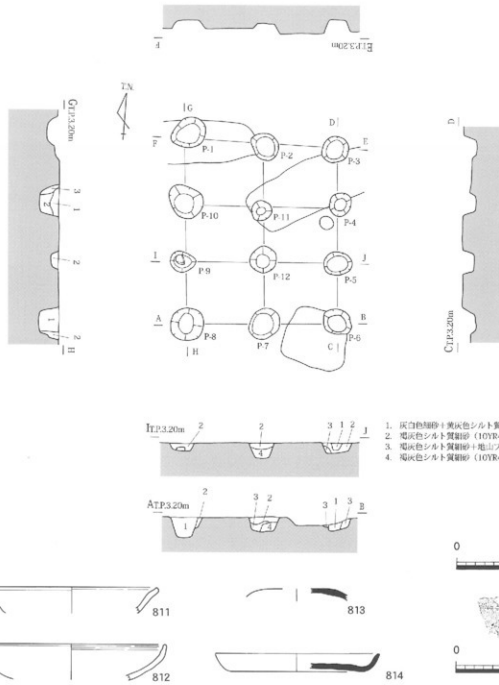
遺物は，土師器杯（811・812），須恵器杯蓋（813），同皿（814），土師器甕（815）である。

811は口縁端部内面に非常に僅かな沈線状の凹みを持つ。812は口縁部と体部の境に僅かな稜を持ち，口縁端部内面に非常に僅かな沈線を廻らす。体部外面はヘラケズリが施される。

814は器高が低く，上底の底部から緩やかな傾斜で体部が立ち上がる。底面は回転ヘラキリ後にナデ，体部は僅かなヘラケズリが施される。



第 108 図　SB2001 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80、1/4）



第 109 図　SB2002 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80、1/4）

SB2003（第 110 図）

調査区中央西寄りの北端において検出した掘立柱建物跡であり，遺構の北側は調査区外に広がる。検出した標高は 2.90 m前後である。検出した範囲の規模は，東西２間×南北１間（4.07 × 2.18 m）であるが，北方向に延びると考えられる。検出した柱穴は６個であり，Ｐ－１は調査区外にかかる。東西の心々間距離は 1.70 m，南北は 1.50 ～ 1.65 mを測る。建物の主軸方位はＮ－５°－Ｅである。柱穴の平面形は不整な円形を呈し，直径は 0.55 ～ 0.75 m，深さ 0.34 ～ 0.48 mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。Ｐ－３・５・６は底面に小穴を検出し，Ｐ－４は底面直上に根石を残存する。柱穴の埋土は６層に分けられる。

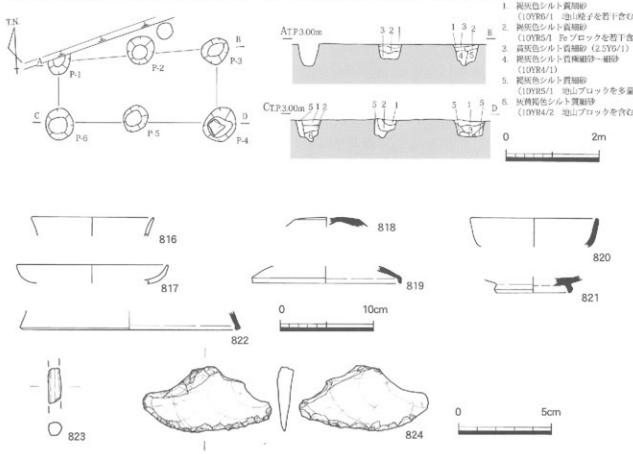
遺物は，土師器杯（816），同皿（817），須恵器杯蓋（818･819），同杯（820･821），同高杯（822），鉄釘（823），ナイフ形石器（824）である。

816は直線的な体部であり，内外面にナデが施される。817は器高の低い器形であり，底部からなだらかな傾斜で立ち上がる。

819は口縁端部を短く下方に屈曲し，口縁部と天井部の境に明瞭な稜を持つ。

820は急傾斜で立ち上がる体部である。821はやや高い高台を有する。

823は断面方形の釘である。824はサヌカイト製で，刃部を両面から加工している。



第 110 図　SB2003 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80，1/4，1/2）

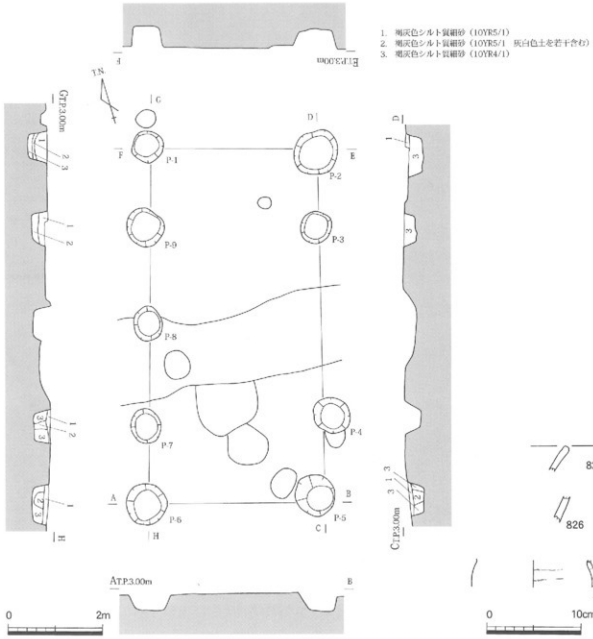
SB2004（第 111 図）

調査区中央において検出した掘立柱建物跡であり，ＳＫ 2008 を切り，ＳＤ 2015 に切られ，ＳＫ 2012 と重複する。検出した標高は 2.85～2.95 mである。規模は，東西１間×南北４間（4.47×8.25 m）である。柱穴は９個検出するが，Ｐ－３とＰ－４の間に柱穴が存在していた可能性があり，本来は 10 個であったと考えられる。東西の芯芯間距離は 3.75 m，南北の芯芯間距離は 1.60 mと 2.20 mを測る。南北方向の柱穴の配置は，中央の２間が 2.20 mと広く，両端の２間は 1.60 mで狭くなる。建物の主軸方位はＮ－ 15°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈し，直径 0.65～1.04 mを測る。検出面からの深さは 0.25～0.57 mを測る。大部分の柱穴は断面逆台形を呈する。柱穴の埋土は３層に分けられ，Ｐ－５～７は中央に柱痕の存在を示す堆積状態である。Ｐ－１・９は２ないし３層堆積し，Ｐ－２・３は単一層である。

遺物は，土師器甕（825），土師質土器甕（826），弥生土器甕（827）である。

825 は内面に若干の凹みがあり，ヘラナデが施される。826 は外面にヘラナデが施される。

827 は内面に接合痕が明瞭に残り，混入品である。



第 111 図　SB2004 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80、1/4）

SB2008（第 112 図）

調査区中央の北端において検出した掘立柱建物跡であり，遺構北側の大部分は調査区外にかかるため柱穴 4 個のみ検出した。検出した標高は 2.85 ～ 2.88 mである。検出できた規模は東西 2 間，南北 1 間（3.87 × 2.05 m）である。東西の芯芯間距離は 1.65 m，南北の芯芯距離は 1.70 mを測る。建物の主軸方位はＮ－6°－Ｅである。柱穴の平面形は円形を呈し，直径 0.57 ～ 0.74 m，深さは 0.25 ～ 0.57 mを測る。大部分の柱穴は断面逆台形を呈する。

遺物は，土師器甕（828）である。

SB2009（第 113 図）

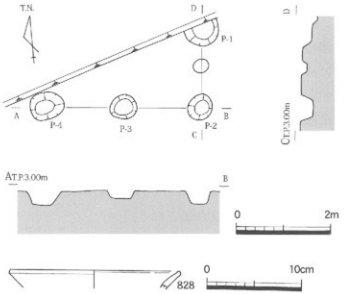
調査区中央の南側において検出した掘立柱建物跡であり，ＳＤ 2012・2040 に切られ，ＳＤ 2014 と重複する。検出した標高は 2.95 ～ 3.01 mである。規模は東西 2 間，南北 2 間と 3 間（1.70 × 5.85 m）である。東西の芯芯間距離は 2.20 m，南北の芯芯間距離は 1.55 ～ 3.10 mを測る。建物の主軸

方位はN－3°－Eである。柱穴は9個である。東列側柱は4個で3間であり，両端の柱間は狭く，中央は広い。西列側柱は3個で2間である。柱穴の平面形は円形・楕円形を呈し，直径0.35～0.64 mを測る。検出面からの深さは0.15 mのP－9を除いて0.50 m前後である。柱穴の断面は逆台形を呈する。

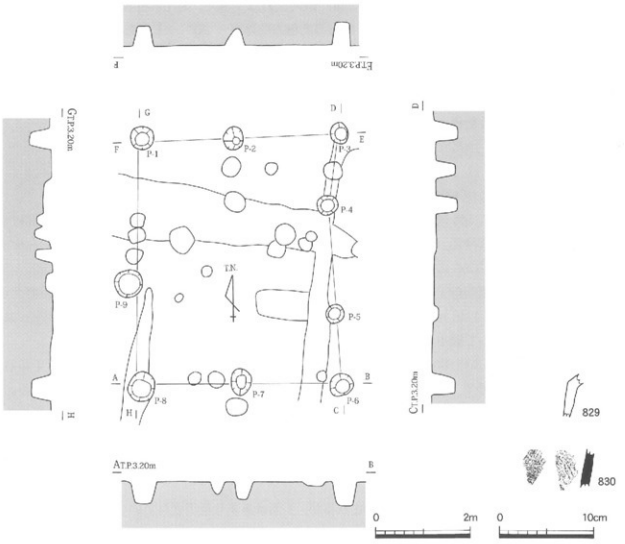
遺物は，土師器鍋（829），須恵器甕（830）である。

829は体部上位の破片である。

830は外面に格子目のタタキ・カキ目，内面に当て具痕が残される。



第112図　SB2008 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80．1/4）



第113図　SB2009 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80．1/4）

SB2010（第114図）

調査区中央の北端において検出した掘立柱建物跡であり，遺構北側は調査区外にかかるため柱穴7個のみ検出した。検出した標高は2.85～2.95 mである。検出できた規模は東西3間，南北2間（6.85×4.43 m）である。東西の芯芯間距離は1.80～2.20 m，南北の芯芯間距離は2.00 mを測る。建物の主軸方位はN－3°－Eである。柱穴の平面形は円形・楕円形を呈し，P－6は不整な円形である。直径0.57～0.85 m，深さは0.25～0.40 mを測る。大部分の柱穴は断面逆台形を呈する。埋土は5層に分けられる。

遺物は土師器甕（831），土師器足釜（832），須恵器杯（833），同ハソウ（834）である。

831は体部から鋭角に短く外反する口縁部である。832は口縁端部外面に短い鍔が付き，外面に指頭圧痕，内面にナデが施される。

833は直線的に延びる体部である。

SB2011（第115図）

調査区中央の東側において検出した掘立柱建物跡であり，SD 2008・2009・2028・2029，SK 2027に切られる。検出した標高は2.99～3.10 mである。規模は東西2間，南北1間と2間（6.10×3.35 m）である。南列側柱はやや短く，中央のP－5が内側に位置するため，建物の平面形は乱れている。東西の芯芯間距離は2.20と3.35 m，東列側柱は1間で，芯芯間距離は2.55 m，西列側柱は2間で，芯芯間距離は1.50 mを測る。建物の主軸方位はN－90°－Eである。柱穴の平面形は円形と不整な円形を呈し，直径は0.33～0.65 m，深さは0.14～0.56 mを測る。P－2・4・5は深いが，他の柱穴は浅い。柱穴の断面は逆台形を呈する。P－5は底面直上に根石が残存する。埋土は単一層である。

遺物は，土師器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

（2）溝

SD2014（第104・116図）

調査区中央から西側において検出した溝であり，SD 2016を切り，SB 2006，SD 2012に切られ，SB 2009と重複する。検出した標高は2.77～2.96 mである。溝の方位はN－78°－Wである。溝の東端はSB 2009の東側に検出され，直線的に西方向に延びる。溝の西端はSD 2023付近で自然消滅するが，延長線上には西接する1工区のSD 1023があり，同一遺構の可能性が考えられる。溝の幅は0.72～1.35 m，深さは0.05～0.17 mを測る。断面は浅い船底形を呈し，底面のレベルは東から西に向かって緩やかに低くなる。埋土は4層である。

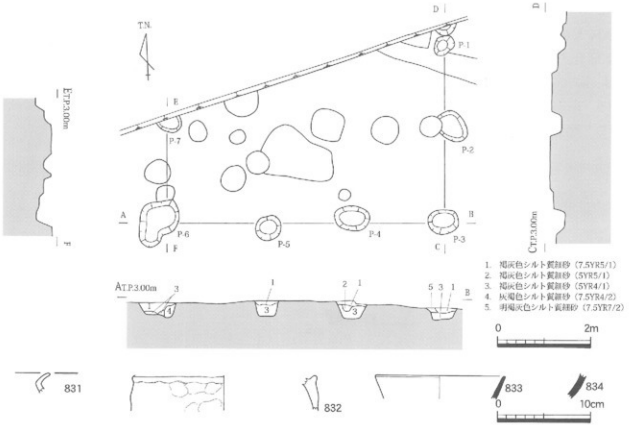
遺物は，須恵器杯蓋（835・836），同杯（837～840），土師器甕（841・842），砥石（843）である。

835は器高が高い器形で，口縁部内面に短い返りが付く。836は口縁端部を短く下方に屈曲する。

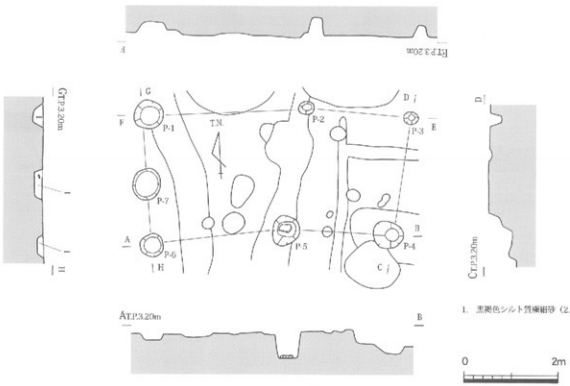
837・839・840は断面方形の高台が付く杯で，837・840の体部と底部の境に明確な稜を有する。839の底面は回転ヘラナデが施される。838は直線的な体部で外面に自然釉がかかる。

841・842は緩やかに口縁部が外反し，841の口縁端部は上方に若干摘み上げられる。842の口縁部内面・体部外面はハケが施される。

843は砂岩製であり，側面の全てが使用されるが，1面はあまり使用されていない。



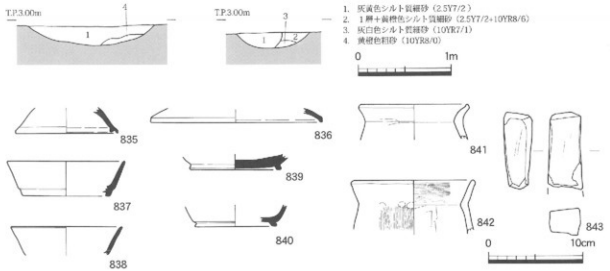
第 114 図　SB2010 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80、1/4）



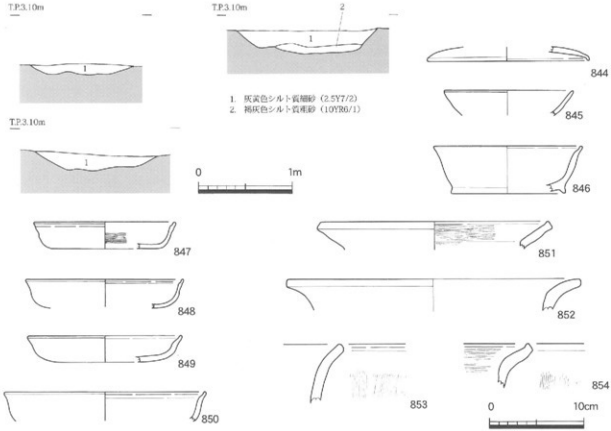
第 115 図　SB2011 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80）

SD2015（第 104・117・118 図）

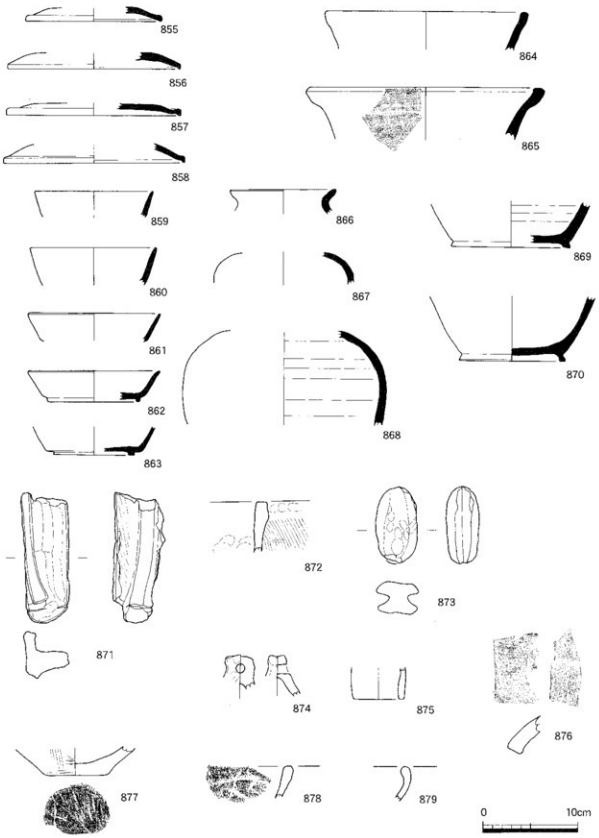
調査区中央から北西隅において検出した溝であり，ＳＤ 2016 を切り，ＳＤ 2023 に切られ，ＳＢ 2004 と重複する。検出した標高は 2.54 ～ 2.95 ｍである。溝の方位はＮ－ 83° －Ｗであり，ＳＤ 2038 と芯芯間距離 11.70 ｍの間隔で平行に延びる。溝の東端はＳＢ 2004 の東側に検出され，直線的に西方向へ延び調査区外に到る。溝の幅は 0.84 ～ 1.70 ｍ，検出面からの深さは 0.10 ～ 0.30 ｍを測る。断面は浅い船底形を呈し，底面のレベルは東から西に向かって比高差 0.30 ｍで緩やかに低くなる。埋土は２層であるが，灰黄色シルト質細砂が厚く堆積する。



第 116 図　SD2014 断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/4 0．1/4）



第 117 図　SD2015 断面図及び出土遺物実測図（1）（Ｓ：1/40．1/4）



第 118 図　SD2015 出土遺物実測図（2）（S：1/4）

遺物は，土師器杯蓋（844），同杯（845 ～ 850），同甕（851・852），土師質土器鍋（853・854），須恵器杯蓋（855 ～ 858），同杯（859 ～ 863），同甕（864・865），同壺（866 ～ 870），カマド（871・872），土錘（873），飯蛸壺（874・875），丸瓦（876），弥生土器甕（877），縄文土器浅鉢（878・879）である。

844 は低い器高で口縁端部を非常に短く下方に屈曲させる。

846 は口縁端部が急に薄くなり，内面に沈線状の凹みを巡らし，高台を有する。847 ～ 850 は口縁端部を内方に屈曲させ，内面に沈線状の凹みを巡らす。847 は内面に横方向のヘラミガキが施され，底面は回転糸切り後にナデが施される。848・849 の底面はナデが施される。

851 の口縁部内面は横方向のハケが施される。

855 ～ 858 は低い器高で口縁端部を非常に短く下方に屈曲させる。856 の天井部外面は回転ヘラケズリ，857 の天井部外面は回転ヘラキリ後にナデ，内面ヘラナデが施される。

859 ～ 863 は直線的な体部の杯で，862・863 は低い高台を有する。863 の底面は回転ヘラキリ後のナデが施される。

865 は外面に波状文を施す。

866 は小形の壺，867 は体部上位で外面に自然釉がかかる。868 は内面にロクロ成形痕を明瞭に残す。869 は内面にロクロ成形痕を明瞭に残し，底面に回転ヘラケズリが施される。

873 は側面に溝を有する土錘である。

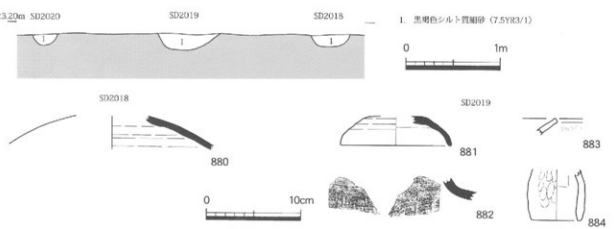
876 は凹面に布目が残り，凸面にヘラナデが施される。

877 は外面に平行目のタタキ・ヘラナデが施され，底面に木葉痕が残る。878 は山形口縁で外面に沈線が施され，879 は大きく内湾する。

SD2018（第 104・119 図）

調査区東側において検出した溝であり，ＳＤ 2001 ～ 2004 に切られ，ＳＢ 2001 と重複する。検出した標高は 3.06 ～ 3.11 ｍである。溝の方位はＮ－３°－Ｅであり，ＳＤ 2019・2020 と平行に延びる。溝の南端はＳＸ 2001 の西側に検出され，ほぼ直線的に北方向に延びる。溝の幅は 0.28 ～ 0.74 ｍを測り北になるにしたがい太くなる。深さは 0.10 ～ 0.26 ｍを測る。断面は浅い船底形を呈し，底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなる。溝の規模と平面形から判断すると，溝は本来南方に延びていたと考えられる。

遺物は，須恵器甕（880）であり，内面にロクロ成形痕を明瞭に残す。



第 119 図　SD2018 ～ 2020 断面図及び出土遺物実測図（S：1/40．1/4）

SD2019（第 104・119 図）

調査区東側において検出した溝であり，ＳＤ 2001 ～ 2004 に切られ，ＳＢ 2001 と重複する。検出した標高は 3.04 ～ 3.11 mである。溝の方位はＮ－３°－Ｅであり，ＳＤ 2018 とＳＤ 2020 の中間に位置し，２本の溝と平行に延びる。溝の幅は 0.28 ～ 1.16 mを測り北になるにしたがい太くなる。深さは 0.02 ～ 0.25 mを測る。断面は浅い船底形を呈し，底面のレベルは南から北に向かって緩やかに低くなる。

遺物は，須恵器蓋（881），同甕 882），土師器甕（883），飯蛸壺（884）である。

881 は口縁部と体部の境に稜を持ち，天井部内面に黄緑色の釉がかかる。

SD2020（第 104・119 図）

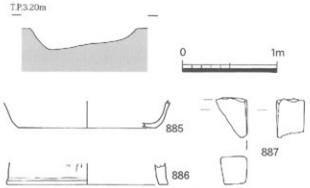
調査区東側において検出した溝であり，ＳＤ 2001 ～ 2003 に切られ，ＳＢ 2001 と重複する。検出した標高は 3.06 mである。溝の方位はＮ－３°－Ｅであり，ＳＤ 2018・2019 の西側に位置し，２本の溝と平行に延びる。溝の幅は 0.08 ～ 0.42 mを測り北になるにしたがい太くなる。深さは 0.03 ～ 0.19 mを測る。断面は浅い船底形を呈し，底面のレベルは南から北に緩やかに低くなる。溝の規模と平面形から判断すると，溝は本来南方に延びていたと考えられる。

遺物は，土師器・須恵器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

SD2021（第 104・120 図）

調査区東側において検出した溝であり，ＳＤ 2020，ＳＢ 2002 と重複する。検出した標高は 3.02 ～ 3.09 mである。溝の方位はＮ－ 62°－Ｅであり，溝の幅は 1.10 m，深さは 0.23 mを測る。断面は浅い逆台形を呈する。底面のレベルはほぼ平坦である。

遺物は，土師器杯（885），カマド（886），砥石（887）である。

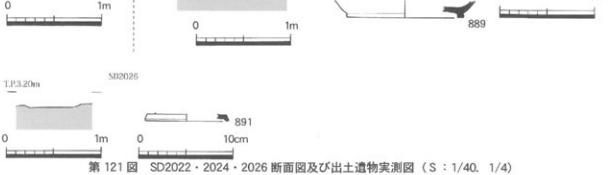


第 120 図　SD2021 断面図及び出土遺物実測図
（Ｓ：1/40，1/4，1/2）

SD2022（第 104・121 図）

調査区東側において検出した溝であり，ＳＤ 2006 に切られ，ＳＤ 2026 と重複する。検出した標高は 3.02 ～ 3.11 mである。溝の方位はＮ－ 20°－Ｗであり，若干湾曲する。溝の幅は 0.24 ～ 0.44 m，深さは 0.05 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の破片数点のみであり，図化できるものはない。



第 121 図　SD2022・2024・2026 断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/40，1/4）

SD2024（第104・121図）

調査区中央において検出した溝である。検出した標高は2.97 mである。溝は逆「く」の字形に屈曲し，方向は南北である。溝の全長は約2.90 m，幅は0.36～0.93 m，深さは0.05～0.24 mを測る。断面は船底形を呈する。底面は北側に向かって深くなる。

遺物は，須恵器杯蓋（888），同杯（889），土師質土器鍋（890）である。

888は低い器高で，口縁部はS字形に屈曲する。

SD2025（第104図）

調査区中央北端において検出した溝であり，SB 2010と重複する。検出した標高は2.86 mである。溝の方位はN－70°－Wである。溝の幅は0.50 m，深さは0.11 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器・須恵器の破片数点のみであり，図化できるものはない。

SD2026（第104・121図）

調査区東側において検出した溝であり，SD 2027に切られ，SD 2022と重複する。検出した標高は3.03～3.11 mである。溝の方向は南東－北西であり，若干湾曲する。溝の幅は0.62 m，深さは0.04 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，須恵器高杯（891）である。

SD2038（第104・122図）

調査区中央南端から西側中央において検出した溝であり，SD 2016を切り，SB 2005，SD 2012・2040・2042に切られる。検出した標高は2.71～3.02 mである。溝の方位はN－83°－Wであり，SD 2015と芯芯間距離11.70 mの間隔で平行に延びる。溝の延長線上には西接する1工区のSD 1023があり，同一遺構の可能性が考えられる。溝の幅は0.82～1.32 m，検出面からの深さは0.10～0.18 mを測る。断面は浅い逆台形を呈し，底面のレベルは東から西に向かって比高差0.34 mで緩やかに低くなる。埋土は灰黄色シルト質細砂の単一層である。

遺物は，土師器杯（892），同皿（893～898），同甕（899～903），須恵器杯蓋（904～906），同杯（907～915），同壺（916），同甕（917）である。

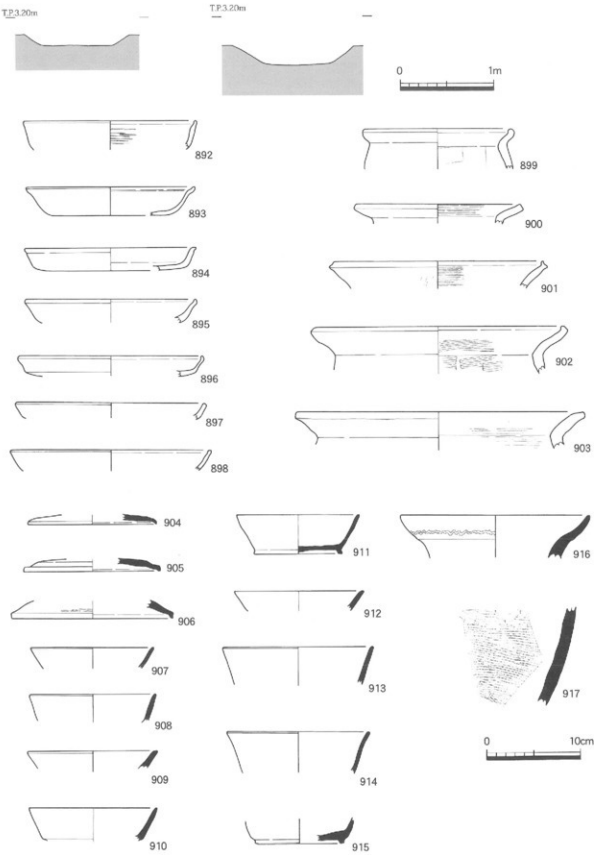
892は口縁端部を外反し，底面にナデが施される。893～896は口縁端部を内方に屈曲させ，内面に沈線状の凹みを巡らす。893・895・896は内外面にナデが施され，894は外面にナデ，内面にヘラミガキが施される。897は内湾気味の体部から口縁部に到る。898は口縁端部内面に僅かな凹みを巡らす。

899は口縁端部を丸くおさめ上方に若干拡張し，体部内面に板ナデが施される。900は口縁端部を角張らせ，口縁部内面に横方向のハケが施される。901は口縁端部を細く摘み上げ，口縁部外面に縦方向のハケ後にヨコナデ，内面に横方向のハケが施される。902は口縁端部を上方に拡張し，口縁部内面にヨコナデ・粗いハケ，体部内面に横方向の粗いハケが施される。903は口縁部にナデ，体部内面に横方向のハケが施される。

904～906は低い器高で口縁端部を非常に短く下方に屈曲させる。905は口縁部と天井部の境が不明瞭であり，天井部外面にナデが施される。904・906は口縁部と天井部の境に明瞭な稜を持ち，906は外面に溶着痕がある。

907～914は直線的な体部であり，911の底面は回転ヘラキリ後にナデが施される。915の底面はナデが施される。

916は外面に波状文1条，917の外面は平行目のタタキ，内面は当て具痕が残される。

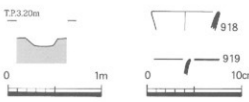


第 122 図　SD2038 断面図及び出土遺物実測図（S：1/40. 1/4）

SD2040（第 104・123 図）

調査区南西側において検出した溝であり，ＳＤ 2016 を切り，ＳＤ 2038 と重複する。検出した標高は 3.00 mである。溝の方位はＮ－７°－Ｅである。幅は 0.40 m，深さは 0.07 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，須恵器壺（918），同杯（919）である。



第 123 図　SD2040 断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/40，1/4）

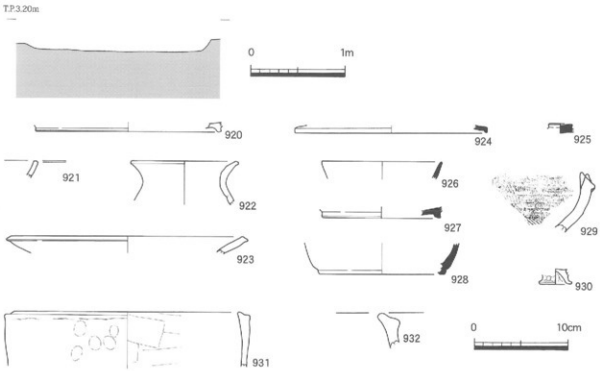
SD2042（第 104・124 図）

調査区南西側において検出した溝であり，ＳＤ 2016 を切り，ＳＤ 2038 と重複する。検出した標高は 2.95 mである。溝の方位はＮ－５°－Ｅである。幅は 1.00 m，深さは 0.10 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師器皿（920），同杯（921），同甕（922・923），須恵器杯蓋（924・925），同杯（926・927），同甕（928），陶器擂鉢（929），製塩土器（930），土師質土器足釜（931・932）である。

920 は低い高台が付く。922 は小形の甕で，口縁部は外反する。

924 は口縁端部を非常に短く下方に屈曲させる。929 は備前焼である。



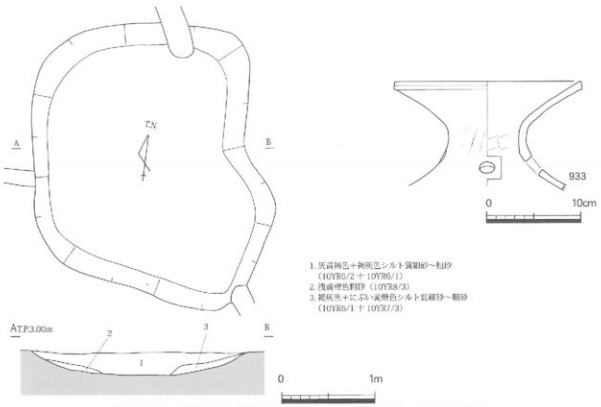
第 124 図　SD2042 断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/40，1/4）

（3）土坑

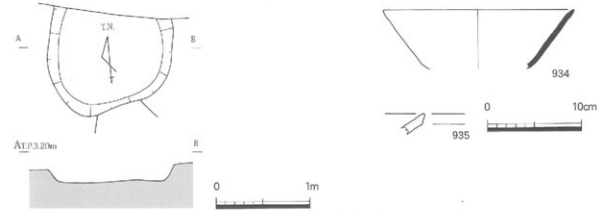
SK2006（第 125 図）

調査区中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり，ＳＤ 2016 を切っている。検出した標高は 2.86 mである。平面形は不整な隅丸方形を呈し，南東隅が大きく拡張する。規模は南北方向の長軸 2.85 m，東西方向の短軸 2.27 m，検出面からの深さ 0.26 mを測る。断面は船底形を呈し，底面は平坦である。埋土は３層である。

図化できた遺物は，弥生土器器台（933）のみであるが，土師器・須恵器の小片が出土している。933 は脚部に４個の円孔を有する。



第 125 図　SK2006 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40. 1/4）



第 126 図　SK2012 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40. 1/4）

SK2012（第 126 図）

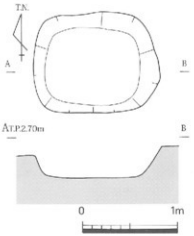
調査区中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり，S D 2015 に切られ，S B 2004 と重複する。検出した標高は 2.94 mである。平面形は不整な円形を呈し，規模は東西方向の直径 1.32 m，深さ 0.17 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，須恵器鉢（934），土師質土器鍋（935）である。

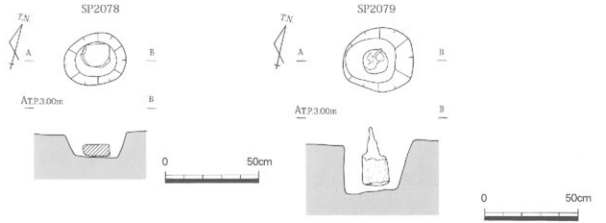
SK2021（第 127 図）

調査区西端中央において検出した土坑である。検出した標高は 2.53 mである。平面形は隅丸方形を呈し，規模は東西方向の長軸 1.33 m，南北方向の短軸 1.04 m，検出面からの深さ 0.25 mを測る。断面は逆台形を呈する。

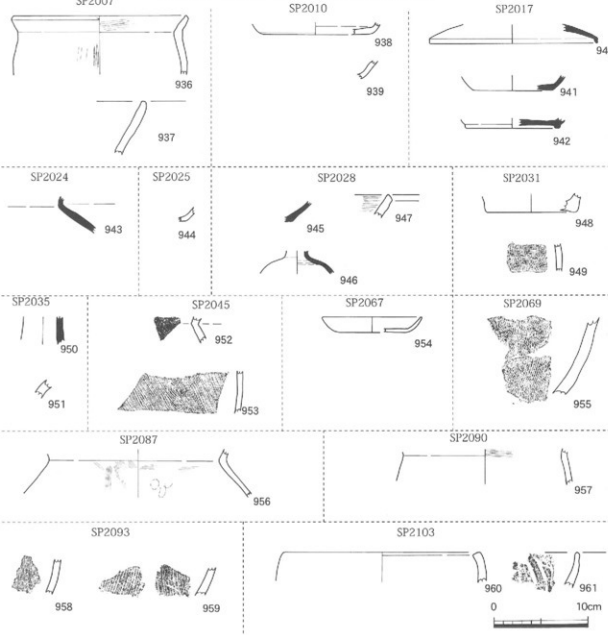
遺物は，須恵器・土師質土器の小片数点のみである。



第 127 図　SK2021 平・断面図（S：1/40）



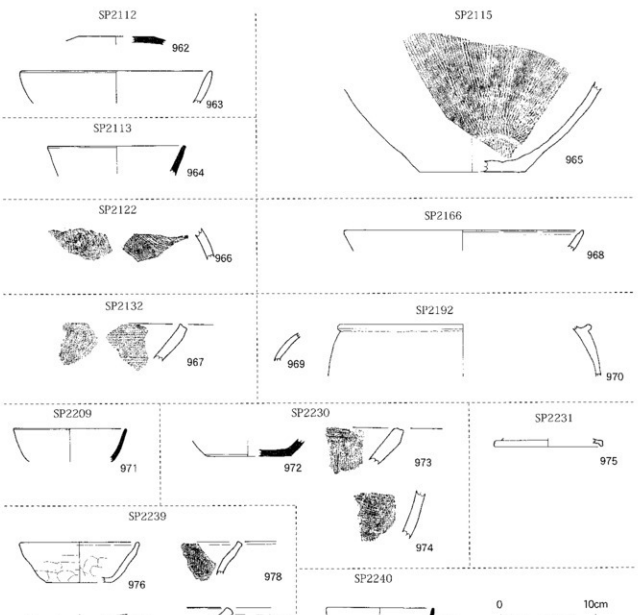
第 128 図　SP2078・2079 平・断面図（S：1/20）



第 129 図　2 工区 SP 出土遺物実測図（1）（S：1/4）

（4）柱穴（第128～132図）

936・937はSP2007出土である。936は土師器甕で体部外面に縦方向のハケ，口縁部内面に横方向のハケが施される。937は縄文土器深鉢である。938・939はSP2010出土の土師器杯である。940～942はSP2017出土で，940は須恵器杯蓋であり，口縁端部を下方に短く屈曲する。941・942は須恵器杯である。943はSP2024出土の須恵器壺で，外面に自然釉がかかる。944はSP2025出土の土師器杯である。945～947はSP2028出土で，945は須恵器杯，946は須恵器の小形壺で内面にロクロ成形痕を残し，947は土師器甕で内面に横方向のハケが施される。948・949はSP2031出土で，948は弥生土器甕，949は土師器甕で外面にハケが施される。950・951・982はSP2035出土で，950は須恵器高杯，951は土師器甕，982は断面四角形の鉄釘である。952・953はSP2045出土の土師器甕で，外面に斜め方向のハケが施される。954はSP2067出土の土師器杯で，底面に回転糸切りが施される。955はSP2069出土の土師器鍋で，外面にハケ，内面にナデが施される。956はSP2087出土の土師器甕で，外面にハケが施される。957はSP2090出

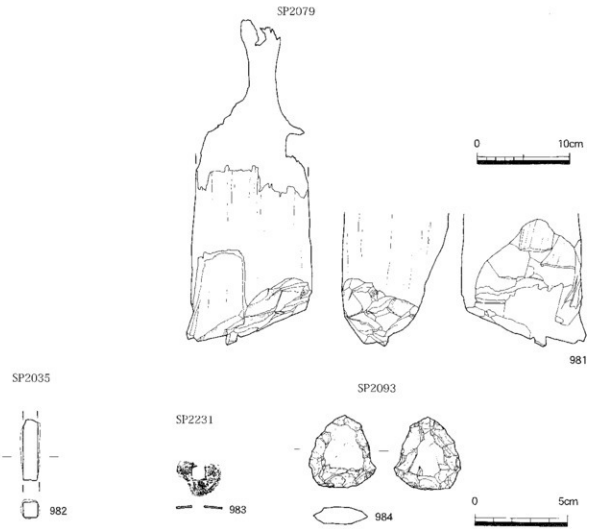


第130図　2工区SP出土遺物実測図（2）（S：1/4）

上の土師器甕である。958・959・984はＳＰ2093出土で，958・959は土師器甕であり，984はサヌカイト製の楔形石器で両面から丁寧な加工が行われる。960・961はＳＰ2103出土で，960は土師質土器鉢，961は縄文土器浅鉢で外面に沈線による模様がある。

962・963はＳＰ2112出土で，962は須恵器杯蓋，963は土師器杯である。964はＳＰ2113出土の須恵器杯である。965はＳＰ2115出土の備前焼である。966はＳＰ2122出土の土師器甕で，内外面にハケが施される。967はＳＰ2132出土の土師質土器鍋で，口縁部外面に縦方向のハケ，内面に横方向のハケが施される。968はＳＰ2166出土の土師器甕である。969・970はＳＰ2192出土で，969は土師器甕の口縁部片，970は土師質土器足釜で，上向き気味の鍔が付く。971はＳＰ2209出土の須恵器杯である。972～974はＳＰ2230出土で，972は須恵器杯で底面にナデが施される。973は土師質土器甕で，外面に縦方向のハケ，内面に横方向のハケが施される。974は土師器甕で，外面に平行タタキ，内面に板ナデが施される。975・983はＳＰ2231出土で，975は須恵器蓋で口縁端部を下方に短く屈曲する。983は銭の破片で両面とも錆が著しい。976～979はＳＰ2239出土で，976は土師器杯で体部内外面にヘラケズリが施される。977は同杯，978は同甕で外面に縦方向のハケが施される。979は土師質土器鍋である。980はＳＰ2240出土の須恵器杯である。

981はＳＰ2079出土の柱材であり，現存長34.5㎝あるが上部の16㎝は芯のみである。柱材の基部は2方向から明瞭な加工が行われる。



第131図　2工区SP出土遺物実測図（3）（S：1/40．1/4）

SP2163（第 132 図）

調査区南東側において検出した柱穴であり，S D 2028 に切られる。検出した標高は 3.08 mである。柱穴の平面形は不整な楕円形を呈し，北東隅が角張る。規模は南北方向の長軸 0.85 m，東西方向の短軸 0.65 m，検出面からの深さ 0.20 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。多量の土器が南北方向から流れ込んだような状態で出土した。

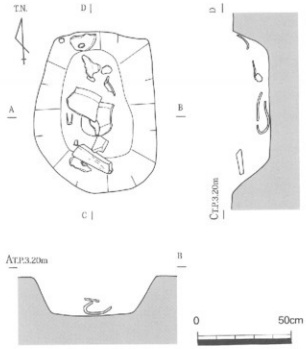
遺物は，須恵器杯蓋（985・986），土師器杯（987），同甕（988 ～ 990），同鍋（991・992）である。

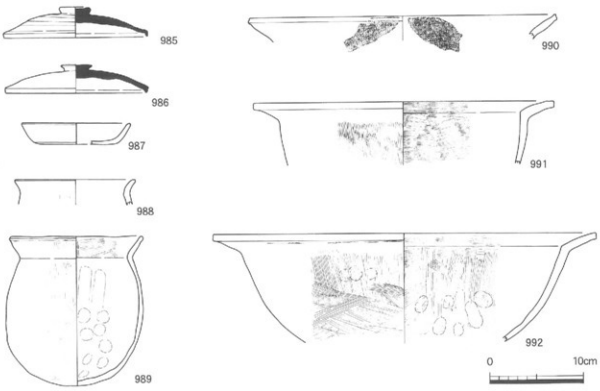
985・986 は宝珠形の摘みを持ち，口縁端部を下方に短く屈曲する。985 の天井部内外面は回転ヘラケズリが施される。986 は天井部外面に回転ヘラケズリ，内面にナデが施される。

987 は内外面にナデが施される。

989 は丸底で口縁部内外面と体部外面に 10 本 1 単位のハケが施される。体部内面は指頭圧痕・ヘラナデが施される。990 は口縁部内外面にハケが施される。

991・992 は内湾する体部から口縁部が屈曲し大きく外方に広がる。口縁部外面はヨコナデ，口縁部内面と体部はハケが施される。





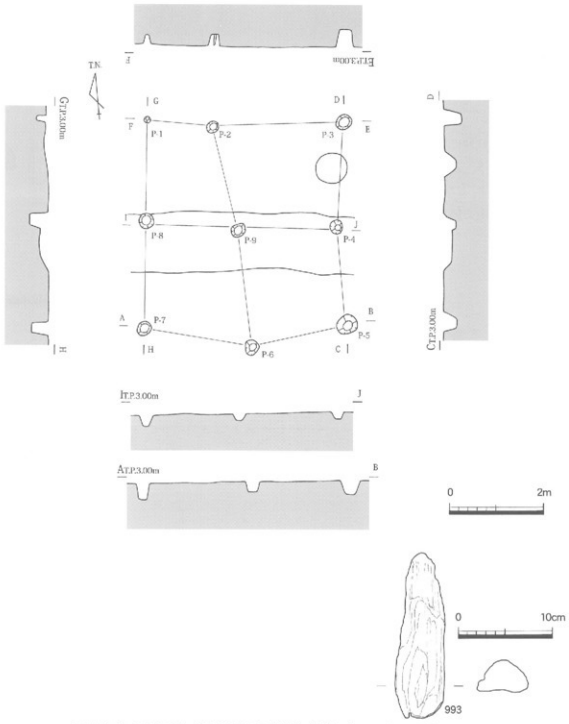
第 132 図　SP2163 平・断面図及び出土遺物実測図（S ：1/20. 1/4）

3　江戸時代

（1）掘立柱建物跡

SB2005（第 133 図）

調査区南西隅において検出した総柱の掘立柱建物跡であり，S D 2038 を切る。検出した標高は 2.80 ～ 2.92 mである。規模は東西 2 間，南北 2 間（4.68 × 4.70 m）であり，平面形は正方形である。しかし，北列側柱のP－2は中央より西側に位置し，南列側柱のP－6はP－5とP－7を結ぶ線より南側に位置する。P－1・2の芯芯間距離は 1.45 m，P－2・3の芯芯間距離は 2.80 mを測り，南列側柱の芯芯間距離は 2.10 mと 2.35 m，東列側柱と西列側柱の芯芯間距離は 2.10 ～ 2.30 mを測る。建物



第 133 図　SB2005 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80，1/4）

の主軸方位はN－3°－Eである。柱穴の平面形は円形を呈し，直径0.15 mのP－1を除いた他の柱穴の直径は0.25～0.45 mを測る。検出面からの深さは0.20～0.40 mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。P－2の底面直上に柱材（993）が直立した状態で出土した。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。

遺物は，柱材（993）と数点の磁器片である。

SB2006（第134図）

調査区中央南端において検出した掘立柱建物跡であり，SD 2012・2033・2035と重複する。検出した標高は2.96～3.01 mである。規模は東西2間，南北1間（5.42×4.62 m）であり，南列側柱東端のP－4は南側が調査区外にかかる。東西方向の芯芯間距離は2.50 m，南北の芯芯間距離は3.50 mを測るが，P－1・2間は2.05 mである。建物の主軸方位はN－88°－Wである。柱穴の平面形は不整な円形・楕円形を呈し，直径は0.45～0.70 mを測る。検出面からの深さは0.28～0.60 mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。P－2・6の底面直上に根石が検出され，P－1には柱材（997）が直立した状態で出土した。

遺物は，土師器皿（994），磁器碗（995），同皿（996），柱材（997）である。

994は直線的な体部から口縁部にいたる。

995は内外面に草花文の染付けがある。996は肥前系であり，見込みに蛇ノ目釉ハギがあり，底部は蛇ノ目高台である。

997は現存長33.3 cmであり，基部を全方向から加工し，擦痕が明瞭に残る。側面には枝払いが行われている。

SB2007（第135図）

調査区南東端において検出した掘立柱建物跡であり，SD 2019を切り，SK 2014と重複する。検出した標高は3.06 mである。規模は東西4間，南北2間（4.46×3.28 m）であり，建物の南東側は調査区外にかかる。西列側柱のP－9はP－1とP－8を結ぶ線より西側に位置する。東西方向の芯芯間距離は0.75～1.40 m，南北の芯芯間距離は1.45 mを測る。建物の主軸方位はN－84°－Wである。柱穴の平面形は不整な円形を呈し，直径は0.30～0.55 mを測る。検出面からの深さは0.05～0.35 mを測る。柱穴の断面は逆台形を呈する。

図化した遺物は，須恵器ハソウ（998），同杯（999）であるが，数点の磁器破片も出土した。

（2）溝

SD2001（第104・136図）

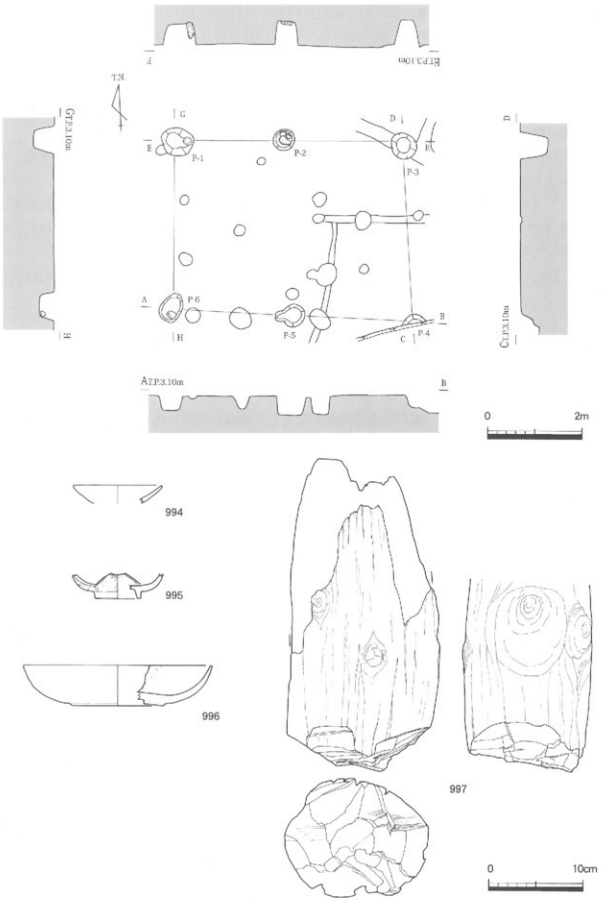
調査区北東隅において検出した溝であり，SB 2001，SD 2018～2020を切る。検出した標高は3.02～3.14 mである。溝の方位はN－82°－Wであり，東接する5工区のSD 5002が本遺構の延長線上にあるが，出土遺物の時期が違うため別遺構とする。溝の幅は0.70 m，検出面からの深さは0.08～0.13 mを測る。断面は浅い逆台形を呈し，底面は東から西に低くなる。

遺物は，陶器蓋（1000），同灯明具（1001）である。1000は屋島焼で内面に「屋島」「小」の刻印がある。1001は京・信楽系である。

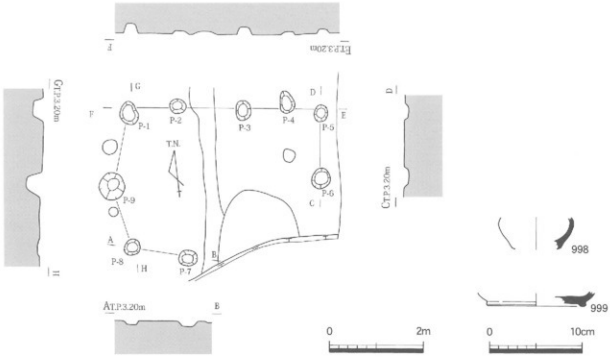
SD2002（第104・136図）

調査区北東隅において検出した溝であり，SD 2001の南側に平行する。検出した標高は3.09～3.14 mである。溝の方位はN－82°－Wである。溝の幅は0.24 m，検出面からの深さは0.07 mを測る。断面は浅い逆台形を呈し，底面は東から西に低くなる。

遺物は，数点の磁器小片のみである。



第 134 図　SB2006 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80. 1/4）



第 135 図　SB2007 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80、1/4）

SD2003（第 104・136 図）

調査区北東隅において検出した溝であり，S D 2001・2002 の南側に平行する。検出した標高は 3.09 mである。溝の方位はN－ 82° －Wである。溝の幅は 0.20 m，検出面からの深さは 0.05 mを測る。断面は浅い逆台形を呈し，底面は東から西に低くなる。

遺物は，数点の磁器小片のみである。

SD2004（第 104 図）

調査区北東側において検出した溝である。検出した標高は 3.05 mである。溝の方位はN－ 60° －Wである。溝の幅は 0.17 m，深さは 0.04 mを測る。遺物はない。

SD2005（第 104 図）

調査区北東隅において検出した溝であるが，部分的な検出であり規模は不明である。検出した標高は 3.14 mである。遺物はない。

SD2006（第 104・136 図）

調査区北側中央において検出した溝である。検出した標高は 3.05 mである。溝の方位はN－ 97° －Wである。溝の幅は 0.90 m，検出面からの深さは 0.10 mを測る。

遺物は，数点の磁器小片のみである。

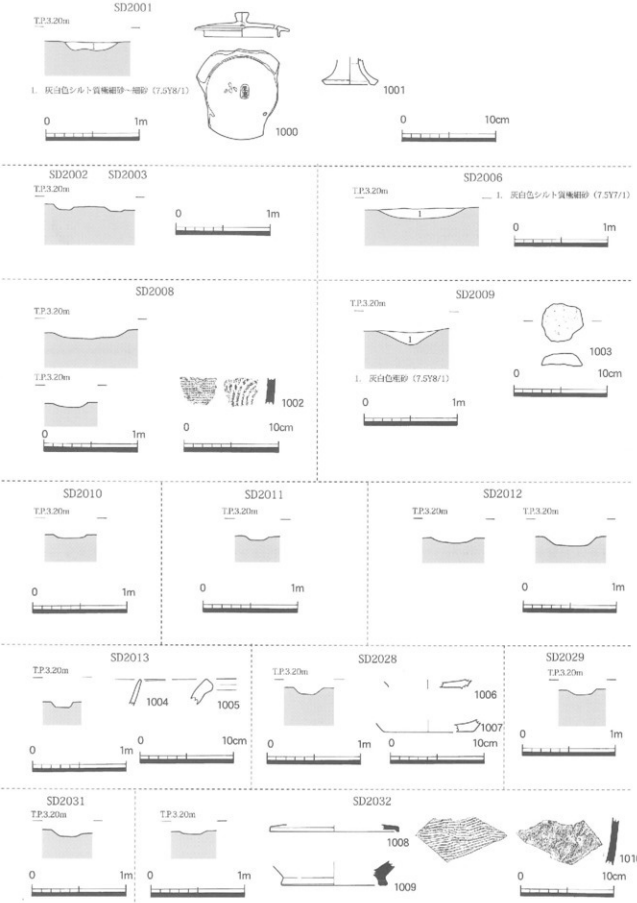
SD2007（第 104 図）

調査区北東側において検出した溝である。検出した標高は 3.05 mである。溝は「L」字形である。幅は 0.20 m，深さは 0.06 mを測る。遺物はない。

SD2008（第 104・136 図）

調査区中央東寄りにおいて検出した溝であり，S K 2003・2004 に切られる。検出した標高は 3.00 ～ 3.07 mである。溝の方位はN－ 10° －E である。溝の幅は 0.15 ～ 0.80 m，深さは 0.05 ～ 0.09 mを測る。断面は浅い逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，須恵器甕（1002），数点の磁器小片である。



第 136 図　2 工区 SD 断面図及び出土遺物実測図（S：1/40、1/4）

SD2009（第104・136図）

調査区中央東寄りにおいて検出した溝であり，ＳＢ2011を切る。検出した標高は2.90～3.01ｍである。溝の方位はＮ－6°－Ｅであり，北側は直線，南端は直角に曲がる。溝の幅は0.14～0.72ｍ，深さは0.10ｍを測る。断面は舟底形を呈し，底面は北に向かって下がる。

遺物は，軽石（1003）と数点の磁器小片である。

SD2010（第104・136図）

調査区中央において検出した溝であり，南端はＳＤ2031・2032と合流する。検出した標高は3.01ｍである。溝の方位はＮ－8°－Ｅである。溝の幅は0.30ｍ，深さは0.03ｍを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，数点の磁器小片のみである。

SD2011（第104・136図）

調査区中央において検出した溝である。検出した標高は3.01ｍである。溝の方位はＮ－5°－Ｅである。溝の幅は0.12～0.30ｍ，深さは0.03ｍを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，数点の磁器小片のみである。

SD2012（第104・136図）

調査区中央南側において検出した溝であり，南から北に延び，東方に直角に曲がる。東端はＳＤ2010・2032と合流する。検出した標高は3.01ｍである。溝の方位はＮ－8°－Ｅである。溝の幅は0.28～0.60ｍ，深さ0.05ｍを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，数点の磁器小片のみである。

SD2013（第104・136図）

調査区中央において検出した溝であり，２ヶ所途切れる部分がある。検出した標高は2.86～3.02ｍである。溝の方位はＮ－90°－Ｗである。溝の幅は0.15～0.50ｍ，深さは0.04ｍを測る。断面は逆台形を呈し，底面は東から西に向かって緩やかに低くなる。

遺物は，京・信楽系陶器碗（1004），土師質土器鍋（1005）である。

SD2017（第104図）

調査区中央において検出した溝である。検出した標高は2.97ｍである。溝の方位はＮ－87°－Ｗである。溝の幅は0.32ｍ，深さは0.04ｍを測る。断面は逆台形を呈する。遺物はない。

SD2023（第104図）

調査区北西側において検出した溝であり，１ヶ所途切れる部分がある。溝は西から東に延びほぼ直角に曲がり北方に延びる。検出した標高は2.57～2.62ｍである。溝の幅は0.26ｍ，深さは0.05ｍを測る。断面は逆台形を呈し，底面は西に向かって緩やかに低くなる。

遺物は出土していない。

SD2027～2037・2039・2041（第104・136図）

調査区南東隅～中央南端において検出した溝である。検出した標高は2.95～3.10ｍである。溝の方向は南北方向と東西方向であり，合流する溝が多い。溝の規模はほぼ同一であり，幅は0.12～0.32ｍ，深さは0.02～0.05ｍを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。

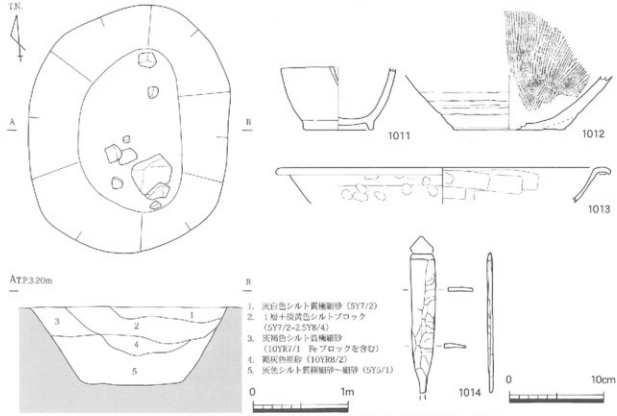
図化した遺物は，ＳＤ2028の土師器杯（1006），弥生土器甕（1007），ＳＤ2032の須恵器杯蓋（1008），同底部（1009），同甕（1010）であるが，その他の遺物としては陶磁器の小片が出土している。

（3）井戸

SE2001（第 137 図）

調査区中央やや東寄りにおいて検出した井戸である。検出した標高は 3.04 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は南北方向の長軸 2.64 m，東西方向の短軸 2.10 m，検出面からの深さ 0.82 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。埋土は 5 層であり，拳大～人頭大の石が多量に出土した。

遺物は，肥前系磁器瓶（1011），備前焼擂鉢（1012），土師質土器焙烙（1013），斎串（1014）である。1014 は柾目の板で，両面に丁寧な加工が行われる。



第 137 図　SE2001 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40，1/4）

SE2002（第 138・139 図）

調査区中央北東寄りにおいて検出した井戸であり，ＳＫ 2004 に切られる。検出した標高は 2.96 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は南北方向の長軸 5.90 m，東西方向の短軸 2.90 m，検出面からの深さ 0.70 mを測る。東西方向の断面は船底形を呈し，底面はほぼ平坦である。埋土は 6 層に分けられ，レンズ状堆積である。底面中央やや南寄りに基部を加工した杭（1020）が直立した状態で出土した。

遺物は，肥前系磁器碗（1015），同皿（1016），陶器行平鍋（1017），同皿（1018），土師質土器焙烙（1019），杭（1020）である。

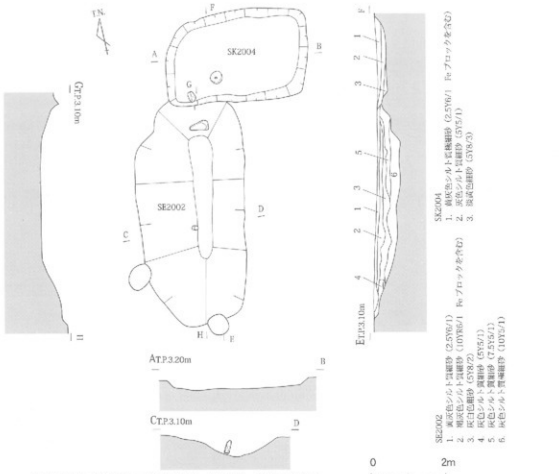
1015 は見込みと高台に砂目，1016 は見込みに砂目がある。1018 は高台に切り込みがある。

1020 は基部を 3 方向から加工し，側面にも加工痕が見られる。

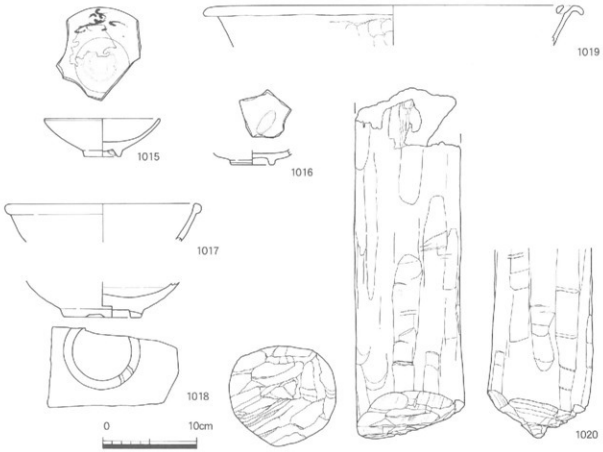
（4）土坑

SK2001（第 140 図）

調査区北東隅において検出した土坑である。検出した標高は 3.10 mである。平面形は不整な隅丸



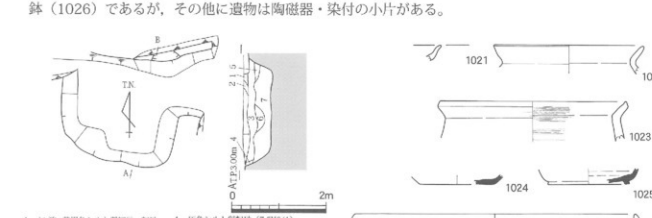
第 138 図　SK2004・SE2002 平・断面図（S：1/100）



第 139 図　SE2002 出土遺物実測図（S：1/4）

方形を呈し，規模は南北方向 2.02 m以上，東西方向 2.55 m，検出面からの深さ 0.60 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。埋土は7層である。

図化した遺物は，土師器皿（1021），同甕（1022・1023），須恵器杯（1024・1025），備前焼擂鉢（1026）であるが，その他に遺物は陶磁器・染付の小片がある。



第 140 図　SK2001 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80、1/4）

SK2002（第 141 図）

調査区北東側において検出した土坑であり，東半分は調査区外である。検出した標高は 3.10 mである。平面形は不整な隅丸方形を呈し，規模は南北方向 2.44 m，東西方向 1.27 m以上，検出面からの深さ 0.60 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，数点の陶磁器小片のみである。

SK2003（第 141 図）

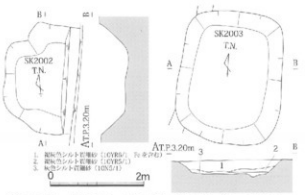
調査区中央東寄りにおいて検出した土坑であり，S E 2001 の東側である。検出した標高は 3.05 mである。平面形は隅丸方形を呈し，規模は南北方向の長軸 2.82 m，東西方向の短軸 1.20 m，検出面からの深さ 0.30 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，数点の陶磁器小片のみである。

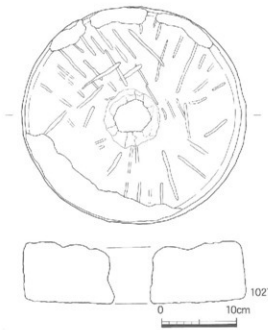
SK2004（第 138・142 図）

調査区中央北端において検出した土坑であり，S E 2002 を切る。検出した標高は 3.00 mである。平面形は長方形を呈し，規模は東西の長軸 3.82 m，南北の短軸 2.44 m，深さ 0.32 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，集塊凝灰岩製の石臼（1027），数点の陶磁器小片である。



第 141 図　SK2002・2003 平・断面図（S：1/80）

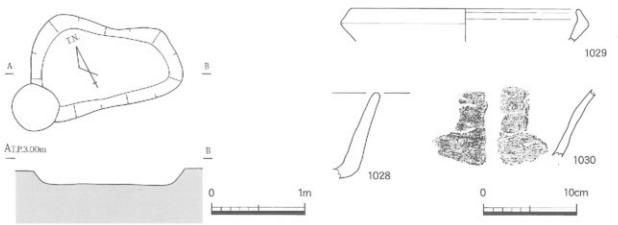


第 142 図　SK2004 出土遺物実測図（S：1/5）

SK2010（第 143 図）

調査区中央北端において検出した土坑である。検出した標高は 2.90 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は東西方向の長軸 1.63 m，南北方向の短軸 1.12 m，検出面からの深さ 0.19 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，瓦質土器鉢（1028），縄文土器浅鉢（1029），同深鉢（1030）である。



第 143 図　SK2010 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40．1/4）

SK2014 第 144 図）

調査区南東隅において検出した土坑であり，南半分は調査区域外である。検出した標高は 3.05 m である。平面形は不整な円形を呈し，規模は東西方向 1.80 m，南北方向 1.00 m以上，検出面からの深さ 0.39 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，数点の陶磁器小片のみである。

SK2015（第 144 図）

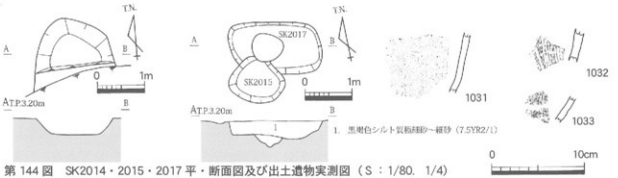
調査区南東側において検出した土坑であり，S K 2017 と重複する。検出した標高は 3.10 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，規模は東西方向の長軸 1.22 m，南北方向の短軸 0.98 m，検出面からの深さ 0.10 mを測る。断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。

遺物は，数点の陶磁器小片のみである。

SK2017（第 144 図）

調査区南東側において検出した土坑であり，S K 2015 と重複する。検出した標高は 3.10 mである。平面形は不整な隅丸方形を呈し，規模は東西方向の長軸 2.03 m，南北方向の短軸 1.10 m，検出面からの深さ 0.40 mを測る。断面は逆台形を呈する。

遺物は，土師質土器甕（1031），備前焼擂鉢（1032），縄文土器浅鉢（1033）である。1033 は外面に沈線による模様がある。

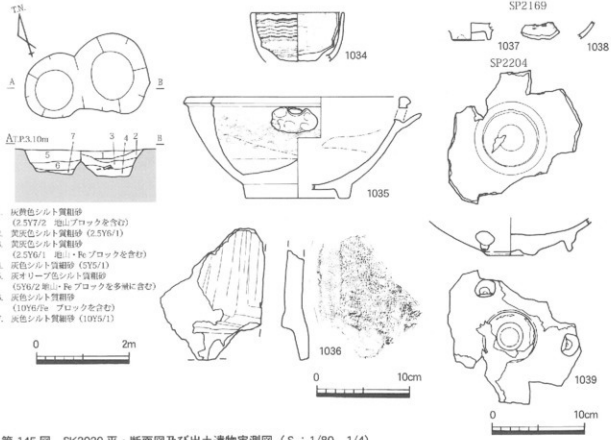


第 144 図　SK2014・2015・2017 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80．1/4）

SK2020（第 145 図）

調査区中央において検出した土坑であり，2 個の土坑が重なる。土層観察によれば東側の土坑が西側の土坑を切っている。検出した標高は 2.99 mである。平面形は円形を呈し，東側の土坑は直径 1.77 m，西側は 1.40 mを測り，深さは共に 0.60 mを測る。

遺物は，肥前系陶器碗（1034），肥前系陶器行平鍋（1035），丸瓦（1036）である。



第 145 図　SK2020 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80，1/4）

第 146 図　2 工区 SP 出土遺物実測図（S：1/4）

（5）柱穴（第 146 図）

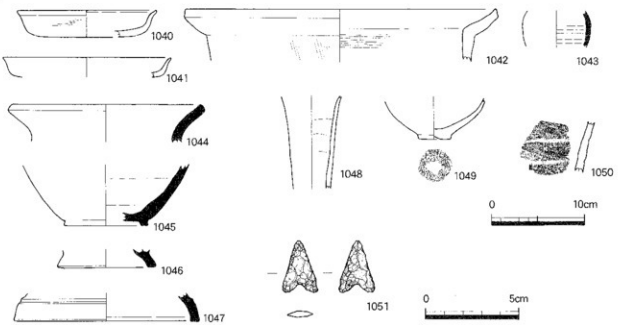
1037・1038 はＳＰ 2196 より出土した肥前系磁器碗であり，1039 はＳＰ 2204 より出土した肥前系磁器大皿であり，外面に形骸化した脚が付き，見込みに蛇ノ目釉ハギ・溶着痕がある。

4　2 工区包含層出土遺物

1040・1041 は土師器皿であり，1040 は口縁部が外方に屈曲し体部外面にヘラミガキ・ナデが施される。1042 は土師質土器鍋で，体部にハケが施される。1043 は須恵器小形壺，1044 は同甕，1045・1046 は同壺である。1047 は同高杯であり，外面に沈線を巡らす。1048 は弥生土器細頸壺で，内面に接合痕が残る。1049 は同鉢で，底面に木葉痕がある。1050 は縄文土器深鉢で，沈線による模様が施される。1051 はサヌカイト製の凹基式石鏃である。

3．3 工区

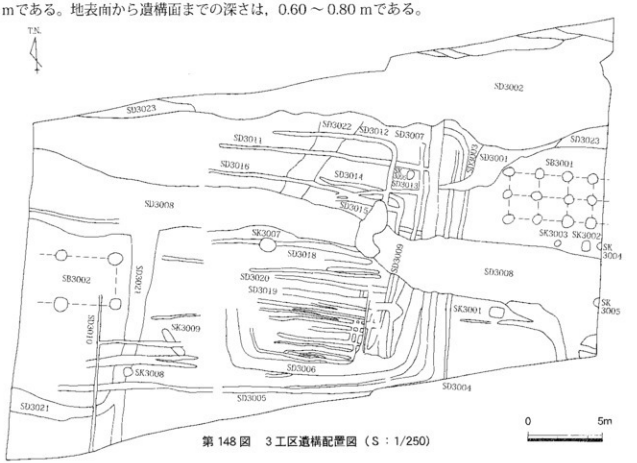
3 工区は本遺跡の東端に位置し，（財）香川県埋蔵文化財調査センターが調査を実施した小山・南谷遺跡と隣接する。調査区の平面形は長方形を呈し，東西方向の全長は約 40.00 m，幅は約 23.00 mである。調査区中央の南北軸座標値はＸ＝ 146.810，東西軸座標値はＹ＝ 55.870 である。西端は宅



第 147 図　2 工区包含層出土遺物実測図（S：1/4，1/2）

地への進入道路に，東端は主要地方道塩江屋島西線（通称，新田街道）に区画される。遺構面は 1 面であり，地山を検出面とする。遺構の時期は古代と江戸時代に比定され，掘立柱建物跡や溝・土坑等の多数の遺構が調査区全域に検出された。

調査区全体の土層は，上層から現水田耕作土・7 枚の近世条里型水田・遺構検出面の地山が堆積する。検出面のレベルは東から西に向かって緩やかに低くなっており，東端の標高は 4.70 m，西端では 4.00 mである。地表面から遺構面までの深さは，0.60 ～ 0.80 mである。



第 148 図　3 工区遺構配置図（S：1/250）

1　古代

（1）掘立柱建物跡

SB3001（第 150・151 図）

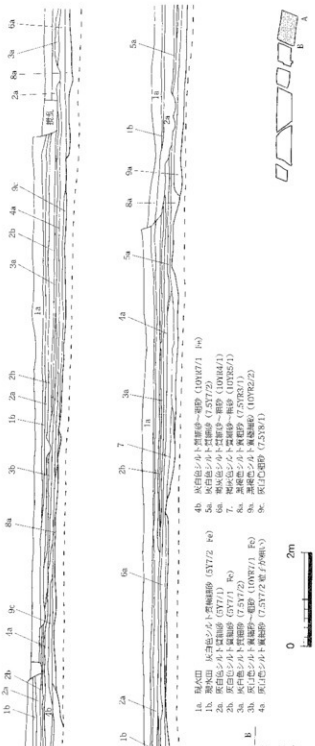
調査区東端において検出した総柱の掘立柱建物跡である。本建物跡は，小山・南谷遺跡のＳＢ 701 と同一遺構であり，両遺跡の平面図を合体させたのが第 151 図である。柱穴は 18 個検出し，Ｐ－１～４・10～17 は本遺跡で検出した柱穴である。検出した標高は 4.70～4.80 ｍである。規模は，東西５間×南北２間（9.80×3.75 ｍ）である。東西方向の芯々間距離は 1.50～2.00 ｍ，南北の芯々間距離は 1.75 ｍを測る。建物の主軸方位はＮ－94°－Ｗである。柱穴の平面形は円形を呈し，直径 0.60～0.85 ｍを測る。検出面からの深さは 0.38～0.55 ｍを測る。Ｐ－１～４・10・12・16・17 の上面には粘土を多量に含む土層が検出された。その位置は底面にある小穴とほぼ同一である。底面の柱痕と考えられる小穴はＰ－１・３～12・14～16・18 で検出された。

遺物は，土師器杯（1052），敲石蓋（1053）である。

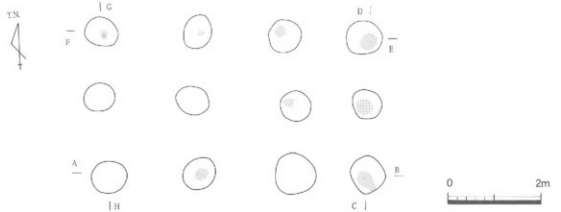
SB3002（第 152 図）

調査区西側中央において検出した掘立柱建物跡であり，ＳＤ 3008・3021 とＳＤ 6002 により方形に区画された内側に位置する。検出した標高は 4.02～4.11 ｍである。西側は調査区外となるため，掘立柱建物跡の全容は不明である。検出した規模は東西１×南北１間（4.50×4.30 ｍ）であるが，西側に広がる可能性が高い。東西の芯芯間距離は 3.90 ｍ，南北 3.15 ｍを測る。建物の主軸方位はＮ－84°－Ｗである。柱穴は円形を呈し，直径 0.75～1.00 ｍ，深さ 0.40～0.54 ｍを測る。全ての柱穴の底面に柱痕の小穴が検出された。

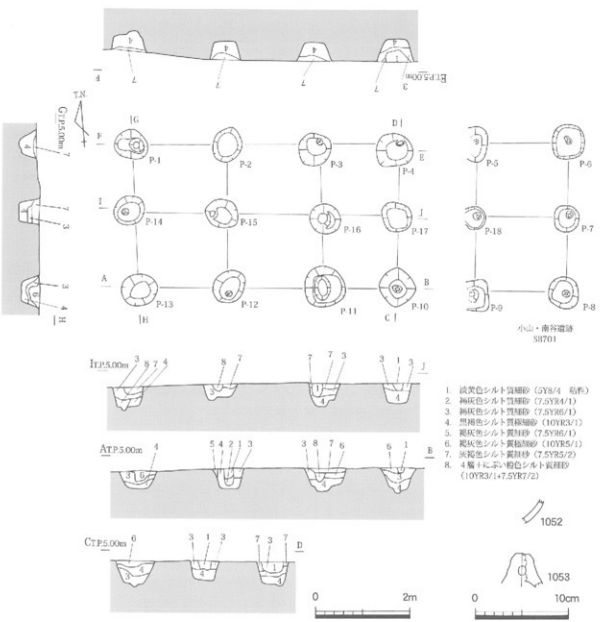
遺物は出土していない。



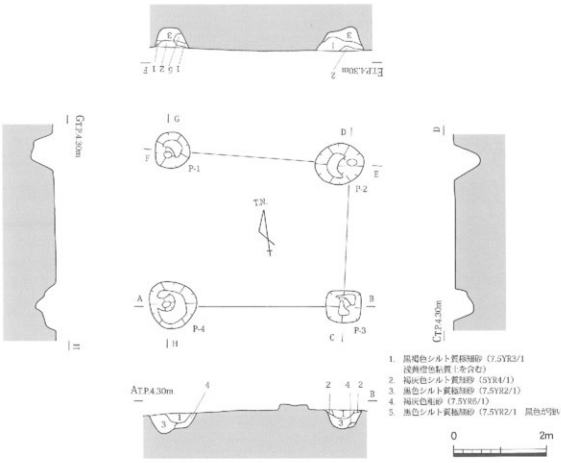
第 149 図　３工区掘立柱図（Ｓ：1/80）



第 150 図　SB3001 検出平面図（S：1/80）



第 151 図　SB3001 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/80．1/4）



第 152 図　S B3002 平・断面図（S：1/80）

（2）溝

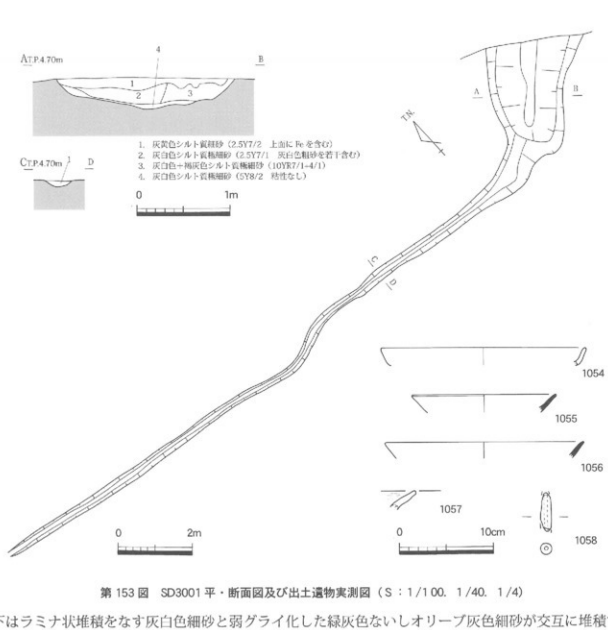
SD3001（第 153 図）

調査区中央から東側中央において検出した溝であり，S D 3003 ～ 3008・3011 ～ 3016 を切り，S D 3002 と重複する。検出した標高は 4.40 ～ 4.55 mである。溝の方位はN－ 100° －Eであり，若干蛇行する。S D 3002 と接する部分は土坑状になっている。溝の幅は 0.30 m，検出面からの深さは 0.05 ～ 0.14 mを測り，土坑状部分は幅 2.24 m，深さ 0.40 mである。溝部の断面は浅い船底形を呈し，底面のレベルは土坑状部分に向かって緩やかに下がる。

遺物は，土師器皿（1054），須恵器杯（1055・1056），土師器甕（1057），土錘（1058）である。1057 の内面はハケが施される。1058 は管状土錘である。

SD3002（第 154 ～ 158 図）

調査区中央北端から北東隅において検出した溝であり，S D 3023 を切る。本溝は小山・南谷遺跡のS D 701 と同一遺構である。検出した標高は 4.50 ～ 4.60 mである。溝の方位はN－ 92° －Eであり，S B 3001 の東西軸方向と一致する。このような溝と掘立柱建物跡との位置関係は小山・南谷遺跡においても同様であり，「流路方向はほぼ直線的に延びる建物南側部分でみると東西ラインから 4 ～ 5° 北に振る程度で，ほぼ東西方向を取っている。この方向は掘立柱建物跡の東西軸方向とほぼ一致している。」溝の幅は 4.60 ～ 6.50 m，検出面から最深部までの深さは 1.30 mを測る。北側の掘り方は急角度で落ち込んで底面に到り，南側は幅広い段を有し中央部で急激に落ち込む。底面の幅は 0.25 ～ 0.50 mであり，レベルは東から西に向かって緩やかに下がる。底面には数本の杭がほぼ等間隔に打ち込まれていた。埋土は基本的には砂層であり，上層には洪水に伴う砂層が厚く堆積し，その



第 153 図　SD3001 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/100．1/40．1/4）

下はラミナ状堆積をなす灰白色細砂と弱グライ化した緑灰色ないしオリーブ灰色細砂が交互に堆積する。このような堆積状態から判断すると，丘陵部からの洪水砂層により短期間に堆積したことが解り，さらにこの堆積層には２～３回の堆積時期があると考えられる。

遺物は，土師器小皿（1059），同杯（1060 ～ 1062），同椀（1063 ～ 1066），瓦器椀（1067），土師器甕（1068 ～ 1071），同甑（1072），須恵器杯蓋（1073 ～ 1075），同杯（1076・1077・1079 ～ 1088），同皿（1078），同高杯（1089），同壺（1090・1092・1093），同甕（1091・1094・1095），弥生土器甕（1096・1097），縄文土器浅鉢（1098 ～ 1101），同底部（1102・1103），カマド（1104 ～ 1110），土錘（1111），平瓦（1112 ～ 1114），加工木（1115 ～ 1134）である。

1059 は底面に回転ヘラキリが施される。1063・1064 は口縁端部が若干外反する。1065・1066 は黒色土器Ａ類で，1065 の内面に放射状の暗文，1066 は内面にヘラミガキ，底面に回転ヘラキリが施される。1067 は外面に指頭圧痕，内面にヘラミガキが施される。

1069 は体部外面に縦方向のハケ，内面に横方向のハケが施される。1071 は口縁端部を上方に若干拡張させ，体部外面に縦方向のハケ，口縁部・頸部の内面に横方向のハケが施される。1072 はバケツ形の器形に扁平な把手が付き，外面に粗いハケが施される。1073 の口縁部は明瞭な稜を境に下方

に屈曲する。1074・1075の口縁部は短く屈曲する。1078は器高が低い。1083～1088は低い高台が付く。1083・1084・1087は底面にナデ，1085は中央に回転ヘラキリ，周辺に回転ヘラナデ，1086は回転ヘラケズリ，1088は回転ヘラケズリ後に回転ヘラナデが施される。1089は脚裾部が大きく外にひろがり，脚端部は短く下方に屈曲する。1095は外面にカキ目が施される。

1098は口縁端部・外面に沈線，1099は外面に沈線が施される。1100・1101は内面に凸帯が付く。1102・1103は高台状の底部である。

SD3003～3007・3009～3020

（第159・160図）

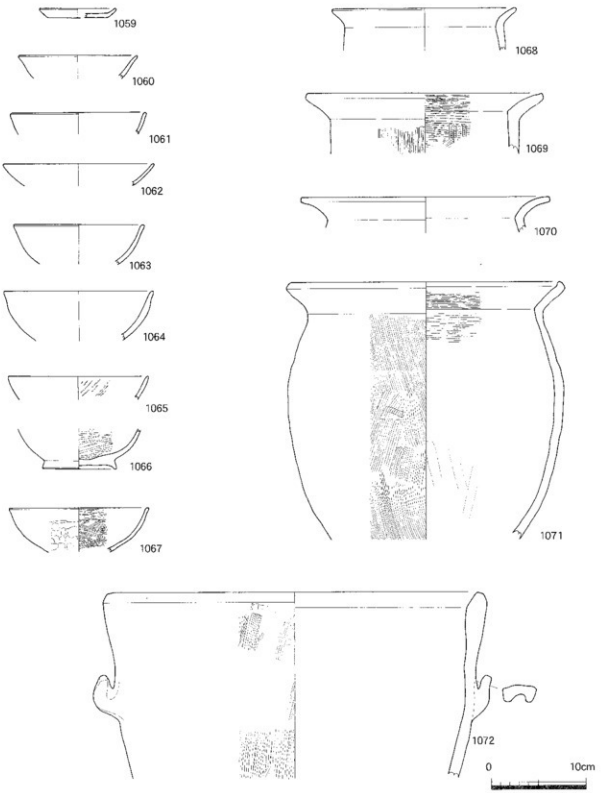
調査区中央にかけて検出した溝であり，SD3008・3021・3022を切る。これらの溝には切り合いがあり，SD3003はSD3006を切り，SD3010はSD3005を切る。検出した標高は4.21～4.60mである。大部分の溝の平面は西に開く「コ」の字型であるが，SD3006は南西端で北方向に屈曲しており方形に流路を取る可能性もある。溝の幅は0.30m前後であるが，SD3006は0.90m前後を測る広い溝である。検出面からの深さは0.05mであり，底面のレベルは東から西に向かって緩やかに下がる。

1135はSD3003出土の須恵器杯であり，底面に回転ヘラ削り後にナデが施される。

1136～1140はSD3005出土で，1136は土師器杯で，口縁端部内面に若干の凹みを巡らす。1137は土師器甕である。1138は須恵器杯蓋，1139は同杯で底面に回転ヘラケズリ後に静止ヘラナデが施される。1140は須恵器壺である。

1141～1145はSD3007出土である。1141は土師器杯蓋，1142は土師質土器甕，1143は平瓦，1144は飯蛸壺，1145は骨である。

第154図　SD3002・3023平・断面図（S：1/200，1/80）

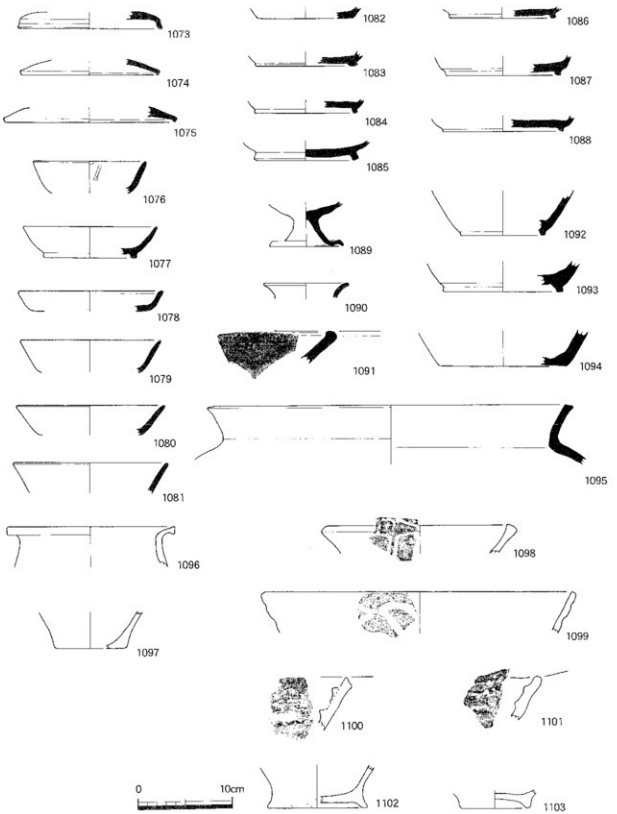


第 155 図　SD3002 出土遺物実測図（1）（S：1/4）

1146 ～ 1151 は S D 3011 出土である。1146 は土師器杯，1147・1148 は同甕，1149 ～ 1151 は須恵器杯である。

1152 ～ 1154 は S D 3012 出土である。1152 は須恵器杯で内外面に釉がかかる。1153 は同杯で底面に回転ヘラキリ後にナデが施される。1154 は土師質土器甕である。

1155 ～ 1157 は S D 3014 出土である。1155 は土師器杯，1156 は土師質土器甕，1157 は須恵

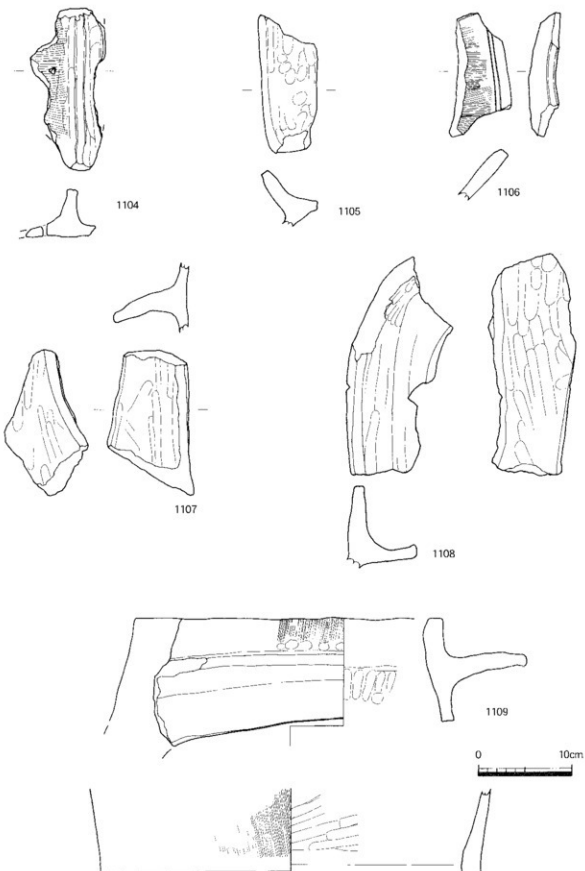


第 156 図　SD3002 出土遺物実測図（2）（S：1/4）

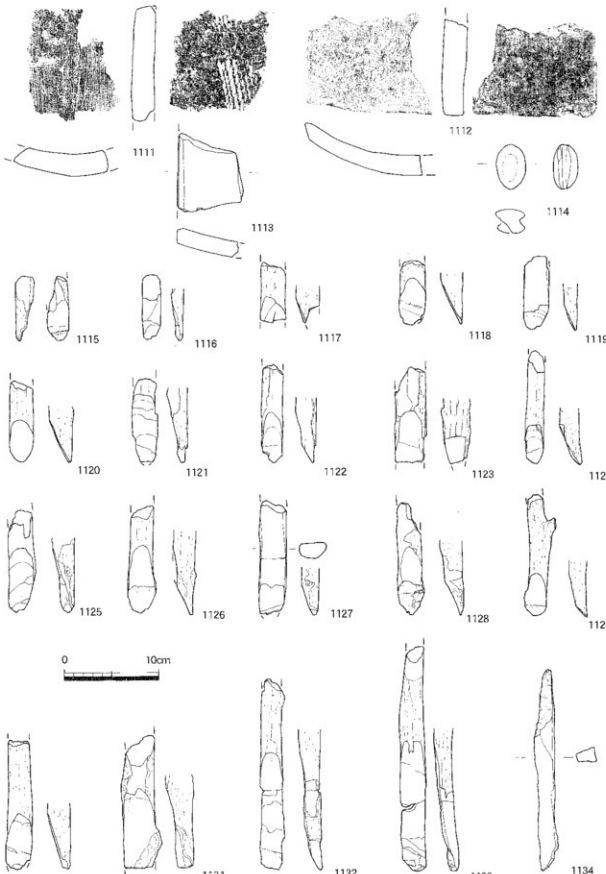
器盆である。

1158 は S D 3016 出土の土師器甕である。1159・1160 は S D 3017 出土で，1159 は弥生土器甕，1160 は須恵器杯である。

1161 ～ 1163 は S D 3019 出土で，1161 は須恵器杯，1162・1163 は土師器甕である。



第 157 図　SD3002 出土遺物実測図（3）（S：1/4）



第 158 図　SD3002 出土遺物実測図（4）（S：1/4）

第 159 図　SD3003～3007・3009～3020 平・断面図（S：1/1200. 1/40）